

經濟學講義終

國民經濟原論





スツッフ・スネハヨ・ルーカ
Karl Johannes Fuchs

國
另
錄
卷
編

第一編 國民經濟の根本概念

今茲に説明の順序として經濟生活の根本概念を叙述し様と思ふが今日の經濟生活の根本概念は現代に特有のもの多く必ずしも昔日の經濟生活の根本概念と同じくないのである。此編に説明する所は今日現在の國民經濟組織に於ける概念を主とする。今日の經濟組織は之れを名けて國民經濟と云ふ。國民經濟てふ經濟組織は數千年間の史的發展の結果として成立したものである。國民經濟以前の時代にあつては今日の經濟組織内に見るが如き根本概念は多く之を見る事が出来ない。從來の經濟學は進歩した今日の國民經濟生活を以て唯一の對象とし國民經濟生活内に行はるゝ總ての現象は直ちに凡ての發展階段に於ける經濟生活に適用し得るものとした。吾人今日の立場から見れば此は根本的大誤謬である。今日の經濟生活の如何なるものなるかを知るには少

くも先づ歴史に就て知り得る限り原始の時代に溯つて其淵源を究めなければならぬ。然るに今茲に經濟學を説き起すに方つては、此くの如き方法によるは不可能である。講述の順序として今日の經濟組織の根本概念に就て大體の知識を有つて居るものでなければ次編に至つて經濟組織の史的發展續て此經濟組織に關する科學的研究の史的發成を其現狀の敘述も亦之れを了解することは到底望まれない。故に今此第一編に述ぶる處は何れの意味に於ても最終完結のものでなく、後編に至つて更らに之れを擴め匡し、或は他の方面の考察を加ふることを要するものである。以下第一編に於いては現時經濟生活の根本概念を本文は主としてフックス氏の有名なる『國民經濟學』Fuchs, Volkswirtschaftslehre. Goshen'sche Sammlung に基いて略述し、之れを定本として、評論を試みようと思ふ。

第一章 分觀の概念

第一節

經濟學の研究の對象は國民經濟である。國民經濟は他の國家法律社會等の概念と同じく史的産物であつて、今日迄の人類經濟生活發展の最後の階段であり、最高の形態を表するものである。而して此の國民經濟を形成して居る最根本的の概念は、經濟行爲并に經濟の二者である。故に國民經濟とは何ぞやの間に對しては、先此二つの根本概念から順次解答を下した後でなければ答を與へることは出来ない。然るに經濟とは何であるかは經濟行爲の何者であるかを知つての後でなければ之れを解すること出来ず、經濟行爲の何たるかを言はうとするには、人類の行爲中特に經濟行爲を云ふもの、起る所以を知らなければ説明を下し難いのである。蓋し經濟行爲を云ふも、要するに人類生活上の行爲の一種たるに過ぎざるは言ふまでもないところである。人類の行動を一般に支配し影響する處の諸々の現象は、又たやがて其の經濟生活の行動の一種である經濟行爲の上にも影響支配を及ぼさずには已まぬものである。人類の行動一般を支配する原則を

離れて獨り經濟行爲を支配する原則のみを研究することは到底不可能に屬するのである。

從來の學者が經濟經濟行爲を云ふ概念の何であるかを説明するに或は財の概念から始むる人もあるし(1)、或は人類の經濟的本性を立點とする人もあり(2)、或は又た人間其者からすべしとも云ひ(3)、寧ろ經濟の概念其者のを以つて最始の概念とするもあり(4)、經濟に代ゆるに經濟行爲の概念を以て立點とすべしと論ずるものもある(5)。乍併此等の説明の方法は所謂循環論法になつて其何れから始めてもつまり最後に何か説明を要さないで分つたことである前提が一つ残して仕舞ふ。例へば財を以て立點として經濟行爲は財を得ることであり經濟は如此經濟行爲の總稱であること云ふときは然らば財は何であるかとの間に答へなければならぬ。然るに財は人間の欲望を充たすものであること答へる。さうすること欲望は然らば何であるかとの反問が起らざるを得ない、又人類の經濟的本性を以て立點としても其通りである。經濟的本性に驅られてする行爲が經濟行爲であること説明した丈で經濟的本性の何であるか、分らない間は、悉く半成の説明に止る。然るに經濟的本性は何であるか、問詰めて見れば人類の欲望を充たさんとする衝動と同意義になつて仕舞ふ。其他人間其者經濟其者經濟行爲其者を以て立點とするときは、分らないものを以て分らないものに答へ、一の未知數の値は他の未知數であること云ふこと、同じになる。殊に人間其者こと云ふは極めて幼稚な説明の仕方、經濟學は人間に關する學問であるは元より云ふ迄もないことである(6)。乍併人間の凡ての側を經濟學で研究するのでなく、唯其經濟生活に發現して居る處を研究する。言葉を換へて言へば經濟學は人間の經濟的方面を研究するのであることは言を要さぬ。さすれば經濟的方面とは如何なる方面を言ふや、問ふことを必要とする。處が經濟的方面は即ち經濟行爲なり、經濟なりとして此等を以て説明の立點とするときは、人間百般の行爲中特に經濟行爲となるもの、其然らざるものとは何に依て之れを判別するかの間が出て来る。經濟行爲とは人類の經濟を營む行爲なりと答へれば、然らば經濟とは何ぞやとの問が出て来て、つまり段々巡りをして元の處へ戻て来るの外はなくなる。然るに此經濟とは何ぞやとの間に答へるには、經濟が依て起り、經濟

行爲なるものが依て發動して来る淵源がなければならぬ。之れを名けて人類の欲望云ふ。即ち何れから説明を始めるにしても經濟の概念の出發點であり、到達點であるべきものは唯一つ此欲望である經濟行爲云々概念はこれから出立して歸納的に逆進して始めて解答し得るのである。

(1) Rau, Lehrbuch der Politischen Oekonomie. Leipzig. 1862-69, § 1.

W. Roscher, System der Volkswirtschaft I. 第四版迄は同じく財を由來點と云ふも第五版以後に於て其説を云ふ

(2) Adolf Wagner, Grundlagen der Volkswirtschaft. Leipzig. 1892 S. 73 ff. に於て人類の經濟的本質は經濟學の總論 absolute Kategorie なるものなるを論ず

(3) Schäffle, (Deutsche Vierteljahresschrift. 1861). Mensch u. Gut in der Volkswirtschaft. Ges. Aufs. I. 158 ff.

Roscher は其經濟原論第五版以後に於て又此説を取らぬ—— „Ausgangspunkt, wie Zielpunkt unserer Wissenschaft ist der Mensch“ S. 1.

ロハマントは其論に於て此説を云ふ——

Sahl, Rechtsphilosophie II. 1. 102. „muss die wahre, vollendete Nationalökonomie zu ihrem Prinzip haben die Person (den Menschen in seinem ganzen sittlich-geistigen wie sinnlichen Dasein) und das sittliche Reich, die sittlich geordnete und sittlich verbürgte Gemeinexistenz und Gemeinbetrachtung der Menschen, welcher die materiellen Güter und die materielle Befriedigung notwendige Träger sind“. Sehr charakteristisch beginnt statt dessendas System von Ad. Smith (Wealth of Nations, 1776) mit dem Begriffe der *j Irlichen Nationalarbeit*; das von J. B. Say (Traité d'économie politique, 1802) mit dem Begriffe *richesses*; das von Ricardo (Principles of Political Economy and Taxation, 1817) mit dem Begriffe *Value*. 云

R. Föhlmann 其論に於て云ふ——

Uebrigens thut man diesen „Klassikern des Liberalismus“ Unrecht wenn man über sie in Bausch und Bogen dahin aburteilt, dass sie eben „nur eine Philosophie des Reichtums“ gesehen hätten, welche „die Güter über die Menschen stellt.“ Dietzel, Theoretische Socialökonomik I. 1895. S. 136 f. bemerkt mit Recht, dass dies doch nicht für die ganze physiokratisch-smithische Schule zutrifft. Freilich dürfte es auf der andern Seite irreführend sein, wenn er alle Hauptvertreter des älteren

Liberalismus ohne weiteres als „Philosophen der Armut“ bezeichnet.

セーリカールドに就ては必ずしも言はず、アダム・スミスに關しては、その言の如し、蓋しスミスの國富論は其自身に完結せる一書として見るよりも、其道徳感情論の續編として讀みて始めて眞意を解すべきものなり、故にスミスは勞働を以て其經濟論の出发点として、たりと云ふよりも、其第二卷國富論に於て説明の便宜として之れを勞頭に置きたるものと見るべきなり。

(4) Lindwurm, Grundzüge der Staats- u. Privatwirtschaftslehre. Braunschweig 1866.

(5) H. Dietzel, Zeitschrift f. Staatswissenschaft. Bd. 37. 1883. — A. Wagner も亦多少此説に傾

然れども此等論者は經濟と經濟行爲との間に嚴密なる區別を爲さず、屢之れを混同せり、ワグナーを祖述する諸學者に至て殊に其弊を極む、我邦の學者亦概ね然らざるはなし。

(6) 註(6)を見よ、アダム・スミスに到りては殊に然り、經濟學の人間に關する學問なることは余りに自明にして特言を要せざるが故に、直に此人間の外界の財に對する關係としての勞働を以て其研究を始めたるはアダム・スミスなり、之れを誤解し經濟學の研究の對

象は單純に其自らの眼點より見たる富なりとしたるは、アダム・スミスの學なくしてアダム・スミスの口吻を承繼したる後世の學者なり、此等の末流に對しては正に Carlyle (Past and Present) Ruskin (Unto this last) 等の掲げたる反抗の聲は無益にてはあらざりき。

欲望は缺乏の感覺を之れを除かんとする願望を併せ稱する言葉である(7)。人間の生命は一定の欲望を充たすに依つて初めて維持せらるゝものである。數千年間の歴史に徴すれば、人類の物質上並に心靈上文化の發展は、要するに欲望の發展の結果、欲望増進の賜であると言つても差支ない。併ながら欲望は常に經濟上のみに限つて居るもので無い。他の學問にあつても亦欲望を論ずべきである(8)。心理學、倫理學等皆然りである。

(7) Gefühl eines Mangels mit dem Streben ihn zu besäugen heist Bedürfnis. Hermann, Staats-wirtschaftliche Untersuchungen. 2. A. 1870. S. 5.

之れを欲望の定義として見れば、頗ぶる不充分のものたるを免れず、第二卷欲望の條に到り、更に精確の意義を闡明すべし、茲に用ふる目的には足れり、ワグナーの如きは一に「Meyn」を承繼し、別に「Sach」を加へ、Der Mensch (ist) ein bedürftiges oder Bedürfnisse

empfindendes Wesen. Wird dieses mit dem Bedürfniss selbst gegeben, die eine Seite desselben darstellende Streben erfüllt, so verschwindet oder vermindert sich, regelmässig nach der Natur des Menschen aber nur zeitweilig, jener Mangel, d. h. es erfolgt Befriedigung des Bedürfnisses. Jenes Streben zur Beseitigung des Mangels kann, weil es den Menschen antreibt, Befriedigung des Bedürfnisses zu erlangen, Befriedigungstrieb genannt werden. Grundlegung. I. S. 73 と言ふに邊や之れを後巻述ぶる所のメタモラー其他の最近の研究に比較して其深淺の度を想ふ可し

③ 之れ従來の經濟書に於て全く看過せられたる所なり而して心理學者も亦欲望に關する研究を以て經濟學者に一任すべしものと看做したるの感なきにきらず甚しきに至りては欲望を目して罪惡の根源となすの見解あり專ら之れを論ずとせば經濟學を蔑視し倫理學は只管に欲望消滅の説法を以て任とし經濟學と全然反對の教義を立つるの觀を呈せり殊に欲望の増進の一發現態なる奢侈に關する議論に於て然り——

E. de Laveleye (On Luxury), Bandrillart (Histoire du luxe privé et public 1880), Roscher, (Ueber den Luxus. Ansichten der Volkswirtschaft vom geschichtlichen Standpunkte I. 1878) 等を参照すべし——

心理學の見地より欲望に論及するは Tarde (Psychologie économique 1900 p. 1 et seq) を見るとよく理解可なり Paulsen (Ethik. 1900 Bd I. S. 235 ff.) 并に經濟學の見地より Paulsen, (Ethik u. Volkswirtschaft. 1901.) 并に經濟學の立場より欲望を論じたる Brentano, Versuch einer Theorie der Bedürfnisse. München 1908. 等を讀むべし

In the absence of any term in common use to represent all desirable things, or things that satisfy human wants, we may adopt the term Goods for that purpose.....All wealth consists of things that satisfy wants, directly or indirectly. All wealth therefore consists of Goods; but not all kinds of Goods are reckoned as wealth. The affection of friends, for instance, is a Good; it is a very important element of wellbeing, but it is not ever reckoned as wealth, except by a poetic licence. Marshall, Principle 2. E. P. 106.——

とせばは即ち經濟學より論ずべき欲望之れを充たす可き財と其然らざるものとを同一視せざるの誤謬に陥らざるべし——

Der ganze Umkreis menschlicher Gefühle, der niedrigen wie der höheren, erzeugt so Bedürfnisse. Der Mensch hat sinnliche, ästhetische, intellektuelle, moralische Bedürfnisse. Aber mit Vorliebe

gebraucht unsere Sprache das Wort für die Notwendigkeit, durch den wirtschaftlichen (was aber ist wirtschaftlich?) Apparat von Gütern und Diensten den niedrigen wie den höheren Gefühlen die gewohnte Auslösung zu verschaffen. Die Bedürfnissbefriedigung hat man darum gesagt, ist das Ziel aller (?) Wirtschaft; die Bedürfnisse hat man als den Ausgangspunkt alles wirtschaftlichen Handelns und aller wirtschaftlichen Produktion hingestellt, was ganz richtig ist, wenn man das Wort Bedürfnis in diesem engeren (?) Sinne nimmt. Denn im weiteren Sinne ist *Bedürfnissbefriedigung der Zweck alles menschlichen Handelns, nicht bloss des wirtschaftlichen*, denn zu allem Handeln geben Lust- und Unlustgefühle und die Erinnerung an sie den Anstoss. Schmoller, Grundriss, S. 23.

然り誠にミエ氏の言の如し然らば其狹義と云ひ經濟的と云ふものと廣義と云ふものとは如何なる標準によりて之れを別し可きや、是れ根本の問題なり、然るにミエ氏の説明は未だ此に及ばず、惜みても餘ありと云ふ可き也——是れ本文に於て闡明せんとすことを勉めたる重要な點なり——

ミエボラーは「經濟的」なる語を説明して曰く——

Und in all' dem erscheint uns als wirtschaftlich nur die zweckmässige, von gewissen technischen Kenntnissen, von klarer Ueberlegung und moralischen Ideen (?) geleitete Thätigkeit; eine solche, welche durch Wertgefühle und Werturteile gelenkt ist, d. h. durch vernünftige Vorstellungen über die wirtschaftlichen (?) Zwecke und Mittel, ihre Beziehungen aufeinander und auf Nutzen und Schaden, auf Lust und Leid für den Menschen. a. a. O. S. 2.

是れ全然經濟の本則と經濟行爲とを區別せざるの誤謬を脱却せざる説明なり、唯シエ氏獨特の用語の不確定なる其缺點を掩ふに婉曲なる措辭を以てせるものと斷せざるを得ず予の断じて服する能はざる所なり、本文第三四三五頁并に附註(36)(37)(38)を見よ

抑々欲望が増進し高尚になることは同時に人類の幸福の増進と看做すべきか否かは經濟學の直接に答ふべきこと無し、哲學倫理學等の解釋すべきことである。併し經濟學の見地から言へば、經濟生活の向上的發展は欲望の發達から來り、經濟上の進歩は又多くの場合に於て經濟より更に高い他の心靈上精神上の發展の基礎であることは『衣食足りて禮節を知る』といふ言葉の示す通りである。人類は物質上たる心靈上たるを問はず凡て其の欲望を充さんが爲には自己を取巻いて居る外界の力を藉らなければ

ならぬ。蓋し欲望が人類にあればこそ如何にしても外界の自然に依頼しなければならず、之れに逆ふは即ち己れの破滅を招く所以である事が人間の意識に明かに感ぜられる。然るに此の如く人類が其の欲望を充すが爲に外界との間に起る關係が、即ち人間の行爲の中で特に一種の行爲を惹起す所以であつて、經濟行爲は其の内の又一種を言ふのである。

此く人類が外界の力に頼つて其欲望を充すに、いふ以上は其欲望を充たすべきものを外界から得來らなければならぬは明である。此の如き外界のもので人類が一定の欲望を充すに適すと思惟する特定物を稱して財ミ云ふ。學者或は財を絶對的の財ミ相對的の財に分けて、眞に一定の人類欲望を充すに適する物を絶對的の財ミ言ひ、人類が唯だ其欲望を充すに適するを考ふるに依つて財たる性質を備へる物を相對的の財ミ稱す。定義を下すものがあるが(9)、此の如き區別は到底下すことは出来ないのである。所謂絶對的の財ミ雖も、それ自身が人類の欲望を充すに足る性質を備へて居る丈では未だ人類經濟行爲の目的物ミはならない。其特定財が眞に欲望を充すに足る性能を有して居

ることを人間が認めるに依つて初て、經濟行爲の目的物ミなるのである(10)。眞に欲望を充すに足る性質ありや否やの問題は經濟學の決すべき處で無い他の學問例へば衣食の料に付ては衛生學生理學化學等が之を定めるので、經濟學の關する所では無い。經濟學では人類が一定の欲望を充すに足るとして、之に對して經濟行爲を發動すれば、其物を名けて財ミ言ふのである。即ち財ミは抽象的の種類の名稱でなく具象の特定物を指すのである(11)。既に外界の財ミを以て表はしてある通り經濟上では内界の財は財ミして算へ入れないのを適當とする(12)。例へば人の知識材能の如きは、奴隸制度が存在して居つて人間其ものが一の財であつた時代に於ては財ミ看做すことも出来るが、今日の經濟組織にあつては此の如き物は經濟上の財ミしない。

(9) Nennt man das Genussgut ein Gut erster Ordnung, so wären die Produktivgüter desselben je nach ihrer Entfernung von diesem, Güter zweiter, dritter, vierter Ordnung u. s. f.

Betrachtet man ein anderes Genussgut, so kann ein Gut, das im früheren Falle in der zweiten Ordnung stand in die dritte oder vierte gehören, auch können Güter der nähmlichen Beschaffenheit

mit Bezug auf ein Genussgut in der zweiten, dritten und vierten Ordnung stehen, z. B. Kohle. Zuckerkandl, in Wörterbuch der Volkswirtschaft. I. S. 983.

Gewisse Güter sind zwar an und für sich geeignet, ein menschliches Bedürfnis zu befriedigen, sind also absolute Güter. Fuchs, Volkswirtschaftslehre S. 6.

(10) Güter sind Dinge, die den Interessen, Bedürfnissen, Wünschen, Absichten, Neigungen u. s. v. Jemandes zu entsprechen geeignet erscheinen.

ル
ル

Güter sind Dinge, die dem Interesse Jemandes zu entsprechen geeignet scheinen.

ル
ル

G. sind Dinge, die dem Selbstinteresse Jemandes zu dienen geeignet erscheinen.——oder ähnlich.

Neumann, Grundlagen. S. 52-3.

Alles, was nun geeignet ist, das Bedürfnis zu befriedigen, heisst Gut. Hermann a. a. O. S. 5.

Roscher nennt Gut „alles dasjenige, was zur Befriedigung eines wahren menschlichen Bedürf-

nisses anerkannt brauchbar ist“ (Sr.) Der Zusatz „anerkannt“ ist überflüssig, weil selbstverständ- lich, da nur in Beziehung auf Menschen überhaupt von Gütern gesprochen wird. Der Zusatz „wahr“ bei dem Bedürfnis ist falsch und wird mit Roscher's Motivirung nicht begründet. Denn auch das was ein unvernünftiges und unsittliches Bedürfnis befriedigt, ist ein „Gut“, sobald eben, wohl oder übel, das Bedürfnis besteht. „Um den Grundbegriff der Volkswirtschaftslehre auch gleich als einen Gegenstand ethischer wie psychologischer Untersuchung zu vindiciren,“ bedarf es des Zusatzes ebensowenig. Dies folgt schon aus dem Umstande, dass Güter wie Bedürfnisse dem menschlichen Triebleben unterstehen. Wagner, I S. 288-9.

金井延博士も粗ぼ同様の言を爲して曰く

『……………ロッシアアの定義は恐らく其の當を得ざる可し第一氏の定義中「世人の認めし」云々の條件を故らに附加せるが如きは全く贅事たるを免れず、即ち定義は簡單にして明瞭なるを冀ぶの趣旨に背反するものと謂はざる可からず、畢竟財貨は人に認められて始めて成立し、人に對する關係によりて存在し、人を離れては決して單獨に存在するものに非ざるのみならず、經濟の事は總て人々分離して語る可きものに非らず故に、

「世人の認めて」云々の數字は財貨の定義中に入るゝに及ばざるものなりと謂はざる可らず

次に謂ふ所の「真正なる欲望」を満足せしむるのみを以て財貨とすは大に誤れり。何となれば財貨其のものは決して善惡正邪に關係なし苟くも人類の欲望にして存在する以上は、其真正なる否に拘らず其不道德なる然らざるを問はず、之を満足せしむるに適當なるものは、之を財貨と名くるより外に名案なければなり。斯くの如きものを以て財貨に非すせば抑も之を何と名けて可なりや、又之に關する學問は果して如何なるものなるや蓋し斯くの如きものと雖も、畢竟皆財貨たるに過ぎずして之に關する學問は結局經濟學の外之れあらざる可し、況んや欲望の「真正なる」と否とを區別し、不道德なる然らざるを決するは到底絶對的に爲し能はざる事なるに於てをや、又況んや同一の財貨にても場合により自然的必要の欲望を満たすことあり、奢侈的不道德の欲望を満たすこととあるに於てをや

加之ならず經濟學の全體をして、單に心理的研究の目的物たらしむるのみならず兼て又倫理的研究の目的物たらしむるを要する者とすの點よりして見るも「真正なる」の形容詞は毫も其の必要を見ざるなり、社會經濟の大體に於いて倫理道德と矛盾す可ら

ざるは言を俟たず、是れ財貨に關する現象も欲望に關する現象も、皆な人生々活の大本に従はざる可らざるを知らば従つて自ら明なる可きなり、故らに「真正なる」の四字を欲望の上に冠らしむるの必要果して何處にかある、ロ氏の定義は畢竟加ふるに及ばざる文字を加へて、徒らに冗長に流るゝの過失に陥りしものなりと断定せざる可らず、故に余(?)は財貨に與ふるに氏の定義と少しく異なるものを以てせんと欲す、曰く「財貨とは總て人類の欲望を満たすに適當なるものなりとす」(金井延博士社會經濟學自六四頁至六七頁)

金井博士は其定義に註解を附して曰く「定義中に「満たすに適當なる」と云ふて、單に「満たす」と云はざるは財貨が財貨たるには必ずしも現に欲望を満たすの事實あることを要せず、之を満たすに適當なるものたる以上は、現に満たすの事實なきも尙ほ財貨たる可きを以てなり、例へば米は元來財貨なるも、之を搭載する船舶が航海中に沈没するときは其の米は魚腹に葬らるゝも、其損失に歸する瞬間までは尙財貨たるの性質を失はざりしなり」(同六八頁)と

金井博士の定義なるものは右に掲げたるヘルマンのと大差なくして、ワグナーが單に

Unter Gut wird in der Politischen Ökonomie jedes Mittel zur Befriedigung eines Bedürfnisses des

Menschen verstanden (O. C. S. 288)と言ふに過ぎざるに比して遂かに真相を得るに近きものなり。然れども其 *seinet* なる文字を説明するに於て金井博士は多少の誤解をせられたるに非ざるか、海中に沈没したる米は其損失に歸する瞬間(魚腹に葬られて尙損失に歸せざる場合あり)とは甚難解の學理なれども假りに然りとすると(までは財貨たるの性質を失はざるは、現に欲望を満さざれども尙満たすに適當せるものなるが爲めなり)や否や、之れを海損(Average)の實際に徴するも(村瀬春雄氏著海上保險第四章以下参照)之れを常識に訴ふるも甚だ受取がたき新學理と言はざるを得ず、金井博士は何故に今一層「簡單明瞭」なる例證を取りて倉庫中に貯藏せる米は、現に欲望を満たすものにはあらざれども、猶満たすに適當せるものなるが故に財貨たるを失はずと言はれざりしや、然れども之れ明かにヘンマン以下の諸學者の *seinet* なる文字を使用するの眞意にあらざ、金井博士は之れを知るも同一の文字は使用し乍ら自己の獨創の意義を之れに附せんとして如此難解の例證に藏れたるものか、非歟——

予はヘンマン以下諸氏に更らに一歩を進めて *für geeignet gehalten* とする最近諸學者の意を本文に祖述せり、*geeignet ist, oder für geeignet gehalten wird* (適するもの並に適するはらるゝもの)と重加する學者なきにあらず——

即ちフツクスは曰く——

Ein Gut in wirtschaftlichem Sinne ist nämlich jede Sache, die *geeignet ist* oder vielmehr *für geeignet gehalten wird*, einem menschlichen Bedürfnis zu dienen. Fuchs, Volkswirtschaftslehre S. 6.

然るにフツクスは更らに説て曰く——

..... aber sie treten in den Kreis der wirtschaftlichen Thätigkeit erst, wenn der Mensch diese Eigenschaften bei ihnen findet. a. a. O.——

既に然らば適し又は適すと思惟せらるゝものと重複するを要せざるべし、明治三十四年至三十五年東京高等商業學校に於ける講義に於て予はフツクスと同様の重複せる定義を探りしも、今は即ち改めて本文の如く言ふを可なりと信ずるに至れり、此點に於て師フレンタノ先生の持論と全然一致するを得るに至れり(Brentano, Agrarpolitik I)——

繪ワグナー并に之れを祖述せる金井博士等のロッシアに對する非難は「*wahr*」なる文字を以て無用なりとする點に於ては予の同意する處なり、其語を獨り「倫常に合ひたる」なる意義に於てのみならず最も廣義に解して現實々在の欲望と解するも、猶予は之を以て必要ならざる制限なりと信ず、是れ「適すと思惟せらるゝ」と言ふの眞意也、然れどもロッシアの眞意は寧ろ此に存せずして彼にあり、ロッシアは *wahr* なる文字

に註釋して次の如く云く——

Der Zusatz „wahr“ scheidet nicht allein dasjenige, was nur unvernünftige und unsittliche Bedürfnisse befriedigen könnte, vom Reiche der Güter aus, sondern vindicirt auch gleich den Grundbegriff der ganzen Volkswirtschaftslehre als einen Gegenstand ebenso wohl ethischer, wie psychologischer Untersuchung. Roscher, Grundlagen. S. 4.

たはロマンチズムを以て始まる思想のからす。一八五七年に出版せる經濟原論に於て「ミシユラーは財を定義して曰く——

An die Natur des Menschen als sinnlichen, sittlichen, geistigen Wesens, schlossen sich sinnliche, sittliche und geistige Bedürfnisse an. Was geeignet ist ein Bedürfniss dieser Art zu befriedigen, heisst Gut. Mischler, Grundsätze der Nationalökonomie. S. 6.

又曰く——

Fasst man den Begriff Gut zu weit, indem man Alles, was als Mittel zu menschlichem Zwecke dienen kann, Gut nennt, so übersieht man, dass der Mensch als freies Wesen die mannigfaltigsten Zwecke, sittliche und unsittliche, rechtliche und unerlaubte setzen kann, sogar *den seiner eigenen*

Zerstörung. Es kann also nur das Gut sein, was einen vernünftigen, sittlichen und erlaubten Zweck zu erreichen gestattet. a. a. O. S. 187.——

固より此如倫理上の見地を取りて直ちに經濟上の現象を律せんとせるミシユラー、ロマンチズムに誤謬に陥れるものと云はざるに可からず、然れども第二卷欲望の章に於て述ぶ可きが如く、欲望は快と不快との感覺より來るものにして、快を求め痛苦を避けんとするは、やがて欲望を活動せしむるものとすれば、欲望充足とは快を求むることに存し、其快とは人類の生活を増進完美せしむべきものを得るによりて始めて得可きものなれば、ミシユラーが人類生命の破壊を來すべきものは財にあらず、精神上倫常上許されたる（其向上的發展に多少なりとも寄與する處あるの意に解して）欲望即ち人類の真正の快感を増加し、不快感を減すべきものにあらざれば、財とするに足らずと云へるは、字義通りに解するときば倫理上の見地を經濟上の概念に加味せんとするの誤謬なりと雖も、更らに深く氏が如此説を執るに至れる淵源を考察するときば大に中れるものありと云はざる可からず、唯之れを定義體に断定せるは飽迄も其處を得たるものにあらず、然れども欲望の心理的研究を忽諸に附して直ちにラケナーに雷同して不道德の欲望不正の欲望を充たすものも財なりと輕々論斷し、更らに他の何れの所に於ても欲望の真正の淵源

に論及せずして已むば初學後進の徒を誤るの虞なしとせず猶詳細は第二卷第一編に於て論述すべし——

次にロッセミーが anerkannt brauchbar と云ふるに對して、マクナーが——

Überflüssig, weil selbstverständlich, da nur in Beziehung auf Menschen überhaupt von Gütern gesprochen wird.——

と云ひ金井博士が之れを承けて「全く贅事たるを免れず」云々と云はるゝは予を以て見れば却て「贅事たるを免れざる」が如し若し人間に關するが故に「特に世人の認めて」等の文字を用ゆ可からずとせば、マクナーが財とは人類の欲望を充たす云々と云ひ、金井博士の財貨とは總て（既に贅事ならずや）人類の欲望云々と翻譯せられたる人類の文字は殊に「簡單にして明瞭を尊ぶの趣旨に背反せるものと謂はざる可からず」（社會經濟學六四頁）何となれば金井博士も言ふ如く、經濟學は人間の學にして、獸類の如きは全く其研究の範圍外にあるや明白の事に屬すればなり——

ロッセミーの用語は brauchbar zu sein anerkannt ist の意にして即ち geeignet gehalten wird を他の語を以て言類はしたるものなり決して無用にあらず自明にあらず、贅事にあらず、必ずなるべからざる用意周到の語なり、「適するもの」と斷言して憚らざる輕學者流

な嫌め戒飭せんとする深意に出ずるものにして、之れを非難するマクナー其他の學者、之却つて淺薄の謗を免れざるなり、

ロッセミー論曰く——

Mit jedem Wechsel unserer Bedürfnisse, unserer Einsichten verändern sich auch bald die Grenzen, bald die Höhenverhältnisse des Güterreiches (Anm. 11). So hat die Tabakpflanze wahrscheinlich seit Jahrtausenden existirt; ein Gut aber ist sie erst geworden seitdem man ihre Bruchbarkeit zum Schnupfen, Rauchen u. erkannt u. gelernt hat..... Das Ideal würde erreicht sein, wenn alle Menschen nur *zwehre Bedürfnisse* fühlten, aber die wahren auch *vollständig*, und alle Befriedigungsmittel derselben klar einsähen und mit so vieler Anstrengung, wie für *ihre leiblich-geistige Entwicklung am heiksten* ist, erlangen könnten. Roscher S. 2.

と云ひ推す可きなり——

猶第四卷に於て詳述する處あり、

(11) Unter Gut versteht man nicht eine Sachart, sondern ein konkretes stoffliches Ding. Zucker-kandl, „Gut“ Wörterbuch der Volkswirtschaft. Bd. I. 1898. S. 983,

(12) 内界の財に關しては學者間に幾多の議論あり予が本文に取る處の説は未だ必ずしも一般に學者間に認用せらるゝ所にあらず然るに予が敢て斷然内界の財は經濟上の財として論議すべきものにあらずとするは多年推考の結果にして從來經濟學の病は茲に存すと確信するなり其理由を述ぶるには先づ今日の國民經濟の前提條件たる所有權と人權の發達を叙したる後ならざる可からず即ち第三卷に於て此等に關する論述を了りたる後第四卷に於て詳論すべし故に此編に於ては唯予の所見を明確に斷言するに止めたり夫れ迄は金井博士社會經濟學六八、六九頁を合せ讀み置くも可なり、

猶 Knies, Geld, 2. A. 1885, S. 40. ff. 并し Neumann, Grundlagen der Volkswirtschaftslehre, 1889

S. 101 ff. 上有力の辯論あり、参照するを可とす。

茲に從來の經濟學で教へてなくして而も最も重要な忘れてならぬことがある。即ち財の觀念は私有財産制度并に人格の自由の認められて居らぬ時代と此等が認められて居る今日の經濟組織に於けるとは大に異なることは是れである。今日の經濟組織には昔の經濟生活に嘗つて夢みなかつた現象は澤山にあるが、其中最も重要なものは私有財産制度と人格の自由の二つである。此等の認められて居る今日にあつては財に似寄つた性

質を備えて居る所のもので、而も財と混同してならぬものがある。即ち諸々の權利關係之である。此等は決して經濟上の財と看做すべきもので無い(13)。蓋し是等のものは經濟上の財を得る爲めの間接の手段であつて財其物でない。唯だ今日の私有財産制度の下にあつては、此等は經濟上の價值殊に貨幣の一定の數量に見積らるべき價格を備へて居るから或は之を稱へて準財といふ事が出来るかも知れないが、財其物と言ふことは出來ない。又勞働給付も今日の契約職業の自由人格の自由の認められて居る經濟組織にあつては多く貨幣に見積らるべき價值を有して居る故に、或學者は如此有償的の勞働給付(普通此を勤勞と稱へて居る)も亦財なりと云ふ(14)。乍去、之は價值を有するもの、即ち人類の欲望を充たさんが爲に有償的に獲得しなければならぬものは悉く經濟上の財であるとする謬つた根本觀念から出て來た説明であつて、今日の經濟組織の上からは此くの如き見解は却て吾人の知識を進むるの大障害となるものである、何れ後章に詳述する。

(13) 權利關係を財と看做さざるに就ても亦内界の財と同じ理由により詳述は後卷に

讀る假りに v. Böhm-Bawerk, Rechte und Verhältnisse vom Standpunkte der volkswirtschaftlicher

Güterlehre. 1881. — 并に金井博士經濟學八二頁以下を参照し置くも可なり論 Neumann, a. O. S. 72-90 は權利を以て財に算入す可しとなす事は氏の所論よりして却て反對に權利は財に算入す可からざるの結論を得たり。

序に斷り置く可きは本文執る所の見解は日本新民法并に獨逸新民法の精神に一致するものとかなり此れ決して唯一の理由にあらざるも有力なる理由の一とす。

(14) Zweifel hat auch der Verfasser (i.e. Neumann) gehabt und hat in dieser Beziehung geschwankt. Noch in dem oben citierten Aufsatz: Die Grundbegriffe (in Schönberg's Handbuch z. A. 1885) hatte er unter Anführung der meisten hier berührten Gründe sich für Aufnahme der Leistungen in die Kategorie der Güter ausgesprochen, wobei ihm namentlich bestimmten: Rücksichten auf die, wenn auch nicht ganz consequent erscheinende, doch in unserer Wissenschaft bereits übliche Charakterisierung wenigstens der *persönlichen Dienste* als *Güter*, ferner Rücksichten auf Einkommen und Ertrag, zu denen „sicherlich auch Leistungen und Nutzungen zu rechnen“ und vor Allem die bei Aufnahme von Nutzungen und Leistungen in die Kategorie der Güter „zu erzielende grössere Uebereinstimmung zwischen den Gebieten der Begriffe *Gut* und *Wert*.“—Ohne das Gewicht dieser Momente

gering zu schätzen, glaubt der Verfasser jetzt den dort ebenfalls angeführten Gründen, die für eine *engere* Auffassung des Gutsbegriffs sprechen, ein grösseres Gewicht beilegen zu sollen, da ihm jetzt die Rücksichten auf die Begriffe Vermögen Reichthum Production, produktive Klassen etc. als die wichtigsten erscheinen. Neumann Grundlagen S. 100—101 Anm. 76.—

ハイマンの老成回熟の境に至り遂に改説するに至れるもの實に氏が學理的思索の深遠遡微なるを想見するに足る事が本文に下せる斷案は、即ち氏が後年の新説と合致するものなり然れども其推論の順序に至つては即ち同からず、後卷の詳述を見て知る可し是れに觸つては推測の精を以て聞ゆるマンガー・ヒュム・スヴァホルツ氏の所論と遙かに數層の上位に在りとのなきハイマン氏を驚しつて曰く——

Zu wie wunderbaren Resultaten man gelangen kann, wenn, wenn man in diesen schwierigen Dingen ohne feste Richtschnur, gewissensmassen ohne Steuer und Kompass, seinen Weg sucht, ist z. B. aus Böhm (-Bawerk) und Menger ersichtlich. Bei Böhm finden wir gut zusammengestellt, was hie und da schon als „Gut“ im volkswirtschaftlichen Sinne betrachtet worden ist (Rechte und Verhältnisse vom Standpunkte der Volkswirtschaft. Güterlehre 1881 S. 29). Da finden wir in sehr Gemeinschaft

nicht nur Liebe und Freundschaft, Staat und Kirche, Charakter und Tugend, sondern auch z. B. die Ehe und die Erfindungspatente, die Ilias und die Rechtssicherheit, Stärke und Ratschläge, Monopole und Gesundheit, Zerstörungsvergütungen und das Verhältniss des Feldherrn zu seinen Soldaten u. s. w.—Selbst Menger, der es zu den Hauptaufgaben unserer Wissenschaft zähle, „das Wesen der Güter darzulegen“—nimmt, wie schon berührt ist (S. 92.) nicht Anstand, zu den „Gütern“ auch Liebesverhältnisse zu zählen. Und da ihm „ökonomische Güter“ alle solche „Güter“ sind, an denen „ein partielles Mangel besteht, Vermögen aber“ die Gesamtheit der einem wirtschaftenden Subjekt verfügbaren ökonomischen Güter ist, so hätte, wer eine recht grosse Zahl von Liebesverhältnissen unterfällt, hiernach unter gewissen Umständen auch ein sehr grosses Vermögen welche Konsequenz allerdings bisher selten gezogen ist. Neumann a. a. O. S. 101—102. Ann. 77.—

ノイマンの二氏に肉薄するに犀利なる論法を以てして殆んど防禦の餘地なからしむる快なるものありと云ふ可し予は塊國派の諸氏に與する能はざるの點に至りては全然ノイマンと見を同ふするものなり。

而して勤勞を財とするは予の熱心に反對せんとする處なり、前二者に就ては或は熟考

の後説を改むることありとするも勤勞に就ては断じて其餘地なきを確信するものなり。勤勞を財とすればこそ財の蓄積なる意に取れる資本を過重するの弊は生ずるなり。然るに社會政策の見地に關じ、本邦に於て予と多くの點に於て見解を同ふせらるゝ金井延博士が勤勞財貨説を取らるゝは氏の爲めに大に惜む所なり（社會經濟學八一頁以下）幸にして氏の此説は第一編經濟上の根本觀念を論ぜらるゝ處に於てのみ一貫して採用せらるゝのみにて、後編に至りては此説の影響を認めざるは大に喜ぶ可き處なり、即此點に於て氏が説明の稍統一透徹を缺くの憾あるは却て幸とせざる可からず、猶後卷氏并に氏と同説を取れる諸學者の教へを乞ふ所あらん、——猶注意す可きは所謂勤勞と予の茲に所謂勤勞の給付とは殆んど同義にして、而して其間犯す可からざる區別あること之なり。勤勞の給付は貨幣の價格に見積らる可し、心身の能力は然る能はず、蓋し給付は人格より出で人格より離れて考ふることを得れども、内界の能力智力體力等は、其人格身體を離れて考ふる能はず、況んや授受し能はざるものなるに於てをや、たとへ無形の財なるものありとするも、それは内界の勤勞能力堪能智力等にあらずして之れが発現たる給付のみ然るなり、一時間演奏せる後の音楽家の堪能は、演奏前に於けるさ少しも異なるなきは、大工の腕前の仕事以前と一日の仕事了へたる後と少しも異なるなきが如し、然れども其給

付に至りては、疲勞せるときと然らざるときとは大差なきを得ず、之れ内界の力と其發現せる給付とを區別して觀察するを要する所以なり Knes, Geld S. 41. 參照。

人類が自分の一定の欲望を充すに足ると思惟する財に對して起す一種の行動を以て經濟行爲であるとするれば經濟行爲の第一の職分は、其欲望を充すに足るべき財を得ること即ち是である。併ながら唯に外界の財を欲望充足の爲に得ることを目して直ちに經濟行爲とするには出來ない。例へば何れの經濟書にも説てある様に(15)、自由なる天然の賜即ち無制限に充滿し存在して居る空氣や水の如きは經濟行爲の目的物となりない従つて財で無い。之に反して人工を加へて導き來つた空氣或は水道の水等は天然の自由の賜でなく一定の經濟行爲の目的物たる財である。

(15) 殆んど凡ての經濟書に論ず、其一二を例證すれば、――

Freie (naturfreie) Güter sind hier solche, welche der Menschheit von der Natur ohne menschliche Arbeit, bezw. wenigstens nur gegen die bloss occupatorische Arbeit des Aneignens in jedem einzelnen Falle des Bedürfnisses geliefert werden. Wirtschaftliche Güter dagegen..... Wagner, I. S. 290.
金井博士社會經濟學七〇頁以下に此れと同様なる説明あり合を見るべし。

Those Goods are Free, which are not appropriated and are afforded by Nature without requiring the effort of man. Marshall, Principles. Bk. II. ch. ii. p. 107.

Viele Güter reicht die Nature in solcher Art und Fülle dar, dass besondere Bemühung für ihre Herstellung oder Beischaffung nicht röhig ist. Luft, Tageslicht, Sonnenwärme, Klima überhaupt, Windzüge, das Meer mit allem, was es enthält, Eis im Winter in unsern Breiten mögen als Beispiele dienen..... Alle diese Güter nennen wir Freie Güter..... Hermann, Staatswirtschaftliche Untersuchungen. S. 104-5.

Things for which nothing could be obtained in exchange, however useful or necessary they may be, are not wealth in the sense in which the term is used in P. E. Air, for example, though the most absolute of necessities, bears no price in the market because it can be obtained gratuitously. Mill, Principles. Prel. Remarks. People's E. p. 4.

然らば外界の財にして人類の欲望を充すもので經濟行爲の目的となるものとならないものと言を換へて云へば經濟上で云ふ財となり財とならずといふのは何を以て標準とするか之を知るには經濟行爲にならないものは何であるかを先づ見る必要がある。

例へば人類の審美的欲望といふものがあつて、或は音楽を求め或は繪畫彫刻美術等を求むるが如き行動は、人間の審美的欲望を充すが爲に惹起されるが、其行動は經濟行爲では無い。或は又學問上の欲望といふものが有り得る、此學問上の欲望を充すが爲に著述教師圖書館學校等を要する。是等を要するから之を得るが爲に又一種の行動を惹起すが、其れは經濟行爲ではない。

然し是等音樂美術を求め書籍教師を得るに方りて、或る事情の下には、之れが副産物として經濟行爲を喚起することはある。此等の欲望を充すべき外界の財を得ることは直ちに經濟行爲ならぬが、之れを得ることが或る状態の下に立つときは經濟行爲を喚起す、然らば其状態は何であるか。從來の經濟學は之れに對しては其欲望を充すべきもの、存在する量が有限なるときを答へる(16)。此有限とは如何なる意味であるか、見様によつては宇宙間何物か有限ならざらん、又何物か無限ならざらん、絶對的に有限無限とは學問上曖昧千萬な言ひ様である。有限無限と云ふ意味は之れによりて充たさるべき欲望と比較して、有限であり無限であるとの意味の外はない。然るに充たさるべき欲

望に比較して無限なるもので經濟行爲の目的となるものがいくちもある。例へば海水は無限に存在して居る、而も之れを汲んで海水浴を作り浴客の用に供して營業をなすものに取つては、此海水を汲むとは慥かに經濟行爲である。反之高山に昇り稀有の草花を蒐集する植物學者は經濟行爲を営むものではない。高山にしか存在せぬ稀有の草花は何れの意味から云ふも極めて有限のものではないか。他面に於て植物學者が偶々高山の外存在しない稀有の草花を其れを賣つて居る植木屋から買入るのは慥かに經濟行爲を営むものである。此くの如く折角案出した有限に存在するものを得るを經濟行爲とするに云ふ定義は事實の真相を解剖し得ないこと明白である。從て財の價值を論ずるに稀少性等と云ふ事を如何にも學問上の大真理であるかの様に重ざるの誤なる事も亦明かであらう(17)。存在量の有限無限に拘らず、經濟行爲を惹起すべき財には人類が占有する事を欲しない物は數へ入れない。文化の低い所に在つては、此の如き物が澤山にある土地の如き物ですらも誰も占有する事を欲しない。何故となれば、土地は豊富に存在して居るから特に之を己の物として占有する勞を執る事を要さない。文化の程度の高

い所にあつてもそれ自身の性質上占有する事の出来ない物がある。此如人類が占有する事を欲しない物又占有する事の出来ない物は經濟上財とはならない。従つて之に對する人類の行動は、存在量の有限無限に拘らず經濟行爲で無い。即ち先づ經濟上の財は占有せらるゝ物又占有せられ得るもので無ければならない。實に此占有といふ事が今日の經濟組織にあつては經濟上の財であるか無いかを定めるに付ては根本條件であつて、而て又今日の經濟生活内に起り來る總ての現象の根本に横はる大事實である(18)。

(16) The difficulty of attainment which determines Value, is not always the same kind of difficulty. It sometimes consists in an absolute limitation of supply, Mill, Principles of Political Economy Bk. III. ch. § 2.—

よ 此 處 へ 是 の 一 歩 を 進 む べ 也

Die Dinge, welche die Tauglichkeit haben, in Causal-Zusammenhang mit der Befriedigung menschlicher Bedürfnisse gesetzt zu werden, nennen wir *Nützlichkeiten*; wofern wir aber diesen Causal-Zusammenhang erkennen und es zugleich in unserer Macht haben, die in Rede stehenden Dinge zur

Befriedigung unserer Bedürfnisse tatsächlich heranzuziehen, nennen wir sie Güter..... Wirtschaftliche Güter sind solche, deren verfügbare Quantität geringer ist, als der Bedarf an denselben, also jene Güter, an welchen ein partieller Mangel besteht, so dass der Unterschied zwischen den ökonomischen und den nicht ökonomischen Gütern in letzter Reihe in einer den exaktesten Auffassungen zugänglichen Verschiedenheit im Verhältnisse zwischen Bedarf und verfügbarer Quantität dieser Güter begründet ist. Menger, Grundsätze der Volkswirtschaftslehre (1871) SS. 1-2.

是れ又キョド・マン・ホンの取の説なり然れども此説はマン・カアの創説に出やるにあらざり一六八〇年に出版せる『貨幣論』に於てマン・ナリは言はるべし

La rarità rende preziosa ogni mercanzia.....e l'abbondanza le rende vili. L'acqua che è un elemento di tanta importanza all'umano vivere, perché abbonda quasi per tutta la terra, non vale cosa alcuna..... Montanari, Della Moneta, Economisti italiani. P. antica III. p. 58 et seq.—

猶マン・カアの所論は殆んど次の一節と符合するものを知し。

Essendo essi (Principii onde deriva il valore) certi, costanti, universali e sull'ordine e la natura delle cose terrene stabiliti, niuna cosa *arbitraria* è casuale e fra noi, ma tutto è ordine, armonia e necessità.

Sono varii i valori ma non capricciosi. Il loro stesso variare è con ordine e con regola esatta ed immutabile. Galvani, Della Moneta. 1750. O. C. Parte moderna III. P. 83. —

Un homme isolé peut posséder des choses pourvues de valeur, aussi bien qu'un homme plongé dans le milieu social. Prenons pour exemple Robinson dans son île. Robinson accumule des provisions, fabrique des vêtements, construit une tente et un canot pour son usage. Ces divers objets sont évidemment pourvus de valeur. Car ils ne sont pas seulement utiles à Robinson comme l'air: mon canot vaut deux fois ma hutte; ma hutte vaut trois fois mes habits. Quelles sont les éléments de cette comparaison? C'est d'une part l'utilité qu'ont les choses; c'est, d'une autre part, leur rareté, impliquant les difficultés plus ou moins considérables à surmonter pour les remplacer. Molinari, Cours d'Economie politique. T. I. 1855. p. 89.

詳細は第四卷に於て論ぜらる。

スニガーは其 Grundriss の第二版(一九二三年刊)に於て少くも文字を改めたところ、其處は舊く「異る」なるに改む。

Diejenigen Dinge, welche die Tauglichkeit haben, ein menschliches Bedürfniss zu befriedigen, sind

in unserer Wissenschaft Nützlichkeiten. Sofern eine Nützlichkeit also solche erkannt und verfügbar ist, nennen wir sie ein Gut, und Güter im Sinne unserer Wissenschaft sind also zur Befriedigung unserer Bedürfnisse als taugliche und für dienen Zweck verfügbare Dinge.....(S. 10)

(17) Neumann, Grundlagen der Volkswirtschaftslehre. Anh. I. Der Kampf um Seltenheitswert S. 233 ff. 以難難なる物に「異る」に De plus, cette explication (i. e. l'utilité rare) satisfait mal l'esprit, car elle manque d'unité et on ne s'explique pas bien le dualisme de ces deux éléments en apparence tout à fait hétérogènes: l'utilité et la rareté. Gide, Principes p. 60.

佛國の學者に於て此言あるヤールは佛國新派の泰斗たる以難なるなり、——稀少性と相對する所謂「限界利用説」の學理上首肯し難き節多キものと亦疑を容れず共に後卷に論ぜらる。

(18) 占有が今日の經濟組織の根本的事實なることを最とも有力に道破せしは英國の Duke of Argyll なるに類の犀利なる論議より得たる處少なからず類同す。

What are called its free gifts are no more than possibilities. To convert them into realities we have indeed the guidance and direction of innate appetites and desires, and of certain instincts as

to the use of means. In the highest spheres of action, we have the occasional gifts of genius, and of some still rarer breathings of inspiration. But nothing whatever can be got or possessed without labour—in that only true sense in which economic science can recognise the word—namely, the sense in which it includes all human effort, whether of the mind or of the body. Natural agencies—the powers and properties of external matter—do indeed exist independently of us; but our possession and use of them does not. These depend upon ourselves, on our opportunities, and the use we make of them. Not only can these natural agencies be made the objects of possession, but they must be made such, if they are to be of any use at all. This is especially, and above all other things, true of those natural agencies which consist in the properties of the soil, because they are the fountain-head of the properties of all human food, of clothing, of habitation, and of all other external things which we can hold or can enjoy. The agencies which are concerned in the production of wild game, and of domestic animals are as much natural agencies as those concerned in the production of corn and bread. But none of these agencies can be of any value to man unless, or until, the great source of them can be possessed by some individual, or by some group of individuals,

to the exclusion of all others who would seek to wrest that possession from them, Duke of Argyll, *Unseen Foundations of Society* p. 127.— (Possession demands exertion).—

Ricardo refers to the “appropriation” of land as the one fundamental work, or act, of which rent is a “consequent creation.” But he does not follow up this clue of thought, or trace it to its goal. That goal is to identify the right of exclusive use as the true fundamental condition of all equipment—the one expenditure of work, or of its equivalent in capital—on which all other and later expenditure absolutely depends, so that in principle, in origin, and in nature, they are all homogeneous, and cannot logically be separated or divorced in any theory which is true to nature and to fact. *loc. cit.* p. 298.—

猶財の財たるに到る本源を究め入るごとく稀少性の説明に失敗し、之れを擴充して勞働が財を生ずる本源なりとす。

Wirtschaftliche Güter dagegen sind hier diejenigen, zu deren Erlangung behufs der Bedürfnissbedürfnis-
digung irgend eines Menschen *irgende welche menschliche Arbeit die Vorbedingung ist.* Wagner, S. 299.

と云へるは今日の經濟組織に於ける財の概念を盡すに至らざるものなり（猶此の説に似て非なるはマルクスの所論なり、こは別に詳論を要す）。本文取る所の所説はワグナーに並に多數の學者に對し斷然一新見地を立つるものにして予は、之れをイノマンに得たり Neumann, Grundlagen der Volkswirtschaftslehre. 然れども予の本文に述ぶる所はノイマンの所説に反するもの多し、此獨立の思案は多くクニースの賜なり。

Knies, Pol. Oekonomie, S. 180-223 を参照すべし。

Wagner, S. 301. Streitfrage über den Begriff "wirtschaftliches Gut" 参照

猶註(35)に引照せるヒンソンの經濟上の法則の説明を併せ讀む可し。

詳細は第三卷所有權編に詳述すべし。

乍併、占有せらるべき又は占有せられて居る財に對する行動が直ちに悉く經濟行爲たるのではない。例へば春の野に出で若菜を摘み、山に散歩して木實を拾ひ集め、海濱に干潮狩して魚介を拾ふといふやうな單純な取得は經濟行爲ではない。經濟行爲とは欲望を充すに足る人々が考へて、さうしてそれが占有の目的物となることが出来るもの、人が之れを占有することを欲するもの、又は既に占有の目的物となつて居る外界の財で、之

れを欲望充足の用に供するためには、先づ必ず占有することを要するものを獲得することの謂である。然るに今日の法律制度經濟組織の下にあつては、得んことを欲する財に對しては有償的に、他の財又は勞働の給付を與へるか又は自ら他の財を消費するか又は自ら勞働を施さなければならぬのである。換言すれば給付に對する反對給付の關係を有する行爲を稱するのである。得るに少しも費用を費す必要が無く、或は換えて他の財を與へる必要無き物を得るは經濟行爲では無い。經濟行爲とは單純に技術上新らしきものを造り出し、又は之れを尋ね出すことを云ふのではない。技術と經濟の差異は、單に所謂經濟の本則なるものによつて支配せらるゝの有無によるものではない。新しいものを作り出すこと云ふことは、技術上の製作である經濟行爲ではない。同一の事が單に技術上の行動たるに止らないで、經濟行爲となるには、其の作出獲得が、贏得たることを要する。詳しく言へば、技術上の獲得に方り、有償的に他の財を費やすか又は勞働の給付をなして先づ之れを自己の占有に歸するを要するに至り、始めて經濟行爲となり、或る一つの行動に經濟上の側が伴ふのである(19)。

(19) Neumann, a. a. O. S. 19.

Wirtschaftliche Thätigkeit ist nur die entgeltliche Beschaffung der zur Bedürfnisbefriedigung notwendigen aneignungsfähigen fäusseren Güter durch Anwendung (Hingabe oder bei Werkzeugen: Abnutzung) eines oder mehrerer anderer Güter, also diejenige Thätigkeit, bei der man für das zu beschaffende Gut andere Güter hingehen oder verbrauchen, es also „erwerben“ muss. Fuchs, Volkswirtschaftslehre 2. A. S. 74 A. S. 8.

一定の行爲が常に經濟行爲たるにあらすして或る目的を達する手段たるべきのみ然る所以は、勞働の何たるやを知るに於て最も肝要なりとす、山河を跋渉して鳥獸を獵するに其自身は勞働なりや否獵夫が之れによりて家計を立つるが爲めに爲すべき即職獵を營むべきは勞働なり紳士が娛樂運動の方法として之をなすべきは、之れが爲め如何に心身を勞するも是は決して勞働と云はざるにあらすや、以て他を推す可きのみ。

之を得る爲に他の財を費し或は人に與ふるを要する以上得る物に對して與ふるものを評量比較することが必要である。此の如き評量比較の基準は、經濟行爲を營む人が其の得んとする財を之に依つて充さるべき欲望と對照する一種の心理的作用である、欲望

に對照して財並に勞働の給付を比較した比例の度合を稱して經濟上の價值といふ(20)。價值とは經濟上の一つの財又は給付が、人類の一定の欲望を充すに足ると思惟される度合である。他の言葉で言へば、價值とは財の財たる所以の度合である。此の度合は經濟行爲をなす人即ち經濟主體の主觀的判斷によつて定められる。故に經濟上の價值は主觀的の觀念である(21)。財といふ觀念には必ず價值といふ觀念が附著して來る、凡そ財にして價值を有せぬものは無いのである。

(20) Wert, Value に對する譯字區々なり、予は價值なる文字の充分に當れるや否やを知らず、唯れ、うちなる俗語は凡ての點に於て最もよく原意を表はすものと信ず、れ、うちと云ふときは主觀的判斷の意其内に含まれるはなり、あたへなる語は又最もよく此れ、うちを區別するを得故に之れを以て Preis, price にあてんと欲す。

本文に採用するれ、うちの定義に對しては幾多の異論あるは予の善く知る所なり、第四卷に至り此等反對說に對し予の本説を取る理由を詳論すべし、

(21) Knies, Geld, 2. A. 1885, S. 43 ff. は極力本文の所説と反對の説を主張す、蓋し本文説ぶる所は最も異論を豫期する點なり、れ、うちの徹頭徹尾主觀的觀念なることはブレンネン

先生の夙に唱導せらるゝ所にして予は全條先生の説を紹繼するものなり尙第四卷の詳論を待つ。

猶ねうち、の論に關しては經濟學は奧大利諸學者殊に Menger, Böhm-Bawerk, Wieser の諸氏に負ふ所甚多し、第四卷を待つを欲せざる諸氏は關係書目中に掲げたる此等諸氏の著書を一讀せん事を勸む外に Schmoller, Einige principielle Erörterungen über Werth und Preis, Sitzungsbericht der k. pr. Academie d. W. zu Berlin 1901 XXVII. あり必ず合はざるものあり、後卷詳論すべし。

第二節

人類經濟生活の發達幼稚な時代にあつては財を得る道は唯だ一つしかない。其れは生産である。經濟上の生産は己の欲する財を他の財を費して自ら作り出すことである。然るに經濟的發達が進歩するに更らに第二の方法として己自ら作り出さないで間

接に他人から財を得る道が生ずる。其れは即ち交換である(22)。交換は財の間接的獲得の方法である。交換は分業と密接の關係を有して居る。何故と言へば、各人必ずしも同一事に従事しないことなるに其造り出すところのものも亦必ずしも同じからず、或物は甚しく餘り他の物は全く缺乏すること云ふ様になる。他方には己の欲する財を得るに必ずしも自ら作り出すに及ばない、他人との交換によつても之を得ることが出来るやうになる。従つて或人は或物を自ら作り出す事ばかりを務め、他の人は他の財ばかりを作り出すことを務めて各々自分の才能に最も適する事のみを生産を限り己れ自ら作り出さない物は己が作り出した物を他人に與へて之を交換に他人から得ることになる。ソコで各人は同じやうな經濟行爲をする必要がなく、甲は専ら甲の事をなし、乙は専ら乙の事に従事する様になる。是が即ち分業である。故に分業は交換と密接なる關係を有して居る(23)。交換が行れる以上は交換財なるものが生じて来る。交換財とは以上言ふが如くに、自ら之れを欲望充足に當てる爲めに自ら作り出すので無く、他人に與へて之れに換へて他の物を得る目的に充てられる財を言ふ。故に交換財といふことは何時でも財に附著して

居る性質では無く交換の目的物たる時限りの觀念である。故に交換を離れて獨り直接に欲望充足に當てられる時にはそれは最早交換財では無い。交換財のこゝを一に商品といふ(24)。商品とは交換財の一步進んだ觀念に過ぎない。數回交換を重ねて居る間の交換財を稱して商品といふのであつて或財は始めから終まで悉く商品であるのではない。人間の欲望を充たす財て一度も商品にならないものも少なからぬ。唯だ今日の經濟組織にあつては先づ一度は商品の形態を取て後欲望充足に用らるゝのが常態である。

(22) Aber es giebt noch eine Art von Erwerbskunst, welche man vorzugsweise, und zwar mit Recht die Kunst Kapitalvermögen zu erwerben heisst. Sie ist es, durch welche die Grenzen von Reichtum und Besitz anscheinend in eine unendliche Ferne gerückt werden, und die wegen ihrer nahen Stellung zu der besprochenen nach einer von Vielen getheilten Ansicht für ein und dieselbe gilt mit jener. Sie ist aber weder eines mit der genannten, noch auch sehr fern von ihr. Die eine von ihnen ist von der Natur hervorgebracht, die andere hingegen nicht, sondern vielmehr Produkt einer gewissen Routine und Geschicklichkeit. Aristoteles' Politik, übersetzt u. erläutert von C. u. A. Stahr. Stuttgart 1860. S. 101.——Die Benutzung eines jeden Besitzgegenstandes ist nämlich

eine doppelte. In beiden wird das Ding als solches benutzt, aber nicht in derselben Weise als solches. Der erste Gebrauch ist der direkte, dem Dinge eigentümliche, der andere dagegen nicht und der Natur des Dinges fremd, wie man z. B. einen Schuh zum Anziehen und zum Tauschmittel brauchen kann. In beiden Fällen wird der Schuh benutzt. Denn wer an einen andern, welcher der Schuhe bedarf, diese für Geld oder Lebensmittel zum Tausch hingiebt, benutzt zwar den Schuh als Schuh (da er ihn lässt, wie er ist. Würde er ihn zerschneiden und das Leder verkaufen, so würde er nicht mehr als Schuh benutzt), aber nicht in der ihm eigentümlichen Weise, weil er nicht des Umtausches wegen gemacht ist. a. a. O. S. 101-2.——Goldschmidt, Handelsrecht. 2. A. 1883. II. S. 75.

(23) In a tribe of hunters or shepherds a particular person makes bows and arrows, for example, with more readiness and dexterity than any other. He frequently exchanges them for cattle or for venison with his companions; and he finds at last that he can in that manner get more cattle and venison, that if he himself went to the field to catch them....

And thus the certainty of being able to exchange all that surplus part of the produce of his own labour, which is over and above his own consumption, for such parts of the produce of other

men's labour as he may have occasion for, encourages every man to apply himself to a particular occupation, and to cultivate and bring to perfection whatever talent or genius he may possess for that particular species of business. A. Smith, Wealth of Nations. Bk. I. Chap. II. —

メニスの交換を以て原因となせるは思想の明確を缺くものなり多くの場合に於て分業を交換に先たさる可からず故に分業の起り得るは交換の先天性あるが爲めなりと云ふは皮相の見なり分業の原因は更らに深へ之を社會心理的の原因に求めたる可からず詳細は第三卷を見よ。

(24) 英語の Commodity は財よりも寧ろ本文に云くる交換財若くは商品の意に用らる即ち *commodity* なる

What supports and employs productive labour, is the capital expended in setting it to work, and not the demand of purchasers for the produce of labour when completed. Demand for commodities is not demand for labour. The demand for commodities determines in what particular branch of production the labour and capital shall be employed; it determines the direction of the labour; but not the more or less of the labour itself, or of the maintenance or payment of the labour. Mill,

Principles Bk. I. Chap. V. § 9

此云くもの此なり然るに *wealthealth* が——

The term *Commodity* has also been used for it (i.e. Goods), but *Good* is shorter, and is in correspondence with the German *Gut*. Marshall, Principles. Bk. II. Chap. ii. § 1. 2. E. 1891. p. 106 footnote.

と云へるは中らず *Gut* なる觀念は英國の經濟學に殆んど存在せず唯其の集合體なる *Wealth* の觀念ありしのみ *Commodity* なる語を此意味に慣用せしと云ふは非なり。

既に交換あり交換財あれば交換をするに當つて評量比較する心理上の二種の働きが
出で来る。一の財が他の財と交換せられるに當つて得て来るべき他の財の價值を與へ
る財の交換價值といふ。詳しく言へば交換價值は一の財が直接に其財の所有者の欲望
を充すに足ると思惟せらるゝ度合で無く、此財に換えて得ることの出来る他の財が之れ
を得んさする人の欲望を充足するに足ると思惟せられる度合を言ふのである(25)。蓋し
交換が起り得るには或二つの財に對して異つた價值を置いて居る二人の人があること
が必要の條件である。例へば甲乙の兩人があつて牛と馬とを交換するに當つて甲は馬

を所有し乙は牛を所有して居るを假定すれば、馬を所有して居る甲は交換して乙に與ふべき馬よりは、之に換えて得て來るべき乙の所有の牛の方が、己の欲望を充すに足る度合が多いと信じ、乙は之に反して己が與ふる牛よりは、之に換えて得る馬の方が、己の欲望を充足するに適して居ると信ずるから、交換が成立するのである(26)。此場合に於て馬の交換價值は、牛が馬の所有者の欲望を充すの度合を言ひ、牛の交換價值は、馬が牛の所有者の欲望を充すに足ると思惟される度合を言ふのである。此の如く交換價值は、之を交換して得る他の財に對する、人間の主觀的使用價值に依つて定められるものであるから、價值は使用價值でも交換價值でも共に主觀的の觀念である(27)。

(25) The value, that is the exchange value, of one thing in term of another at any place and time, is the amount of that second thing which can be got here and then in exchange for the first. (Thus the term value is relative, and expresses the relation between two things at a particular place and time). Marshall, O. C. Introduction, p. 8.

「トーマソンの此語は尙本文述ぶる所に近きものなり、然れども交換價值も亦此場合に

於て主觀的なることは氏の論及せざる所なり。

(26) 是れ予が最も意を用ゐて明確ならしめんと欲する學理なり、予は此思想を英國諸學者の所既に得たり、然れども之を推考するに於て英國派の全然反對の結論に到達せり、彼の Consumer's rent or surplus なるものを唱導する諸氏は、予が茲に説く所に思到せざるものなれば、可からず、何んとなれば、若し本文述ぶる所の學理を採用せば、凡ての命令に於て諸事者双方に所謂 Surplus utility を生ずるものにして、獨り消費者の側に限られたるに非ざるの理明白なる可ければなり。

.....the price which a person pays for a thing, can never exceed, and seldom comes, up to that which he would be willing to pay rather than go without it: so that the gratification which he gets from its purchase generally exceeds that which he gives up in paying away its price: and he thus derives from the purchase a surplus of pleasure. The excess of the price which he would be willing to pay rather than go without it, over that which he actually does pay is the economic measure of this surplus pleasure: and for reasons which will appear later on, may be called *Consumer's Rent*. Marshall, O. C. p. 180.

此説は幾多の空隙と誤謬を包蔵す殊に之を以て不可動學理として Consumer's Rent Curve を稱するものを想像し出すに至りて支離滅裂の感なき能はず、Rentなる確定の意義ある語を濫用するの不可なるはさて置き、市價を以て與へられたる大きさなし、之れに對し其財より得可き欲望充足を一定量に確定して計算的に加減秤量するが如きは putting the cart before the horse を云はざるべからず、假りに之等の空隙を許容するも、尙其根本的思想は全然誤謬に基けるものなり。Priceなるものは買手より見れば其得可きものの價値を表はし、賣手より見れば其與ふべきもの、交換價値を示すものなり。故に買手(消費者)の側に於て支拂ふ物價よりは其得るもの、主觀的使用價値の多かるべきが如く、賣手(生産者又は商人)の側より見るも、亦其賣品よりは其時其處に於ては、是れに換へて得る貨幣額(物價)の方遙かに多く其欲望を充すものならざる可からず、之れあればこそ賣買は起るなり、獨り消費者のみが餘剩の利用を得るをとするは貨幣の媒介あるが爲めに其間の現象複雑なるに謬まられたるなり。彼の Patten (Theory of social prosperity) 以下の諸氏が雷同附和架空の思想の上、更に架空を構成して新學理を發見せりと稱するが如きは、米國獨特の第二次的學問の弊なり、我邦の學者之れを受賣するものあらば予は遺憾なく之を攻撃せんのみ幸か不幸か新説未だ我邦に普及らず、予が之れを攻撃する

は偶々百里以外の遠雷を聞くが如き觀を呈せんを恐る、之れに比して謬説ながら如此第二次的所論を唱出する米國の學問界は遙かに羨望す可きものならん。

Gide Principes, p. 210. 參照

(27) 價値の主觀客觀を區別するは塊國派の夙に唱導する處にして近來之れに附和する學者渺からず、是れ既に從來の使用交換の區別のみに限られたるに比すれば非常の進境なり、而も交換價値に又主觀的交換價値あるの理に至りては未だ多くの人の説かざる所なり、予は幾多推究の結果本文説くが如き論斷を敢てするものなり、此點に於ても亦畏敬する恩師フレンケル先生に負ふ所少からず、雖も先生は主觀的交換價値の説明には多く力を用ゆる要なきをせらるゝが如し、予が師説に孤負しても尙且つ之れを主張せんとするは深く自ら信する處あればなり、而して塊國派の唱ふる主觀的交換價値の説明は予が本文に取れる見解を其趣を異にする所なくんばならず、 Böhm-Bawerk, Grundzüge der Theorie des wirtschaftlichen Güterwertes, Jahrb. f. N. u. S. N. F. Bd. XIII 1886, S. 1—82, 477—541. Derselbe, Capital u. Capitalzins, 2. A. 1902, S. 135 ff. Die Grösse des (subjektiven) Gebrauchswertes bemisst sich nach der Grösse des Grenznutzens, den das zu schätzende Gut im Eingangebräuche bringt. Die Grösse des (subjektiven) Tauschwertes dagegen trifft offenbar zusammen

mit der Grösse des Gebrauchswertes der für das Gut einzutauschenden Gebrauchsgüter..... Die Grösse des subjektiven Tauschwertes ist daher zu bemessen am Grenznutzen der für dasselbe einzutauschenden Güter. Föhm-Bawerle, a. a. O. S. 176-7. —
 を云へる合せ考へて其異なる所以を知るべきなり。

トコロが今日の經濟生活にあつては、此の如き交換は唯一回に止らないで數回行はれるのである。例へば甲が乙と或物を交換するのは其交換して得た物を以て直ちに自己の欲望を充すに當てやうと思ふからで無く、更に之を丙なるものに與えて、之と交換するこゝが出来ると思ふからして、今甲と交換して置き、又丙は乙から得た所のものを以て直に自己の欲望に充すに供せないで、他日更に丁なる者と交換するに供する爲に、今乙と交換して置くといふやうなことが、今日の經濟生活普通の現象である。此の如く交換をする事を以て業務とし、之を營んで以て己の利益を收める目的を以てする經濟行爲は之を名けて商業と言ふ(28)。此の如き商業の目的となつて數回轉輾し數人の手に渡る交換財は前に言つた通り商品である。

(28) 商業の定義を稱して難解の説明をなすものあり、予は斷じて取らず、彼の商業に法律上の意義、經濟上の意義等を分つものは商業の何たるを知らざるものなり、法典に謂ゆる商業は唯規定の便宜上名くるものなり、故に事實誰人も商業と看做さざるもの幾多を包含す、之れ唯法典の上に於ける規定の便宜のみ、法律の純正なる學理より出づるにはあらず、之れを眞面目なる學理論中に混雜するは心なき業なり、所謂商法なるものは商業のみに關する法典にあらず、Verkehrsrechtと見る可きものなり。(三浦新七博士著商業學本論第一卷九頁以下參照。)

Goldschmidt, Handbuch des Handelsrechts. Bd. I. 2. A. 1875. § 40. S. 398 ff. 參照。

然るに如此交換が度々行はれ多くの財は欲望充足に用ゆる前には一度は交換財の形態を取り、而して各人は欲望充足に用ゆる財は直接自ら手を下して生産する外に、交換を云ふ間接の獲得方法に依頼するこゝが多くなつて來る、茲に一の重要な變化が起て來る。即ち交換をなすに當り、甲乙の兩者が其交換財の交換價值を計るに、雙方の財を相互に比較評量しないで、更らに第三の財の分量で以て言ひ表はす様になつて來る、こゝ之れである。之れを稱して價格と言ふ(29)。例へば甲は馬を所有し乙は牛を所有して居る。

馬と牛との交換の價值を定めるに、馬の交換價值は牛なり、牛の交換價值は馬なりと云ふ様に評價しないで、第三の財例へば米を以て之を計り、馬と牛とが米の分量何程に均しと云ふ。此の様に常に交換に當つて、第三の財として他の財の交換價值を定むる標準となるものは貨幣である。凡そ貨幣といふものは、交換をするに當つて如此價值の標準となる物である。ところが既に價值の標準が在る以上は、甲乙は又直に馬と牛とを交換しないで、甲は所有してゐる馬に換へて丙の所有して居る貨幣を得て之を丙に渡し、甲は丙から得た貨幣を以て乙の牛と交換をするといふやうに、貨幣は又交換の媒介となるのである。今日の經濟生活にあつては、貨幣とは一般共通の價值の尺度であり、一般共通の交換の要具であり、さうして一般共通の價值の保藏要具であつて、是等の三つの性質を一般に政治上の權力で以て公けに認められた財を稱して言ふのである。蓋し既に一般に認められた尺度であり、亦交換の要具であるといふ馬を所有して居るものでも、牛を所有して居るものでも、之に換えて貨幣を得てさへ置けば、何時にても此貨幣に對して自分の欲する物は何でも之を得ることが出来るといふやうになるから、直接に自分の欲望を充す

に要することの無い物は、財其物を所有して居らないで、何時でも其財を得ることの出来る手段である貨幣を保藏して置くやうになる。即ち貨幣には第三の性質として、價值保藏の要具といふ性質が出て来る。既に此の如く一般に用ゐられるやうになるに對して、自然習慣上皆が認識を與へるやうになる。習慣上既に認識を與へるやうになるに、又た政治上で之に對する公けの認識を與へるやうになる。此の如くなつたものが完全なる意味に於ける貨幣で、數千年の長い歴史的發展の結果此に至つたものである。

(29) 價值なる成語もまたへなる俗語も共に善く原意に適へるものと信ず、唯之れを物價と區別するの稍適當ならざるを思ふと雖も、固と Price, Preis の語も亦 equivalent の義より出てたるを考ふれば、首肯し難きにあらず。直段の語は物價に最もよく適當すべしと信ず共に客觀的の數量を言表はすに用ゆ可きなり。獨語の Wert と關の Warte とは、英佛伊の Value, Valeur, Valore を全然同一視す可きにあらず。前者は、後者の義にのみ用られ、後者は多くは、あたへの義に用らる。最も注意を要する點なり。——猶予は物價 (money price) と市價 (market price) との間には、詳密に過るの嫌を辭せずして、區別を施すの要ありと信ず。然る時には、物價を、だん、と云ひ、市價を、そ、う、ば、と、呼ぶを適當なりとす。——本編以下單に價

値云ふときは常に主觀的觀念たるべし。うちを意味し、價格云ふときは客觀的のあた
り (equivalente, tertium comparationis) の義に用ゆるものと知る可し。

ところが今日の私有財産を基礎として居る經濟生活にあつては、經濟上の財たるには
欲望充足の用に供するには先づ之を獲得占有するを要する。然るに獲得占有の方法は
生産と交換の二つである。交換によつて財を得るには換へて得んとする財に對して他
の財又は給付を與へなければならぬ。生産をするには他の財を費用し又は勞働を施
さなければならぬ。無償的占有云ふ獲得方法は無く、悉く給付反對給付の關係によ
つて支配せられて居て、凡ての財の獲得は生産にせよ交換にせよ、悉く有償的である。言
を換へて言へば、得るものに對して必ず與へるものがなければならぬ。これは既に説い
た通りである。此與ふるものと得るもの即ち給付と反對給付は、貨幣經濟以前にあつて
は單純に主觀的の價值しか有して居らぬ。即ち與ふるもの、主觀的使用價值と得るも
の、主觀的使用價值とあつて、與ふるものから云へば得るもの、主觀的使用價值が其
交換價值であるから、交換價值も亦主觀的交換價值の外は存せぬ。然るに貨幣經濟の今

日は凡ての價值は悉く貨幣の一定の分量に見積られ、生産も交換も財其物よりは一洗貨
幣の一定の數量に引直す様になる。然るに貨幣は貨幣としては主觀的價值を有するも
のでなく、純然客觀的のものであるから、如此貨幣に見積られた價值は客觀的たらざるを
得ない。之を稱して客觀的價值又は價格と云ふのである。今日の經濟生活に於ける
價格とは、必ず一定の貨幣額にて言表はされたものである。

客觀的價值にも亦客觀的の使用價值と客觀的の交換價值とがある。客觀的の使用價值
とは又稱して收穫價值とも費用價值とも云ふ、何れも同じことを色々に云ふに過ぎぬ。
之れは生産と云ふ獲得方法によつて財を有償的に得るとき、其の爲めに費した財并に勞
働給付の貨幣に見積られた丈の價值であつて、之れを收穫價值と名けるは、收穫するに
費したるもの、貨幣に見積られた價值の總量と云ふ意味で、何れも客觀的のものである
而して、若し之れを交換と云ふ獲得方法によつて得るときは、之れを得るが爲めに換へて
反對給付として其所有者に與へた貨幣に見積つた價值を客觀的の交換價值と云ふので
ある。如此交換をするに當り、一の財に換ゆる可き貨幣額の數量を、其財の貨幣價格(直

の(30)。

(30) 従來の學說は本文の所論と其趣を異にし Preis, price を貨幣額にて言表はるるたる客觀的の交換價格 (Value in exchange) なりを説く例やぞ。

Instead of expressing the values of lead and tin, and wood, and corn and other things in terms of one another we express them in terms of money in the first instance; and call the value of each thing thus expressed its price. Marshall, op. cit. p. 8.

●●●●●●●●●● Preis) を貨幣價格 (ひたし Geldpreis) を嚴密に區別せざるは其の多年推考の結果に成るものなり従來の學者の所論中母語に著目したるはハントナーなる語が。

Der Preis eines Gutes ist „die Menge anderer Güter, für welche es wirklich vertauscht wird.“

An und für sich kann ein Gut social Preise haben, als es Guter giebt, gegen welche es ausgetauscht wird. Mit anderen Worten: jedes Verkehrsgut kann als Zahlungsmittel für jedes andere Verkehrsgut dienen. Der Geldspreis ist nur eine Preisform, die üblichste. Wagner, a. a. O. S. 489.

ハントナーを嚴密にし。

Wenn daher „Viele, z. B. A. Smith und zahlreiche seiner Nachfolger, unter Preis nur demjenigen

Tauschwertverstehen, welcher in Geld gegeben wird, so ist dies eine zu enge Begriffsbestimmung des Preises. Denn der Kauf gegen Geld ist nur als eine Art des Tausches, freilich als die regelmäßige in jedem etwas entwickelteren Verkehr anzusehen. Warum sollte man bei Völkern, die den Gebrauch des Geldes noch nicht kennen, die aber tauschen, nicht ebenso gut von Preisen der vertauschten Dinge sprechen? a. a. O. S. 339.

悉く皆その難い難いハントナー以上の語彙に即ち其の旨をなす。

Der Begriff des Preises ist also allgemein zu fassen, dass jedes Tauschäquivalent, es sei Geld oder etwas Anderes, unter ihn gebracht werden kann. a. a. O. S. 339.

Die Einbürgerung des Geldes im Verkehre bewirkt dann, dass die Preise gemeinlich als Geldpreise erscheinen, so sehr, dass späterhin beim Worte Preis meistens nur an den Geldpreis gedacht wird. Aber letzterer ist nicht schlechweg „der Preis,“ sondern wie schon bemerkt, nur die üblichste Preisform. a. a. O. 344.

此見解は前段のローマン等の説く所に比し進かに進境を認むる雖も、猶予輩が本文に

値の高低は、物の性質や用途の異なるからである。

Wenig stichhaltig ist hingegen die frühere Auffassung, dass der Preis der in Geld ausgedrückte Wert sei. Denn beide, Preis u. Wert (d. h. Wert in der hier in Red estehenden Bedeutung) werden regelmässig in Geld und können beide auch z. B. in Roggen oder Weizen oder irgend einer anderen kurrenten Ware „ausgedrückt“ werden. Desgleichen erscheint unhaltbar die ebenfalls oft ausgesprochene Behauptung, dass der „Wert nur die allgemeine Möglichkeit“ der Gewinnung von Entgeltobjekten, der Preis dagegen „die spezielle Wirklichkeit“ bedeutet. Neumann, Wirtschaftliche Grundbegriffe. Schönberg's Handbuch I, I. S. 170.——

これ即ち前掲バースマンの組織せる從來の定論に對する正確なる非難なり。バースマンの如きすらも亦次の如き淺薄の説を爲す。

Die Möglichkeit gegen Ueberlassung eines Gutes von andern Personen Vergeltung zu erlangen, heisst Tauschwert desselben, die Menge der empfangenen Güter sein. Preis. Hermann, Staatswirtschaftliche Untersuchungen. S. 106.——

商務大家バースマンの説く所亦多く此上に非ずや曰べ

„Der Tauschwert ist der allgemein anerkannte Brauchlichkeitsgrad (?) eines Umsatzobjektes, dessen allgemein anerkannter Fähigkeitsgrad gegen andere Güter umgesetzt zu werden. Der in dem entsprechenden Quantum eines andern Guts (Tauschäquivalent) ausgedrückte Tauschwert, ebenso (?) dieses Tauschäquivalent selbst heisst der Preis. Goldschmidt, Handbuch des Handelsrechts, Bd. II. S. 40.——

此等の説に對してバースマンの説へ所續に續きやる程の如きは、固く此の點に對して、
Vielmehr darf man behaupten, dass bei beiden, Wert wie Preis, (falls man so wenig sagende Worte überhaupt gebrauchen will) regelmässig eine ganz „spezielle Wirklichkeit“ in Frage kommt, so z. B. bei jenem Wert der Aus- und Einfuhr und bei Schätzung des Wertes beschädigter oder zu expropriierender Vermögensobjekte jedenfalls nicht minder als bei dem Preise von Ladenartikeln oder verkauften Immobilien. Und irrig ist endlich auch die oft betriebte Identifizierung von Preis und Preimum. Der letztere Ausdruck wird nach gemeinen Rechte vielmehr häufig auch für Wert (in der hier in Rede stehenden Bedeutung dieses Wortes) gebraucht. Und ausserdem ist Preimum nach römischem wie gemeinem Rechte etwas dem Kaufe Eigentümliches. Vom Preise hingegen sprechen

wir in unserer Wissenschaft wie im Leben auch z. B. beim sog. Naturaltausch von Sachen, desgleichen beim Tausche von Leistungen gegen Sachen oder Leistungen und erörtern daher neben den Warenpreisen auch z. B. Fracht-, Pacht-, Miets-, Arbeitspreise u. Neumann, a. a. O. S. 171.

然れどもノイマンが從來の所説を打破して創案せる價格の説明(前掲一七一頁にあり)は予の到底服し難き所なり、猶第四卷に詳論すべし。

猶貨幣價格(直段)(Geldpreis)と市價(相場)(Marktpreis)とは常に同一視すべきものにあらず、予は前者をネグ、と云ひ後者をソウ、と名けて稍詳密の區別を下さんと欲するものなり。

然るに今日の私有財産制の法律の下にあつては、財其物を直ちに獲得占有する計りではいけない。之れに對する所有權を併せ得なければ欲望充足に充てることは出来ない。生産にせよ、交換にせよ、其財其物を獲得する計りでなく、同時に之れが所有權を收得せねばならぬ。今日の經濟生活にあつては、此客觀的性質はいよいよ押擴められてある。即ち價格云ふものは、財其物に換ゆべき貨幣額の總量を直ちに云ふのではなく、其財の所有權に換ゆべき貨幣額の總量の意味である。如此一の財の所有權に換へて授受せらる

る一定の貨幣額を、其財の貨幣價格(直段)云ふのである。貨幣價格(直段)とは前の馬と牛との場合と違つて、馬と貨幣と交換するに當つて得る貨幣の數量を言ふのである。貨幣其物は何も直接に人間の欲望を充すものではない、交換して他の物を得るから初めて間接に人間の欲望を充すことが出来るものである。故に貨幣で言ひ表はされた財の價格即ち客觀的交換價值は、決して主觀的判斷で無く純然客觀的のものである。馬の價格(アタへ)何程と問ふときは、其馬が之れを使用する人又は將さに所有せんことを欲する人に取りては、如何程の度合に於て其欲望を充たすことが出来るか云ふ意味ではなく、之れを得るが爲めには何程の他の財を與ふべきや、之れを人に與ふるべきには何程の他の財を換へて得ることを得るやとの意味である。アタへとはアテアヒの義で、何程之れにアテアヒて相當しなすかとの意味である。即ち純然客觀的の概念である(31)。であるから個々人々の主觀的心理上の働きに依つて少しも影響せられない夫れ自身に一定の力を具えたもので、其力は其物の性質とは少しも關係は無いのである。例へば牛の使用價值は或はこれから乳汁を採り、或はその肉を喰ひ、或は之を耕作の用に供すること

にある。此半を所有する者が其半の働きに依りてされれば自分の欲望を充つことが出来るが、いふ判断は、人々所々に依つて異なること有り得るものである。即ち此半の価値は主観的で之れを直接に所有するものを享用する場合でも又は人の所有して居るものを交換する場合でも之に對して置く価値は主観的である。然るに貨幣には夫れ自身の性質は少しも關係が無い唯其分量だけには差異があるのである。一圓の貨幣と十圓の貨幣との差は唯だ一寸十といふことだけ性質上の差は少しも無い。是即ち貨幣を目して純然たる客観的の物であり貨幣に依つて定められた財の價格（客観的交換価値）即ち直段は價值（主観的の使用並交換価値）と違つて客観的のものであるといふ意味である(32)。

(31) 此區別は予の最も重きを置かんことを欲する所なり從來の經濟學書に此點に重きを置きて論ぜるもの殆どなし唯換國學者の最近此點に關し周到なる説明を加ふるあり然れども本文に就ける邊に及ばざるもの多し予が所論は其の根本思想を最も多く *Sittlitz, Philosophie des Geldes, 1900. (3. A. 1920)* に負ふ不幸にしてシムメルの空前の脚

大著は其思想の深遠なるを其措辭の難解なるとの爲めに其價值を充分に發揮せざるが如く殊に本邦の經濟學者より極めて冷淡なる待遇を受けるは最も惜むべきことなり予は氏の所論の一部を企業心理論（内外論叢第二卷第二號）の第一章に在と有其分岐と貨幣と題して稍讀易き邦語を以て祖述するに勉めたり猶後卷に於てシ氏の功勞を發揚するに勉むる所あらん。

(32) 企業心理論七頁以下參照

之れを以て *price* と *prithin* とを混同し *Preis* と *Wert* とを同一視するの學理階明に當あるの理明なるべし。貨幣ありて初めて最も嚴密なる意義に於ける客観的の價格は存在し得るなり彼の實現せられたる交換價值なりとの淺薄なる説明の到底窺ひ知る能はざる學理上の妙趣茲に在り――

今日の立脚地よりしてマーシャル、ヘルマン以前の諸學説を見る恰かも峯頭に立て浮雲を瞰下するが如くならずんばあらず之れ實に奧國派諸氏（レンタン）ノ先生並にシムメルの賜なり猶ケニースは既に左の如く言て此理を道破したり。

.....So stellt sich denn auch ein wachsendes Bedürfnis nach genauer Benennung von Grössenunterschieden im Werte der wirtschaftlichen Güter ein. Diese aber sollen in Grössenunter-

schieden den als Geld gebrauchten Gutes einen entsprechenden Ausdruck finden. Es konnte dann zunächst ein misliches Hemmnis darin belegen sein, dass auch in dem als Geldgut gebrauchten Gegenstand selbst *Grossenunterschiede in der Güte*, in der „Qualität, wahrzunehmen und abzuwägen“ wären, wie dieses offenbar auch mit dem Heerdenvieh der Fall ist, indem es ja Pferde u. s. w. von sehr verschiedener Güte giebt. Bezüglich der edlen Metalle aber kann von diesem Hemmnis keine Rede sein; sie gehören——so viel wir bis dahin wissen——zu den „elementaren“ Körpern; jedes Stück reinen Goldes oder Silbers hat ganz dieselben stofflichen Eigenschaften, an welcher Stelle der Erde es auch gefunden sein mag, und *für keines ist noch ein besonderer Wert seiner Form* (ausser seinem Stoffwert) zu beachten. Hierzu kommt aber dann die fast unbegrenzte physische Teilbarkeit der Edelmetallstücke, welche in Verbindung mit dem grossen spezifischen Wert von Gold und Silber es möglich macht, auch sehr kleine Wertgrössen und Wertunterschiede durch besondere Stücke darstellen zu lassen. Und weil der einzelnen Edelmetallstücke nur im Unterschiede ihres Quantum belegen ist, so können auch die aus ihrer leichten Schmelzbarkeit für Teilung und Kommissierung derselben in Aussicht stehenden Vorteile ohne jeden Verlust erzielt werden. Knies, Geld. 2. A. 1885. S. 17-18.

貨幣は人間の欲望を直接に充足しないから之を經濟上の財と看做すことが出来ないかと言ふにさうでは無い。欲望を直接に充足しない間接に充す手段であるといふことは、權利或は關係等と異なるが、貨幣が是等と異なる所以は、貨幣は一度其使用が普及すれば、此れに對する特別の欲望（貨幣欲望）が起り、凡ての欲望は先づ貨幣に對する欲望の形を取る様になることである。ソコで貨幣が起つてから後は、經濟上の財の觀念も擴められ直ちに人間の欲望を充足しない間接に之を充す手段たるものに對して一種の欲望が発生して來る。此欲望を充す物であつて、占有の目的物たり又は目的物たることが出来る外界の物であり、而して具象的の有形物たる貨幣は、最も充分な意味に於ける經濟上の財と言はなければならぬ(33)。貨幣は其初貨幣ばかりの用の爲に存在した物で無く、或は貨幣として交換の用に供する場合もあり、或は直接に欲望を充足するに用いた場合もあるものであつた。即ち日本で云へば、稻布、支那で言へば、貝殻、刀劍、西洋で云へば、家畜などが最も古い貨幣であつた。家畜なり稻なりと云ふ物は、之を用ゐて交換の用に供することも出来るし、又直接に之を喰ひ之を屠つて互の欲望を充すに當つる事も出

来る。然るに今日に在つては是が變遷して貨幣は何時でも唯だ貨幣の用ばかりを務めて直接に欲望を充すのでなく一種特有の欲望のみを専ら充す様になつて仕舞つて貨幣専門の財が出て来た。斯く直接の欲望と關係なく唯交換の目的ばかりに供せられる貨幣が存在するやうになる時代を稱して貨幣經濟時代と言ひ其以前の時代を自然經濟時代又は自足經濟時代と言つて互に嚴格な區別をする（此二の異なつた時代は經濟生活の諸現象に對する觀念も亦根本的に違つて居るので今茲に説く經濟上の根本觀念は貨幣經濟時代の觀念たるものを云ふので之れを自然經濟時代にあてはめるには訂正を加へなければ其真相を失ふのである。此事は章を重ねるに從て明かになるであらう。）

(88) 予の貨幣を財なりとする理由は從來の所説と其揆を一にせず。——

There are similar difficulties as to how far money is to be reckoned as part of national wealth.

Marshall, op. cit. p. 112. foot-note. ——

殊に貨幣は直接に欲望を充足せずして猶財たる所以を闡明するに勉めたるもの稀なり之れ欲望の心理的研究極めて淺薄にして欲望は經濟發展の度合に從ひ又進化發展すべし原理を充分究めずして輕々に皮相の見を下すによる彼等にして其欲望財等に對し

て下せる定義に忠ならしめんか遂に貨幣は財にあらずとの結論を得るの外なかる可きなり唯彼等は欲望なる語を極めて曖昧の意義に使用して單に貨幣は又交換上人類の欲望を充たすものなりと云ひて此難關を塗抹するのみ尙後卷に詳述すべし假りに企業心理論第二章を讀み置くと可なり。

譯 Knies, Geld. S. 19-20 を併せ見よ。——

Es steht deshalb ebenso unumstößlich fest, dass wenn und soweit überhaupt das besondere Quantum wirtschaftlichen Wertes, welches die unterschiedlichen konkreten Güter umschliessen, geschätzt und bemessen werden kann und soll, dies nur mittelst eines Gegenstandes möglich ist, der selbst wirtschaftlichen Wert hat, selbst ein wirtschaftliches Gut ist. Knies, a. a. O. S. 148.

Tout monnaie est marchandise, a dit Turgot (Essai sur la formation et la distribution des richesses, § 42), et cela est vrai à la condition de ne pas assimiler la monnaie de tout point à une marchandise. La vérité qu'exprime l'apophisme de l'illustre économiste est que la monnaie a une valeur intrinsèque. La valeur en échange suppose l'utilité; celle de l'or et de l'argent tient à des causes multiples. Elle s'exhibe d'abord par les usages industriels auxquels servent les métaux précieux, mais aussi, et principalement par leur rôle monétaire. Il est incontestable que, si une

même substance sert presque universellement de monnaie, son utilité dominante est le service monétaire, et sa valeur sociale s'explique surtout par son emploi dans la circulation. Cela est spécialement vrai des métaux précieux; mais ce serait vrai encore, quoique à un moindre degré du fer ou du blé s'ils y étaient substitués, parce que les autres usages seraient relativement beaucoup plus importants: Cauwès, Cours. T. 2. § 521.

貨幣經濟時代にあつては、直接に欲望を充すこと無い物を以て總ての經濟上の價值の判斷の標準とし、直接に欲望を充すにも先此客觀的の貨幣を得なければならぬやうになつた。其以來總ての經濟上の財は人格的主觀的の關係を離れて全く客觀的物格的になつて來た(34)。此客觀的物格的の貨幣の所有權に換へて、財の所有權を授受する交換は之を名けて賣買と言ふ。賣買とは一定の財の所有權を貨幣の所有權に換えて與え又は受くる事を云ふ。此場合に於て換へて得べく或は換へて與ふべき貨幣が直ちに授受せられないで、財の所有權の授受と貨幣の所有權の授受との間に或期間を隔つる時は、即ち信用と云ふ現象が起る。貸借の關係に依つて他日の返済を信認して一定の貨幣を授受

する時も亦之を名けて信用といふ。

(34) 予は本文所説の根本思想はアリストテレス(Aristoteles, Politik I, 6)之を説く近來シムメル更之れを確めたり。

企業心理論第一章第三章等參照

Vor. Allen zeigt sich, dass konkrete Edelmetallstücke an sich kein Werkzeug, kein Messmittel für eine Grössenbestimmung darstellen. Sie sind materielle Gegenstände, welche als „Rohstoffe“ (als vertretbare Güter mit Stoffwert ohne Formwert) verwendet werden und ihre Vergleichung unter einander durch die Feststellung ihres Gewichtes finden. Die als Geld für Werthmessung zu gebrauchenden Edelmetallstücke werden also zunächst selbst—durch Bestimmung ihres Gewichtes—gemessen. Dies geschieht aber nicht um die Edelmetallstücke ihrerseits zur Gewichtbestimmung an anderen Gegenständen zu gebrauchen—etwa wie man einen Metallstab als einen Meter lang oder ein Eisenstück als ein Pfund schwer feststellt—, sondern damit das von einem bestimmten Gewichtsquantum edlen Metalles umschlossene wirtschaftliche Wertquantum als Messungsmittel verwendet werden könne. Wie leichtin man also auch dann und wann mit Aussagen verfahren möge, so muss man doch

genau diesen fundamentalen Satz festhalten:

..... *der Wert der wirtschaftlichen Güter wird nicht durch „das Geld“, durch „die Geldstärke“, sondern durch den Wert des Geldes, durch das Wertquantum in den bezüglich ihres Gewichtes bestimmten geldstärken gemessen.* Knies, Geld. S. 149—150.

此の命題を經濟學の根本原理として置くべきである。

魯 曼格, Grundsätze, S. 274—5 兼 マルク, Das Kapital. Bd. I. (Dass die Substanz des Tauschwertes ein von der physisch handgreiflichen Existenz der Ware oder ihrem Dasein als Gebrauchswert durchaus verschiedenes und Unabhängiges, zeigt ihr Austauschverhältnis auf den ersten Blick. 13 頁) 後註 47—50——

タウシュ価値の原理——

Die gesellschaftliche Anerkennung des Generischen in dem Gebrauchswert verschiedenartiger Gütergattungen kommt in dem Tauschverkehr bei arbeitsteiliger Produktion als Anerkennung eines vertretbaren, fungiblen Gebrauchswertes, dessen gleichgeartete Träger die gesamten, unseren wirtschaftlichen Bedarf befriedigenden, Gegenstände sind, zur tatsächlichen Geltung. Werden wirt-

schaftliche Güter von einer besonderen Gattung für Güter von anderen besonderen Gattungen gegeben und genommen, so werden die einen wie die anderen als wirtschaftlich gebrauchswertig und soweitin als artgleich und durch einander vertretbar und bemessbar anerkannt—wogegen dann, wenn ein Gut für Jemand Konsumtionsgegenstand ist, die Eigenartigkeit, das Spezifische der besonderen Gattung von Gebrauchswert in Wirksamkeit gelangt. Wenn die „fungiblen Güter“ (jene res fungibiles) einen gleichen (Gebrauches- und Tausch-) Wert in je einem gleich grossen Quantum aus derselben Gütergattung vertreten sein lassen, so wird ein gleiches Quantum unseres fungiblen Gebrauchswertes, welcher die bedingende Ursache für die Gleichung des Tauschwertes ist, durch die verschiedensten Quantitäten verschiedener Gütergattungen repräsentiert sein können, wie dieses in ihren gegenseitigen Preisbestimmungen seinen Ausdruck findet. Knies, Geld S. 160—1.——

と氏が論理の透徹程度の深遠處に敬仰を可し然れども予は其結論に至るは悉く之に服するを得ざるを憾とするなり讀者本文と對照熟讀後之れを知る可し。

第三節

以上述べたる如く貨幣はこれに換えて總ての財今日の經濟生活にあつては多くの商品の形態に現はれてゐる財を獲得し得るものである。故に一たび貨幣經濟が確定するに至れば人類の經濟行爲即ち財獲得の行爲は直接に欲望を充す可き財其物を得るので無く此の如き財を何時にても得る事が出来る貨幣を得ることを主眼とするやうになる。此の如く貨幣を得ることを目的とする經濟行爲を稱して營利行爲又は貨殖行爲と言ふ(註)。固より貨幣經濟時代にあつても直接に自分の欲望を充すに足るべき物を自ら作り出す場合はいくらかもある。之を名けて自己生産と言ふ。營利行爲の自己生産と異なる所は、一は直ちに欲望を充足すべき財を得る事であり、他は此の如き財を何時にても得る事が出来る貨幣を贏得することを目的として其貨幣をより多く得る目的を以て、自分の欲

望は直接には少しも充足しない、又充足させやうとも思はない財を作り出すことを言ふ。之を名けて顧客生産並に市場生産と言ふ。顧客生産とは其生産した財が直ちに其生産者の欲望を充すので無く、他人の手に渡り其得た他人は之を己の欲望を充すに供する生産を稱して言ふのである。市場生産とは何人が如何なる所に於て如何なる時に其の財を直接の欲望を充すに當つるかは少しも知らない、唯だ之に換えて貨幣を得さへすれば宜いといふ目的を以てする生産を言ふ。今日の經濟生活にあつては此三種の生産中最後の市場生産が最重要なる生産の形態である。市場生産は今言ふ如く必ずしも唯だ其物を捨へることが最上の目的で無く、貨幣を贏得する目的を達する一つの手段、一つの道行として營む生産を言ふのである。例へば、工業家が工業を營むに必ずしも木綿糸何柵機械何個を作り出すのを以て、主要の目的とせず、是等を生産するに依つて、より多く貨幣の形に現れたる利益を得る、即ち、より多く貨殖を圖るを以て第一の目的として、機械なり、木綿糸なり何んでも構はぬ、其時其處の事情に應じて唯貨幣をより多く將來すべき物を生産することである。技術上の製作生産と經濟上の營利生産とが分れるやうになつ

て來るは此意味である³⁶。此くの如くにして經濟上の生産は前に言つた營利行爲又は貨殖行爲と全く同意義に歸する様になる。茲に注意しなければならぬは此經濟行爲は之を所謂經濟本則と混同してはならないこと之れである。經濟の本則とは最少の勞費を以つて最大の結果を得ること、一定の目的を達する爲めの最良なる且合理的の手段の意であつて、此れを目して經濟行爲とするは手段を以て目的とする誤謬たるを免れな(37)。從來の經濟書の教ゆる所に依れば、之れが經濟の根本原則とせられて居るが(38)。此の法則は必ずしも經濟行爲のみに特有なものでは無い。今日の合理的の人類生活にあつては何事をなすにも得る結果は成るべく多くして、之が爲めに費すもの、成るべく少いことを欲するのは一般共通のことで、決して獨り經濟行爲のみに限られたことでは無い。例へば學者が學問するに當つても、成るべく學問研究の爲めに費す時間或は費用は少くして其研究の結果が成るべく多いことを期するのが當り前である。其他美術音樂文學等であつても、他の事情が同じ時には其得る結果に比して費すもの、成るべく少くして濟む手段を取らうとするのは當然である。日常普通の生活に於て一つの所から

他の所へ行くに、最短の距離最易の道路を取つて行かうとするの、多少しも相擇ぶところは無いのである。故に之を經濟行爲に特有の手段方法なりとするところは出来ない。又此原則に依つて支配せられて居るもので無ければ經濟行爲で無いといふ定義を下し、其れを以て技術との差異を示すものとして居るが、これも亦間違である³⁹。無論今日の發達した社會生活にあつては、人類の行動は凡て他の事情の許す限りは悉く此合理的方法を取るべきものであると言ふ迄もない。經濟行爲のみ獨り之れにより支配されるべきものとするは、己れを知て他を顧みない言ひ云はねばならない。即ち所謂經濟の本則とは、經濟行爲の目的を達する爲に執る一つの方法を示すに過ぎない譯で、經濟行爲の目的其物で無いことは多言を要せずして明かであらう。

(35) 經濟行爲と營利(貨殖)行爲とに關する本文の論述は、プリストレンスに得たる予の確信に基く論斷なり、從來の學者亦之れを説かざるにあらずと雖も、其間の真相を明確ならしむるに勉めたるもの鮮し。

Die Hauswirtschaftslehre ist nun offenbar nicht identisch mit der Lehre von der Vermögen erwer-

benden Thätigkeit; denn diese hat es mit dem Herbeischaffen von Mitteln, jene mit dem Gebrauche derselben zu thun; und was sonst für eine Kunst ausser der Hauswirtschaft sollte sich denn auch mit der Verwendung der eignen Hause zu Gebote stehenden Mittel befassen? Aber ist nun die Thätigkeit, die Vermögen erwirbt, ein Teil der andern, oder ist sie eine von ihr durchaus verschiedene Thätigkeit?—Das ist die Frage. Denn wenn derjenige, der sich mit dem Vermögenserwerbe befasst, darauf zu sehen hat, woher Geld und Besitz einkommen, so muss, da der Besitz wie der Reichtum sich auf viele Objekte erstrecken, zunächst ausgemacht werden, ob z. B. die Landwirtschaft ein Teil ist von der Kunst des Vermögenserwerbes, oder ob sie eine davon verschiedene Art ist; und überhaupt ist bei der gesamten Beschaffung der Nahrung und dem Erwerbe diese Frage aufzuwerfen. Aristoteles' Politik, uebers. von Stahlr. A. 2. S. 98. Buch I. Kap. III.—

我邦の太宗泰寧は最も明確に此二者間の區別を看破せることマリヌステレンスに劣らざるものあり而して其の予が貨殖行爲（マリヌステレンスの *chrematistica*）と名くるものを排斥すること泰寧又マリヌステレンスと同一轍に出づるも共に二十世紀の凡庸 *Zunfunktionalökonomien* の未だ思ひ及ばざる邊を道破したるものと云ふ蓋しマリヌステレン

ス時代の希臘も太宗泰寧時代（1680—1747）の我日本も最早純然たる自足經濟の世にはあらず而も貨幣經濟發生して未だ年處を経ざる過渡の時代にあり凡そ識見千古に卓越する碩學は或は時勢に *voreilen* するの說を立つるか或は遂かに過去に溯て之れを稱揚するに勉むるの傾あり之れ碩學と雖も人情の弱點を全く脱却する能はず時流を抜き凡俗を啓醒せんと熱心は知らず極端に走るものにして予が屢々或る意味に於ては眞理は凡庸の中間説に存せずして挺世拔群の極端説中に求む可しと云ふ所以なり——

識見卓絶なる泰寧も猶儒教の回顧的向下的發展觀を持し先王三代の世の黄金時を夢み世の益々弛季に赴くよしを嘆ずるの邊は *noch in den Kinderschuhen stecken bleiben* するものなり—是れ彼れが貨幣經濟貨殖行爲の排斥に力を餘さず古の善政先王の遺道を回復せんと勉むる所以なり—今其一節を摘録せん——

天下を治むるに穀を貴て貨（貨幣）を賤むるは古の善政なり（然り純然タル自足經濟ノ世ニアリテハ外ニ道ナケレバナリ）先王の道なり穀は民の食物なり食は民の天なり一日もなくて叶はぬ物なり貨とは金銀錢なり金銀は勝れたる寶と人毎に思へども飢たる時金銀を嚙ては腹充たず（アリヌステレンスノミタズテ嗤笑セルト對照ス可シ）一椀の粥を啜れば死を免かる寒き時金銀を山の如く積て其中に居ては暖ならず一つの

被布を着れば病起らず、是金銀は人の飢寒を救ふ物にはあらざるなり（貨幣經濟交通經濟ノ今日ハ金銀貨ノ如ク飢寒ヲ救フニ有力最便ナル物ハアラザルナリ）、然るを思なる（今日ニテハ賢キ）民は米穀よりも勝れる寶と思へるは金銀あれば米穀は求め易しと思ふ故なり、治世には交易賣買の道いづくまでも達する故に、金銀さへあれば米穀も布帛も即時に出来る、又米穀は「かさ」高く重き物なれば「もちありく」に勞煩なり、金銀は懷中に入れ腰に佩て百里千里をも行き一握にて許多の用をたす物なり、是に因て世俗愚人は是れに過たる寶はなきと思ふなり、亂世に遇ひ又は後の世にても凶年飢歲にて米穀の乏き時に當りて金銀にて米穀を求め難きことあらば如何せん、（是レ近世各國が戦時ニ於ケル食料問題ニ苦心焦慮スル所以ナリ）、是れ金銀の徳の米穀に及ばざる道理顯然たり、古人此理を知る故に漢晁錯が如き人文帝に奏聞して穀を貴び貨を賤しむる道を勤め奉れるなり、日本にても古は穀を貴びて金銀を用ふことは後世の如くにはあらざりしと見ゆ（吾數百年ノ間全ク貨幣ヲ用ユルヲ知ラザル蠻國ナリシト堯舜ノ時代ト同シカリシナリ、西洋諸國何レカ皆然ラザルハナケン）、當代は天下の人東都に輻輳し諸侯貴人より庶民に至るまで旅客にて居住する故に、萬事を金銀にて行ふこと風俗となり遠國までも同然なり、（貨幣經濟ノ發達ハ即チ是レヨリ來リシナリ）、是れより米穀を賤めて金

銀を貴ぶこと古代よりも甚し、太平の世に生れて民は食を以て天とすと云ふことを人知らざるなり、——經濟錄第五卷食貨、經濟雜誌社出版本一四六至一四七頁——
ミルの明晰なる頭腦は到底此間の消息を看過する能はざりしが如し、曰く——

In common discourse, wealth is always expressed in money. If you ask how rich a person is, you are answered that he has so many thousand pounds. All income and expenditure, all gains and losses, everything by which one becomes richer or poorer, are reckoned as the coming in or going out of so much money. It is true that in the inventory of a person's fortune are included, not only the money in his actual possession, or due to him, but all other articles of value. These, however, enter, not in their own character, but in virtue of the sums of money which they would sell for; and if they would sell for less, their owner is reputed less rich, though the things themselves are precisely the same. It is true, also, that people do not grow rich by keeping their money unused, and that they must be willing to spend in order to gain. Those who enrich themselves by commerce, do so by giving money for goods as well as goods for money; and the first is as necessary a part of the process as the last. But a person who buys goods for purposes of gain,

does so to sell them again for money, and in the expectation of receiving more money than he laid out: to get money, therefore, seems even to the person himself the ultimate end of the whole. It often happens that he is not paid in money, but in something else; having bought goods to a value equivalent, which are set off against those he sold. But he accepted these at a money valuation, and in the belief that they would bring in more money eventually than the price at which they were made over to him. Mill, Principles. Prel. rem. p. 3.

よるべし其の可なりと欲するも其の論議を以て終るに非ざるは其の非也とす。

Alle economische wetten hebben op commerciële handelingen betrekking; het wezen dier handelingen moet worden aangeduid.

Zuiver commercieel is iedere handeling, waarbij krachtens overeenkomst een offer wordt gebracht van geld, goed of arbeid, tegen een praestatie, welke naar de schatting van hem, die het offer brengt, ten minste gelijke waarde heeft. In de meeste gevallen is de beweegreden tot het verrichten van zulk een handeling eigen stoffelijk voordeel; dikwijls echter wordt niet stoffelijk, maar ander voor-

deel beoogd, of is stoffelijk voordeel te verkrijgen wel het oogmerk, maar niet het einddoel. De bewijzen hiervan zijn overvloedig. Niet om stoffelijk voordeel te verkrijgen koopt men toegangskaartten tot een concert of toneelvoorstelling; vermaak of kunstgenot is hier het doel. Maar dat doel acht men een offer waard, en zoo blijft de handeling commercieel. Hetzelfde geschiedt, wanneer men in vrije uren voor loon eenig werk verricht, ten einde het verdiende geld te kunnen wegschenken, of wanneer men optreedt ter behartiging der helangen van anderen. Zuiver commerciële handelingen kunnen volbracht worden uit zeer hooge beweegredenen. Wie kleeders en levensmiddelen ter nitreiking aan armen koopt of woningen laat bouwen voor behoeftige lieden, kan bij het koopen en aanbesteden streng commercieel te werk gaan; maar eigen stoffelijk voordeel zal hij zoodoende niet najagen. Men heeft dikwijls beweerd, dat de economische wetten op deze onderstelling rusten: de mensch tracht alleen naar rijkdom; en sommigen zijn nog verder gegaan door reeds het uitgaan van die onderstelling op ethische gronden af te keuren: dit zou zijn verheerlijking van de zelfzucht. Wij achten dit onjuist. De economische wetten rusten niet op de onderstelling, dat de mensch alleen naar rijkdom tracht, maar op het feit, dat de mensch commerciële hande-

lingen verricht. Zelfs dan wanneer bij die handelingen steeds eigen stoffelijk voordeel werd beoogd—hetgeen niet zoo is—zou men tussehen die beide uitspraken behooren te onderscheiden.

Want dagelijks of bij tusschenpoezen commercieele handelingen te verrichten is niet hetzelfde als door commercieele beweegredenen geleid te worden in alles wat men doet. Verkeerende in een maatschappij, welker huishouding op ruil is gegrond, volgt de mensch, zoodra hij aan het ruilverkeer deelneemt, de regels die voor dat verkeer gelden. Dit wordt van hem verwacht, gelijk de naleving van soortgelijke regels van hem verwacht wordt, wanneer hij deelneemt aan het kaartspel. Treedt hij op tot verwerving van inkomen, tot aankoop van benodigdheden, tot belegging van kapitaal, zoo onderstelt eez ieder, die met hem handelt, dat hij de belangen die hij voorstaat—zijze eigene of die van andere—zal ter harte nemen. Naar deze onderstelling gedraagt men zich jegens hem. Dit wetende zorgt hij, dat zij bewaarheid wordt. De ervaring leert dat commercieele handelingen dagelijks en met groote opgewektheid kunnen verricht worden door personen, die het verdienende geld voor een groot, misschien wel het grootste deel zullen wegschenken. Het handelsleven trekt hen aan, en zij weten, dat hunne bedrijvigheid welvaart zal verspreiden. Men ziet ook zeer mild-

dadige huismoeders bij hare dagelijksche inkooppen een echt commercieelen geest aan den dag leggen; zij houden philanthropie en huishouding streng uiteen, van oordeel zijnde, dat dit wenschelijk is voor beide. Het moge vreemd schijnen, dat de mensch van het eene oogeblik op het andere een geheel verschillend standpunt kan innemen: un vlak tegenover zijn medemenschen kan staan, straks zich op het diepst één gevoelen met hen, wien de strijd om het leven moeilijk valt; wij kunnen echter niet loochenen, dat het zoo is en moeten aan psychologen overlaten het te verklaren. Pierson, Leerboek der Staatshuishoudkunde I. Deel. Haarlem. 1896. Blz. 19-21. Eng. trans. Principles of Economics. pp. 15-17.

然り之れが研究は凡ての經濟學上の研究の出立點たる可からず、然れどもヒ氏が此根本的研究をあげて心理學者に一任せんとするは予の斷じて服し難き處なり、心理學者は僅かに半面の説明を與へ得るに過ぎざる可し、是れ予が經濟心理學の研究を以て經濟學者方今の急務なりと信ずる所以予はヒ氏が心理學者に一任す可しと云へる研究を聊か拙稿企業心理論に於て試みたり、猶本書第四編經濟心理概論を俟て予が研究の全部を公にせんと欲す——

ヒアソンは特に獨創辦新の見解を持つるを以て名あり——

以上引用せる經濟上の法則に關する思想の根柢は又本文説く所と其傾向を一にす、元より氏は未だ精細に茲に論及せるにあらず、其傾向に於て茲に到達すべき思想を基礎とする也、即ち氏は經濟學の説明は生産を以て始むべきものにあらず、交換價值 *Ruhwarte* の説明を以て始む可きものにして、交換は今日の經濟組織の最根本最重要の基礎概念なるを有力明確に主張す之れやがて論及すれば本文の所説と揆を一にするの外なかる可き也、氏は蘭國自由黨の首領にして兼て銀行總裁として最も令聞あり、大藏大臣に歴任し又内閣に首班たり、學者としては大學に講座を有し、著者としては *Leerboek* 并に *Grondbe-dingseh* 共に思想卓越文辭明晰英佛獨諸大家の名著の間に介立して克く獨立の地位を保つも、惜む可し蘭語は近來多くの人の顧みざる所となり、其價值を發揚するに至らず、殊に始めての歐語として蘭語を學びたる本邦に於ても氏の著は多く知らるゝ所なし、實に惜む可し、予は三十四年至三十五年東京高等商業學校に於ける講義に於て此著の思想の要領を紹介するに勉めたり、然るに幸にも頃日 *A. A. Wotzel* 其の *Leerboek* の一部を英譯し名けて *Principles of Economics* (譯語宜しきを得ず) と稱し、本年(本書刊行の年を云ふ、二三月の頃倫敦 *Macmillan* に於て上梓し、數週來我邦にも輸入し來れり、予はヒアソンの爲めにも亦我邦の學者の爲めにも少くとも此英譯せられたる部分丈け (*Leerboek* は二

卷より成り第二卷第二部は僅かに昨年を以て完結せり、英譯は第一卷のみ出版せられたるに過ぎざれども、*Wotzel* の序言によれば第二卷も近々續出す可しと云ふ) 中でも可なり況く我邦學者通讀する所とならんことを熱望せざるを得ず、猶予が本書の引照は凡て蘭語の原文を以てせり、讀者蘭語に通じざるものは必ず右英譯一本を座右に置いて對照すべし (附記、其後英譯第二卷出版せられたり)。

(36) 此二者の混同 *confusion* を始めて論じたるは *K. M. P.* なる一

Die Wirtschaftslehre hat es nicht mit den Gütern an sich zu thun, nicht, wie oft gesagt worden, mit der Herstellung, Vertheilung und dem Verbrache der Güter. Diese Geschäfte sind Sache des Bergbaus, des Landbaus, der Industrie, des Handels, der häuslichen Sorge der Familie, der Ver-anstaltungen für die Lösung gemeinschaftlicher Lebensaufgaben. Sie fasst in der Technik wie bei der Bedürfnissbefriedigung alle Güter nur als menschliche Leistungen und Besitzstücke, als *Inbegriff von Arbeit und Vermögen auf*, welche sie im Gebrauchswert und Tauschwert auf Grössen gleicher Einheit reducirt, um vergleichbar zu machen, was der Mensch in disselben an eigener Aufopferung gelegt hat. Sie beschäftigt sich nur mit diesen quantitativen Wertverhältnissen, um überall das

zur Herstellung der Güter erforderliche Mass der Aufopferung an Arbeit und Vermögen zu bestimmen, den gegebenen Mitteln anzupassen und für die vorgesteckten Zwecke möglichst wirksam zu machen. Sie sieht ab von tausendfältigen qualitativen Verschiedenheiten, betrachtet die Güter als gleichartige Quantitäten und zeigt, wie in diesen über die Verwendung der Mittel zum Leben, für die Zwecke des Lebens Rechnung geführt wird: sie ist die Grössenlehre der Güter. Hermann, Staatsw. Untersuchungen. 2. A. S. 67-8.——

マンナーはマンナーを祖述するものなり曰べ——

Die technische Thätigkeit in der Wirtschaft geht darauf aus, die erforderlichen wirtschaftlichen Güter überhaupt, in richtiger Qualität und Menge (Hermann erwähnt dies Moment nicht, es gehört aber hierher), am rechten Orte, zu rechter Zeit für die Bedürfnisbefriedigung zu beschaffen. Die ökonomische Thätigkeit erstrebt Beschaffung und Verbrauch der wirtschaftlichen Güter möglichst nach dem Principe der Wirtschaftlichkeit. Wagner, S. 350.——

予も勞働經濟論に於て右マンナーを祖述して殆んど同様の説明を爲せり(四五頁以下)。然れども今予の採る所の見解を以て之れを見れば、マンナーもマンナーも勞働經濟

論に於ける予が所論も共に未だ幼稚のものたるを免れず、是れ予が改説を取てせる所以にして又是れツムメルによりて影響せられたるの致す處なり、其詳細は後巻殊に經濟行為に於ける目的と手段の條下に於て説くべし、獨立評論第八九號掲載拙稿「社會問題としての飢饉」(經濟學研究第八四六頁以下に收む)参照。猶 Sax, Grundlegung § 17 S. 117. 12. マンナーマンナーに一頭地を抜く見解あり併せ見る可し。Dietzel, Socialökonomik S. 162 ff. は又稍此間の消息を傳ふるに近きものとす。

(37) マンナーマンナー及勞働經濟論の論ずる處は本文の非難を免るゝ能はざるなり而して其根本の誤謬は今日に至て未だ經濟學者の多數の脱する處とならざるなり、英派然り佛派然り獨の史派の多數亦然り、獨り英國派并に最近の學者間に新思想の伏在するを見ると雖も未だ明確に斷言せるものは殆んど之れあるを見ず、シムモラーの如き亦舊説を脱せず前掲(8)の引照を見よ。

(38) 其最も著名の例證を擧げんにマンナーの經濟の定義に若くはなし——

Inbegriff der auf fortgesetzte Beschaffung und Verwendung von Gütern zur Bedürfnisbefriedigung gerichteten, *planvoll nach dem ökonomischen Princip erfolgenden Arbeitshätigkeiten* in einem geschlos-

senen oder als geschlossenen gedachten menschlichen Bedürfnis- und Befriedigungskreis. Wagner, S. 349. —

經濟の本則とログナーの言ひと

Bei aller auf Bedürfnisbefriedigung gerichteten Thätigkeit leidet den Menschen — und darf und oft auch soll ihn leiten — das ökonomische oder das Prinzip der Wirtschaftlichkeit, ein durchaus psychologisches Prinzip, d. h. das Streben, freiwillig nur solche Arbeit vorzunehmen, bei welcher nach der inneren Schätzung des Menschen die Annehmlichkeit der Befriedigung die Pein der Anstrengung (des Opfers) überwiegt, sowie das fernere Streben nach einer möglichst hohen Summe (Maximum) Arbeitserfolg und damit Möglichkeit der Befriedigung für ein möglichst geringes Mass (Minimum) Anstrengung oder Opfer in der Arbeit a. a. O. S. 80. selbst ihren Zweck und Lohn allein tragender Anstrengung oder Opfer in der Arbeit a. a. O. S. 80. ヲグナーに反對して此經濟の本則なるものヲ獨り經濟行爲のみに限らざる可きものニ非ざるを論ずるは Dietzel in Zeitschrift f. Staatswissenschaften Bd. 39. S. 29. ff. —

此れに對するログナーの辯疏は有力なるものと云ふ可からず a. a. O. S. 80. Anm. (39) ヲグナーは其最も著しき例なり前掲註(38)第二項を見よ。

經濟行爲は以上を以て分つたとして然らば經濟とはどう云ふことであるか。經濟と云ふ觀念も亦非常に長い歴史的發展の結果出来上つたもので同じく經濟といふ内にも色々な種類があるのである。人類文化の幼稚な時代には經濟といふ現象は之を認めることが出来ない(40)。經濟といふ現象を惹起するに至るには文化が餘程發達してから後である。蓋し經濟とは將來に向ての豫測先見一定の目的に向つての準備并に時間的に制限せられたる欲望の總量を充す爲に、必要な財の蓄積を得ること及び一定の時間内に於て此の如き財の蓄積を欲望充足の爲に用ゐることを言ふのであつて、人類文化の幼稚な時代には此の如き先見豫測準備慮りは到底之を見ないのみならず、抑も財を蓄積するといふこと并に蓄積した財を一定の時間内に適當に欲望の充足に配賦して行くといふやうな事は少しも見るを得ないのである。要するに經濟とは一定の時間に向つて欲望を充足するを目的として之を保障するが爲めの持續的並に規則的の秩序を言ふのである(41)。即ち第一に持續的規則的であることは經濟なる觀念に缺く可らざる所である。第二には一定の秩序である事は經濟の觀念に缺く可らざる要件である。而して

又今日の用語にては、此の如き一定の時間内に持續的規則的の秩序に隨つて欲望充足を實行する爲に、人類が作り出した組織も亦之を稱して經濟(言ふ42)。經濟を經濟行爲は全體と部分との差がある。經濟行爲は必ずしも持續的秩序的であることを要せず、單に一時點に向つて財の獲得を目的とする行爲を云ふ。反之經濟は、一時點に向つて財を獲得する事ばかりで無く、長い時間に涉つて欲望充足に必要な財を得並に其の得た財を蓄積し、而して蓄積したる財を其時間内に欲望充足の爲に分賦することである。一は狹義的觀念であり、一は廣義的觀念である42)。例へば一家内に在つて家計を經營して行く主婦は之を稱して經濟を營んで居るもの云ふ事は出来るが、經濟行爲を營む者を言ふことは出来ない。併しながら同じ家内に在つても、賃銀を受けて主人たる他人の爲に家事的勞働に従事し、其勞働に換えて反對給付をして、自分の欲望を充足するに必要な財又は貨幣を得ることを目的とする僕婢の行爲は經濟行爲である。經濟を營むのではない。固より僕婢其自身も亦己れの家計を立つるに於ては、別に一個の經濟を營むものたるは言ふ迄もない(43)。

(43) 是れ從來の學者の少しも論究せざりし處にして、豐富なる人種學的材料に基て之れが立論を試みたるは、ブエヒア(ブエヒア)先生の功なり、左に其一節を摘録せん。
「以上叙し來りたる如き状態は、何れより之れを觀るも、要するに經濟なることの正反對に出でたるや疑を容れず、蓋し經濟とは財の蓄積に依りて媒介せられたる人類の團衆を謂ひ、同時に節制若くは將來に對する計慮、時間の節約及び秩序の適當なる配置を意味し、又た勞働物の評價、消費の制定、財産の蓄積及び文明上の結果を一代より他代に相傳ふることを意味すればなり、而して斯くの如き現象は頗る高度に在る蠻人に於いても殆んど之を見ること能はず、況んや其の低度のものに於いてや、アシユマン若くはウエツダ人の日常生活より其の火及び弓矢の使用を除かむか、剩す所は唯だ個人的に食を求むるの一事あらむのみ、彼等の間に於いては自己を養ふは全く自己の力に待たざるべからず、赤裸々武器なくして同臭味の伴侶と共に彷徨すること宛ら野獸の如く攫取攀援に際して巧みに足を用ふること殆ど手に異らざるものあり(註アンドレー著「捕捉機關としての人類の足、人類學的比較論新篇」第二二八頁以下参照)。

彼等は男女を問はず、手を以つて捉へ爪を以つて掘り、其の得たる物は之れを生食するなり、彼等の食ふ所は其の下等動物たる果實たる木皮たる草根たるを問はざる

なり、彼等は時に散じて小團を爲し、時に集りて大衆を作し、若し其の牧場又は獵場にして豊饒なるあれば即ち四分五裂し去るなり、斯くの如き團衆は決して鞏固なる團體となることを得ず、彼等に取りては團體生活は各自の生活をして容易ならしむる所以のものにあらざるなり。

叙し去り叙し來る所或は恐る今日の文明人をして容易に首肯せしむること能はざるをされど吾人の所脱は幾多の材料より推究したるものなり、一點一劃の微と雖も確實の懸念なくして構造したるものにはあらざるなり、彼の最低度に在る種族の生活より既に文明の現象に屬する火及び武器の使用を除去せむか、竟に以上の如く謂ふの外なきなり、更に高度の蠻人に就いて之を見るも其の爲す所多くは非經濟的にして所謂經濟の本則の如きは、彼等の間に於いては規則たらずして寧ろ例外たり、況んや低度の獵民の如き全く經濟なる觀念を之に適用し得ざること更に疑を容れず、吾人は之を以つて經濟發生前の時期と爲し、經濟以前の狀態と稱するの外なかるべきなり、若し強めて之に名くるの必要あらば、唯だ個人的食料探求時代と謂はむのみ。

此の個人的食料探求時代より如何にして經濟なるもの、發展せしか、是れ推想するだも尙ほ且つ難き所なり、吾人を以つて之を見る、單に直ちに消費するの目的を以つて天賜

を獲得するに止らず、稍々遠大の目的を以つて所謂生産を爲すに至り、又單に本能的に其器官を動かすに止らず、一定の目的を以つて體力を使用する、所謂労働なるもの起るに至りて、初めて經濟なるものは發せしなるべし、されど是れ唯だ理論上の推測たるに過ぎず、固より之を以つて甘んずべからざるなり、凡そ蠻人の労働ばかり分明ならざる現象はあらざるべし、遠く古に遡つて研究するに従ひ、彼等の労働は其の形式及び内容に就いて全然遊戯と異らざるを見ればなり。

人類が單に食料を探求せむが爲に行動するの時代を脱するに至りしは、思ふに他の凡べての高等動物に於いても見る所の一の共通の動念の作用したる結果ならずむば、あらず、何ぞや、撲・倣及び賞・賂の衝動即ち是れなり、(グロース著「獸類の遊戯」一八九六年出版参照)

されば從來學者の信ぜし發達の順序は、全く實地と正反對のものなりと謂はざるべからず、即ち遊戯は労働より古く、藝術は生産に先ちたりしなり、遊戯と労働との全然分別するに至れる状態に在りても、尙ほ肝要なる労働を爲すに當りては、其の始若くは終に於いて必ず舞踏を演じ、且つ労働中は絶えず歌謡を以て之に伴ふを常とす、戰爭狩獵若くは收穫に際するの時の如き皆然り。

●經濟が文化の發展に溯るに從ひて漸く非●經濟となるが如く、●勞●働も亦古に溯るに從ひて漸く非●勞●働となるを見る、其他重要な總べての經濟現象も亦た同一の順序を經たるものにして、原始より今日に至るまで毫も變ずることなきものは唯だ消費の一あるのみ蓋し人類は絶えず欲望を有するものにして、如何なる時代に於いても之れを充足せずして止むこと能はざればなり、但し吾人の今日經濟上に謂ふ所の欲望は、全然自然的に前定せられたるのみのもの甚だ渺し、吾人の所謂消費の中に就いて、自然的に必要なものは單に飲食のみなり、其他總べての消費は皆な文化の産物にして、人類の精神の創思的行動の結果なりと謂はざるを得ず、而して若し此の文化の産物たる欲望あらざらむか、吾人類は全く草根木皮乃至果實を以つて總かに露命を繋ぐの獸類に擇ぶ所なきなり、(飲食と雖も一定の方式と變化とを要し、一定の時間、一定の處に於て之れを爲すに至れる今日にありては全然自然的のものにあらずして、大に文化的發展の影響を受くるものなることまさにシエモラー (Grundriss, S. 25) の論せしが如し。

以上論ずる所の如くなるを以つて、個人的食料探求時代が終り經濟が発生するに至れるは何れの時に在るかを確認せむは頗る困難なりと謂はざるべからず、蓋し人類の文明史上には決して確定したる轉換交渉の時期あるなく、恰も草木の生育に於けるが如く、何

時となく繁茂し、又た枯衰するものなり、されば確定の状態と謂ふも單に抽象に過ぎずして、極めて狹隘なる吾人の眼識を以つて、天然并びに人類世界の不可思議を了解せむとするに際し、必要なる一の想定の手段たるに過ぎざるなり、經濟も亦斯くの如く不斷の變遷轉化を爲すものにして、其初めて歴史に現るゝや、一定の行動の法則に依りて導かれたる物質的生活團體たり、此の生活團體は家族と稱する人格的倫理的な生活團體と密切なる關係を有す、グロツセは其の著「家族の形態と經濟の形態」に於いて適切に之を證し大に吾人の研究を資けたり、但し氏は經濟上の勞働を區別するに、單に其形態のみに依り、之が獵民牧民若くは農民等の如く區別せるのみにして、經濟の實質殊に家計に關する研究を缺きしは甚だ憾むべきなり、蓋し經濟は家族なる形態の下に於いて初めて其の實に應ずるの名稱を得たるものなればなり、即ち獨逸語にて經濟の主體を意味する *Wirt* は夫と同意義にして、*Wirth* は妻と同意義なるが如し、尙ほ希臘語より來たれる *Oeconomie* も亦同様の意味より出でたるものなり。

惟ふに經濟の事實在るを推定し得るは、集合せる團體の存し、其が經濟上の法則に依りて其の目的物を獲得又は充用するの事實の存するに據らざるべからず、高度の野蠻人間に在りては既に斯の状態を存すと雖ども、尙ほ未だ經濟の本則を十分に遂行する

に至らず其の多くは吾人をして覺るに經濟以前の時代即ち個人的食料探求時代を想はしむるもの比々皆な然り、されば經濟は既に存せざるにあらずと雖も尙ほ幾多の間隙あるを疏るゝこと能はざるなり。」

以上の所論は必しも予の悉く首肯する處にあらず、註(41)参照猶第二章註(62)を併せ見る可し。

フュヒアー著、福田譯述、史的・研究經濟本論五一頁至五八頁、經濟世界續掲、(經濟學研究第一八七頁以下に收め、經濟進化論と改題す)

(41) 經濟を經濟行爲と嚴密に區別して、秩序并に組織なることを説くに至れるは極めて最近の學者のみの取る見解なり、從來は此兩者を全然混同せり、甚しきは他の根本概念は之れを詳細に論ずと雖も、經濟其者に關しては明確なる定義を與へざるもの比々たり、予の斷じて服し難き所なり、——

アグナーすらも「前掲註(38)第一項を見よ」亦此狀態を脱せず、況んや徒らに氏の口吻を學ぶものに於てをや、——

猶經濟の定義中二三の著名なるものを左に示して、如何に從來學者の所論が明確を缺くものあらかた對照するに便せん、——

Unter Wirtschaft verstehen wir die planmässige Thätigkeit des Menschen, um seinen Bedarf an äusseren Gütern zu befriedigen. Roscher, S. 5.——

Die Betätigung der praktischen Vernunft an den Dingen, welche *beschränkt* gegeben sind im Vergleich zu unserem Bedarf nach äusserer Ergänzung des individuellen Lebens. Cohn, I. S. 189.——

Wirtschaft ist die gesammte Betätigung eines Menschen in der Richtung, die äusseren Gegenstände und bestehenden Verhältnisse seinen Bedürfnissen und Zwecken entsprechend zu gestalten. v. Mangoldt, Grundriss § 5.——

Eine bewusste planvolle Regelung einer Vielheit nützlicher Bewegungen und Kraftäusserungen in der Richtung höchsten reinen Nutzens. Schäffle, Nat. Oek. I. § 4.

Wirtschaft ist der Inbegriff der Unterhaltsthatigkeiten eines Subjektes, in der Richtung mindesten Kostens und grösster Nutzeffecte geregelt. Sie ist planvolle Durchführung aller Vermögens-Nutzungen und Arbeitsleistungen für die materielle Gesamtbefriedigung des fraglichen Subjektes, objektiv mit möglichst geringen Gesamtkosten und zu möglichst grossen Gesamtnutzen, subjektiv mit geringster Unlust und zu grösstem Glück des Subjektes. Schäffle, Bau. u. Leben des socialen Körpers. 2. A.

1896 Bd. II. S. 223.—

In seiner Hauptbedeutung ist Wirtschaft nach dem üblichsten Sprachgebrauch der Inbegriff der wirtschaftlichen Thätigkeit einer Persönlichkeit (Person resp. Personengemeinschaft), d. h. die Gesamtheit der Handlungen einer Persönlichkeit, welche sich auf die Beschaffung und Verwendung materieller Güter zur Befriedigung ihrer Bedürfnisse beziehen, und der durch diese Thätigkeit herbeigeführte wirtschaftliche Zustand derselben. Schönberg in seinem Handbuch, 4A. I, § 68 S. 10.

経済は個人及び個人間の生活の活動を意味する。——

Zum Wesen jeder Wirtschaft gehört eine Persönlichkeit mit eigenen Bedürfnissen, Interessen, Aufgaben, Zielen, welche für ihre Bedürfnisse materieller Güter bedarf, solche erwirbt und verwendet. Die Befriedigung dieser Bedürfnisse erfordert in der heutigen Volkswirtschaft stets einen Vermögensaufwand (Ausgaben), setzt mithin Erwerb von Vermögensgegenständen (Einnahmen) voraus. Jede Wirtschaft beruht heute m. a. W. darauf, dass die wirtschaftende Persönlichkeit Einnahmen hat und Ausgaben macht. Die Einnahmen und Ausgabenverhältnisse einer Person zum Zweck der Befriedigung ihrer Bedürfnisse bezeichnet man mit einem ursprünglich von der einzelnen ländlichen

Familienwirtschaft entlehnten Ausdruck als Haushalt, Haushaltung (Privathaushalt, Gemeinde-, Staatshaushalt). a. a. O. S. 11.—

経済は個人及び個人間の生活の活動を意味する。——

Aber es gibt doch auch wirtschaftende Personen resp. Personengemeinschaften, die nicht nach diesem Prinzip handeln. Ist die Gesamtheit ihrer wirtschaftlichen Handlungen keine Wirtschaft? Wenn nicht, was ist sie dann? Ein anderer Begriff wird für sie nicht gegeben. Und wenn die Volkswirtschaft die Summe der im Volke vorhandenen Wirtschaften ist, gehört die wirtschaftliche Thätigkeit jener Personen resp. Personengemeinschaften nicht zur Volkswirtschaft? Wagner erwidert hierauf (Grundlegung, I, § 145. S. 350), die Menschen handeln "bewusst nicht immer nach diesem Prinzip aber unbewusst doch wohl". Ein unbewusstes Handeln ist aber doch kein planvolles? Zweckmässiger dürfte es daher sein, den Begriff nicht durch jenes Merkmal zu verengern, vielmehr eines Moment nur als eines der Postulate für die vernünftige Gestaltung der Wirtschaft hinzustellen.

a. a. O. S. 11. Anm 20.—

シヨエンベルヒのラグナーに對する非難は善く其弱點を指摘するものと云ふべし、然れどもシ氏も亦經濟行爲と經濟とを區別し乍ら、猶後者が一の秩序と一の組織なるを道破するに至らざるは一段の進境を要するものと云ふ可し、氏の家計に關する説明は時々之れに近づくものなるに、録思半にして止むは惜む可し。

此くの如く斯學の諸先輩が個々の經濟行爲と秩序組織たる經濟との間に明確なる區別をなすに及ばざるは、未だ自然的機械的の個人主義の影響を脱却し了らざるに坐す、此點に關しては *Socialie* も亦全く非難を免れざるものなり、然れども氏が經濟學原論に云ふ處と「社會團體の構造及生活」に云ふ處との間に進境を認むるは多とすべし、埃國派に屬して而も克く此邊の消息を道破せるは *Sax* なり *Grundlegung* §63, S. 381 ff. を見よ、金井博士社會經濟學は大體に於てラグナー一派の所論を祖述するも……之を經濟又は經濟的活動と云ふ」と斷言し、「二者を全然同一なりとするは蓋し氏が獨創の斷案に出づるものと見る可きか (一〇七頁)。*シエモラー*の定義は後掲註 (62) に掲げたるものを見よ。

(62) 是れ從來學者の殆んど説き及ばざりし處とす、シヨエンベルヒは稍々之れに近づきたるも遂に明確なる結論を與へず、英國佛國の學者は抑も如此區別をなすの必要にすら想到せず、否、經濟行爲と經濟とを全然同義語として修辭上の使ひ分けをなすのみ、個

人主義の思想の學理研究に害ある大なりと云ふべし。

(63) 是れ又予が自ら確信する所にして、勤勞を以て財に算入するが如き論者と全然異なる所を異にする所以なり、而して此の根本思想はマルクス之を力説して餘蘊を残さず、マルクスに依りて形變せられたる *ソムバート* も亦此の種見解を確立するに與つて力あり *Sombart, Der moderne Kapitalismus, Bd. I. — Marx, Das Kapital, Bd. I, 129, ff.* 猶企業心理論第二章を併せ見る可し。

此の如く持續的規則的の秩序、並に其秩序を實行する爲の組織を宰る者を經濟主體と名け、經濟主體の指揮の下に集つて、同一の組織内にある人の總體を經濟單位と云ふ(44)。經濟單位が孤立せず、交換分業の關係に依つて他の經濟單位と結び附けられて、各々其行動をなす大なる組織を經濟組織と云ふ。其れは多數の小組織を單位として成立する大組織である(45)。經濟行爲は一つの經濟内に行はれる行爲たるよりは、寧ろ其經濟を營むが爲に必要な財を獲得する行爲を言ふので、多くは其經濟の爲めに其經濟以外に於てする行爲である。財を獲得するにも、亦一定の秩序組織は無論あるが、今日の經濟生活で

は之を經濟と名づけないで、技術上から見たときは經營と名け、經濟上から見たときは企業と名ける(46)。固より企業はそれ自身成立つて行く爲に財を充用することを要し、又企業を營むに必要な欲望があり、之れを充足するに必要な財の獲得はするのである。此點に於ては企業も亦一つの經濟を有つものである。故に企業經濟といふことを言ふ學者が無いても無いけれども(47)。此の如く言ふ時は、同一の字を色々な意味に用ゆる弊が生ずるから、是は企業經濟と云はず、單純に企業と言つて置くを以て勝れりとする。

(44) 經濟單位なる成語は未だ汎く學者の用ふる處にあらず、予は之れをインタノ先庄に得たり、先生の經濟單位に關する論述は蓋し完璧と見るべきもの也、然れども予が本文に下せる定義は少しく先生の趣を同ふざるものあり、予は漫に師説に不忠なるを欲するにあらず、少しく自ら信する處あればなり、先生の所論の一部は Die Volkswirtschaft und ihre konkreten Grundbedingungen, Zeitschrift f. Sozial- und Wirtschaftsgeschichte, 1893, Bd. I, S. 77 ff. (註文を訂正及追加せるもの今收めて (一九二四年未刊) 本論文と同題名の先生の論文全集第二卷にあり就て見るべし)——
 猶近來フキリツキツキツキツキは經濟單位を説明して曰く——

Die Wirtschaftsführung setzt eine Leitung der auf die Güterversorgung gerichteten Handlungen, sowie einen bestimmten Kreis von Bedürfnissen voraus, um deretwillen sie unternommen wird. Jene einzelnen physischen Personen oder jene Mehrheiten von Personen, deren Wille und Bedürfnisse massgebend sind für die Leitung der Wirtschaft, bezeichnen wir als Wirtschaftseinheiten. Philippovich, Grundriss, I. Bd. 4. A. § 7, S. 8. (14. A. S. 23.)——
 是れ亦穩健なる解釋と云ふ可し。

(45) 是又ノキリツキツキツキツキの Die Volkswirtschaft als geschichtliche und staatliche Einheit(?) von Wirtschaftseinheiten a. a. O. S. 15. ff. と云くるに多く異なる見解なり。然れども氏が單位を綜合せる全體を又單位と名くるは諸ひ難き措辭法なり、思ふに氏は經濟組織として交通經濟組織、共同經濟組織等を論じたれば、再び組織なる文字を重用するを厭ひたるが爲め此誤謬に陥りたるものに非るか。

單位を包含する全體を組織と名くるときは、單位は細胞なりやとの疑問を生ずるの虞あらん、予は答へて然らずと曰ふ、國民經濟は到底有機體にあらずればなり、然れどもシエフンの唱へたる此説は幾多の點に於て個人觀に優るのみならず、一の譬喩的説明法としては亦全く捨つ可からず、尙後卷論述する所ある可く、又將に此問題に關する特殊的研究

明瞭を願みざるは果して如何あらん。熟考を要す可し(村瀬春雄氏著海上保険論第二章 保険會社の財政參照)。

併しながら今日の進歩した經濟生活の内にあつても實際上企業と經濟との二者を分離すること能はざる場合が澤山ある。殊に經濟生活の進歩が遅れて居れば居る程、此二者間の分離は完全でない。農業には此の如き例は澤山にあるが、我邦の如きに在つては工業や商業ですらも猶企業と經濟營業と家計は、全然分立して居らない場合が甚だ多い。故に此の如き場合には以上區別した眼から見ても、企業經濟といふやうな文字を使はなければならぬ場合がある。例へば獨逸の言葉で農夫經濟といふことを言ふ。蓋し經濟と企業との分離といふものは今日の進歩した經濟組織の特徴であつて、此二者は根本的に性質を異にして居ることを能く了解しなければ、未だ今日の經濟組織の真相は分らない。而して營利又は貨殖行爲と經濟行爲とが合致する度が多ければ多い程、此二者間の分離は大である。反之、經濟行爲が營利若くは貨殖主義に依つて支配せられたる度が多ければ多い程、此二者間の分離は小である(49)。

(49) 從來の所説は此點を多く看過せるものなり、唯之れに代ゆるに所謂經濟の本則の説明を以てするものは、ログナー以下の諸氏なり、然れども此二者は決して混同すべきものにあらず、況んや其經濟行爲を支配するの度合は絶對常住のものにあらずに於てをや、猶此點に關する予が研究の結果は載せて企業心理論にあり、第二章第三章を見る可し、最も夙く此點に着目したるは、フリントレーンなり、「前掲註(22)を見よ」元より本文説く如き點迄論及したるにはあらずと雖も、此兩者間の根本的の徑庭を闡明したるは實に千古に渉る卓見と云はざる可からず、——

メフンが Unterhaltswirtschaft と Erwerbswirtschaft とを分て説きたるは、ちがて最近に到リツムスマットの Bedarfsdeckungswirtschaft と Erwerbswirtschaft とに關する精確なる研究を招致するの基なきものなり、Gesell, System, Bd. I, § 161. u. 174 SS. 298, 280. Sombart, Der moderne Kapitalismus, Bd. I, S. 1-74.

經濟行爲の結果、即ち經濟行爲に依つて得た價値の總量、今日の經濟生活に付て言へば、多くの場合に於ては經濟行爲によつて獲得した貨幣額の總量(50)を稱して其收益と言ひ、此中から獲得又は獲得に當つて要した費用、即ち生産費を控除して残る物を稱して純

収益と言ひ、純収益を經濟行爲を營む經濟主體の側から名けて收入といふ。此く經濟行爲の成果として入り來る一經濟主體の收入總量の内、一定の經濟時限内には新なる經濟行爲を營むことを要さないで、悉く欲望充足の用に供し終つても毫も自己固有の財産を減ずる憂なき部分を稱して其經濟主體の所得云々(50)。

(50) The next point is to consider the relation in which this broad use of the term income stands to the narrower uses which are common in practical life(今日の經濟生活の組織の意に取らる) Just as a man's capital is often regarded as consisting only (?) of those more prominent (?) parts of it, by which he earns an income in the form of money (and which we have called his Trade-capital), so for some of the practical purposes of life it is customary to consider only his *Money Income*; that is, those elements of his total real income which come to him in the form of money. To these are however generally added those elements which he can easily convert into money, or which save him some pecuniary expense; for instance, if a man lives in his own house, or farms his own land, the estimated rent of the house or of the farm is ordinarily reckoned as part of his income. But no account is commonly taken of the benefit he derives from

the use of his furniture; so that if he had been in the habit of hiring a piano, and determined to sell a railway share and buy the piano instead of hiring it, his money income would be diminished by the dividend from the share, although it is probable that his total real income would be increased by the change.

Again, anything which a person does for which he is paid directly or indirectly in money, helps to swell his money income, while no services that he performs for himself are reckoned as adding to his nominal income, though they may be a very important part of his total real economic income if they are of a kind which people commonly pay for having done for them. Thus a woman who makes her own clothes or a man who digs in his own garden or repairs his own house, is earning income just as would the dressmaker, gardener or carpenter who might be hired to do the work. Marshall, Principles. Bk. II. Ch. V. P. 134—5.

是れ從來の學者の見解を克く代表するものなり、本文に説く所は全然之れと異り、所得に廣義と狹義を分つの必要なしとするものなり。末項の場合の如き貨幣の價格にて秤量せざる所得は如何にして之れを知るを得るや、將亦 Marshall の所謂 Benefit を與ふる

ものを悉く所得とせば何ぞ家其に限らん、住居に限らん、日常吾人を圍繞するもの比々皆然らざるはなし、經濟上にて所得と稱するものは一定の特徵あるものならざる可からず、即ち真正の Benefit 区々に拘泥せず貨幣の價格にて秤量せられ、又はせられ得可きもの之れなり、事實に於てイームマン以下の諸學者は其の自己の定義に忠ならずして所得と云ふときは本文に説明すると同一事を意味するは喜ぶ可き自家擅着と云ふ可し。蓋し實際生活を觀察するときには知らず識らざるの間、此くの如くなるの外なければなり。故に本文の所論は嶄新なるに似て實は最も古を經驗を學理的に斷言せしに過ぎざるなり。此處に於ては Sir Wm. Petty は漸かにイームマン以下の諸學者よりも最近の思潮に近き觀を有したるものなり、Economic Writings of Sir Wm. Petty Ed. Hall. 1899. Vol. I. p. 235. Political Arithmetick 其他に數見するを參照せしむ。

(Einkommen ist) der periodische, sich regelmässig wiederholende Reinertrag einer festen Erwerbsquelle, dessen Bezug einer Person rechtlich und thatsächlich zusteht, einschliesslich des Wertes der Genüsse und Genussmöglichkeiten aus dem Nutzvermögen dieser Person. Nach der anderen Auffassung bezüglich jenes dritten Bestandtheiles wäre dann noch hinzuzufügen: sowie der weitere, unregelmässig der Person zufließende Güterbetrag und zugutekommende Wertbetrag,

welcher eine Vermögensvermehrung dieser Person darstellt. Wagner, S. 407.——

Wiewohl man im gemeinen Leben unter Einkommen die Geldsumme versteht, welche Einnahme in gewisser Zeit für seine Bedürfnisse verwenden darf, so ist doch Jeder leicht zu überzeugen, dass er eigentlich nicht diese sondern die Tauschgüter als sein wahres Einkommen betrachtet, die er sich mittels jener verschaffen kann. Dabei wird immer vorausgesetzt, dass diese Güter mit einer gewissen Regelmässigkeit zu dem Vermögensstamm, den man schon besitzt, hinzukommen. Güter, z. B. Geldsummen, die man empfangen hat, heissen blos Einnahme, nicht Einkommen, so lange nicht ausgemittelt, welcher Theil derselben ohne Schmälerung des Stammvermögens verzehrbar ist. So wenig jede Ausgabe Verbrauch ist, so wenig ist jede Einnahme Einkommen. Dieses ist vielmehr die Summe der wirtschaftlichen oder Tauschgüter, welche in einer gewissen Zeit zu dem ungeschmälert fortbestehenden Stammgut einer Person neu hinzutreten, die sie daher beliebig verwenden kann. Dass es eben so wohl körperlicher als unkörperlicher Natur sein könne, ist klar. Hermann, a. a. O. S. 582-3.

(51) 前頁註を併り見るべし。

The gross revenue of all the inhabitants of a great country, comprehends the whole annual produce of their land and labour: the neat revenue, what remains free to them after deducting the expense of maintaining, first, their fixed and, secondly, their circulating capital; or what, without encroaching upon their capital, they can place in their stock reserved for immediate consumption, or spend upon their subsistence, conveniences, and amusements. Their real wealth, too is in proportion, not to their gross, but to their neat revenue. A Smith, Bk. II. c. 2. Routledge E. p. 215. (Cannan Ed. P. 270.)

Das rohe Einkommen z. B. eines Jahres besteht aus sämtlichen Gütern, welche die Wirtschaft im Laufe desselben neu produziert hat. Das reine Einkommen ist derjenige Theil hiervon, der nach Abzug der Produktionskosten übrig bleibt; der als verzehrt werden kann ohne das Stammvermögen zu schmälern. Nur die neuen Werthe in den neuen Gütern bilden das reine Einkommen. Offenbar ist ein grosser Theil dessen, was die eine Privatwirtschaft als Produktionskosten betrachtet, für manche andere reines Einkommen: so namentlich was vom Unternehmer einer Produktion für Grundrente, Arbeitslohn und Kapitalzins vorausgibt worden. Durch diese Ausgabe wird ein Theil

seines umlaufenden Kapitals von Anderen als Einkommen bezogen und deren ursprüngliches Einkommen dagegen zu einem Theile seines umlaufenden Kapitals gemacht. Freies Einkommen nenne ich denjenigen Theil des reinen, welcher nach Befriedigung der unentbehrlichen Bedürfnisse des Producenten noch verfügbar ist, während man ein Einkommen, das gerade den Bedürfnissen entspricht, als Auskommen bezeichnen könnte. Roscher, a. a. O. § 145 S. 429.

アノモロムノの一字用ゐ得て妙なりと云ふ可し學理的諧謔の上乗なるものは歟口
吻上の諧謔に腐心するの徒少く學ぶ所あつて可也。猶所得に總所得・純所得を區別する
はヘルマン以下の學者然り第四卷に至り詳論す。 Hermann, a. a. O. S. 595. C. Rohes u.
reines Einkommen.

經濟の主要任務は欲望を充すに必要な費用を經濟行爲に依つて得て來る收入との間に調和を持來し(22)所得を可成多くすることに在り。進歩した經濟組織にあつては經濟行爲は原則として其經濟現在の要用を充すに足るべき收入を得るのみを以て満足する自足主義でなく尙それより以上に進んで其一定の期限内のみならず將來に向つても欲望を充足するに必要な財の蓄積又は貨幣額を得ることを目的とする。即ち今日

の經濟生活にあつては、經濟行爲は常に自己現在の欲望を充たすに必要な財を獲得するのみを以て甘んずる欲望直接充足主義でなくして、將來の長時期に涉り、自己生存のみならず其死後に涉り自己并に自己の家族子孫の欲望充足を充分に保障し得るが爲めに、自己所有の貨幣價格の總量(即ち財産)を維持し、進んで其の額を増加せんとする營利主義によつて支配せられて居るのである。故に或學者は經濟とは財産を維持し、并に之れを増加する爲めにする人類行動の總稱であるを主張して、此れによつて經濟の根本概念に關する從來の學者の曖昧を正し得るを信じて居る(52)。今日の企業の行動のみを以て經濟行爲なりとするときは、此説は當つて居るけれども、自己所有の財産なく唯勞働の給付を賣つて居る勞働者も亦經濟行爲を營むものである以上は、少しく狹隘に失した説である。乍併從來の學者の曖昧説に勝つて經濟なる概念の眞意を知らしむるには餘程近付いて居る(54)。

(52) Alle Wirtschaft Einzelner wie ganzer Völker läuft am Ende auf Herstellung von Gütern hinaus, die sie zur Befriedigung ihrer Bedürfnisse verwenden können, ohne dass sich ihr wirt-

schafterlicher Zustand verschlechtert, — auf Erwerb von Einkommen. Hermann, a. a. O. S. 582. —
 Jede Wirtschaftsführung ist auf Produktion von Ertrag und Einkommen gerichtet, da ja erst in diesem die Konsumtion und daher die Bedürfnisbefriedigung sichergestellt ist. Und da die ganze Wirtschaftsführung unter dem Einflusse des wirtschaftlichen Prinzips steht, so drückt sich in ihr eine Tendenz aus, die wir dahin zusammenfassen können, dass das Ziel der Wirtschaft sei: Produktion mit den geringsten Kosten zum Zwecke des grössten Ertrags und Einkommens. Philippovich, Grundriss. § 6, S. 8. (14. A. S. 41.)

(53) 是れ轉回線理論辯證なるヘンペルの風な唱導なる義なり。此の思想の獨創的なきは眞に歎服の外なし。

Ein Inbegriff von Thätigkeiten zur Gewinnung oder Erhaltung von Vermögen für Jemand.

又は

Ein Inbegriff von Thätigkeiten entweder zur Verwendung oder zur Gewinnung oder Erhaltung von Vermögen für Jemand.

を以て經濟の定義なりとなすはヘンペル也。Neumann, Grundlagen, S. 33. 經濟と經濟行爲

とを分別し盡さざるものなりと雖も此説は大に吾人の録思を助けるものありと云はざる可からず。

Der Inbegriff jener regelmässig und mit Bewusstsein des Zwecks vorgenommenen Thätigkeiten zur Beschaffung u. Verwaltung der zur Befriedigung der Bedürfnisse erforderlichen Güter heisst nun Wirtschaft. In sofern jedes Gut nur dann als Mittel der Wohlfahrt dienen kann, wenn es im Eigentum — Vermögen — einer Person ist, lässt sich Wirtschaft auch fassen als:

Inbegriff der Thätigkeiten zur nachhaltigen Versorgung einer Person mit den in den Kreis des Vermögens fallenden Mitteln der Wohlfahrt. Wirtschaft (Ökonomie) ist dann die Anordnung der Vermögensverhältnisse. Jede innerhalb der Schranken des Sitten- und Rechtsgesetzes sich bewegende Thätigkeit, die sich auf die Anordnung von Vermögensverhältnissen bezieht, ist eine wirtschaftliche (ökonomische). Mischler, Grundsätze § 11. S. 21. —

「ミシヨラー」も亦經濟行爲と經濟との區別を確立せざるものなり、經濟の定義を下すに「Wirtschaftliche Thätigkeit」の章中に之を爲すにても知るを得可し然れ共、氏が當時既に財産の範圍内に屬するを財とし之に關する行爲を經濟とせらば時流を抜く見解と云ふ可し。

(54) 企業心理論第四節並に拙稿トマズダキノの經濟學說 (國家學會雜誌三十六年六月) 參照 (共に經濟學研究に收む) を併せ見るべし。

固より勞働の給付も亦財産の一部を形成すとの見解を取る論者にありては、ノイマンの此定義は此等をも包含するが故に狹隘に失すとの嫌は免るゝなる可し註(14)參照。

今此の營利主義の經濟行爲の出立點であり、到達點であり、而して各經濟主體の特殊權内にある貨幣の價格に見積らるべき財及財に對する權利にして、一定の經濟時限内には漸らしい經濟行爲を爲さずとも、自由に使用收益處分し得るもの、總量を名けて財産ヲ云ふ(55)。

(55) 企業心理論參照——

Die Masse der wirtschaftlichen Güter von Tauschwert (Geldwert?) im ausschliesslichen Besitz einer Person ist ihr *Vermögen*, die *Arbeitskraft* ist daher nicht im Vermögen begriffen, wo Sklaverei verboten ist. Wohl aber ist der Slave und Leibeigene Vermögensstheil des Herrn. Hermann, S. 107. —

「マンナー」は財産に二様の意義ありとし曰く——

Ersteres, Vermögen als rein ökonomischer Begriff (Vermögen an sich), ist ein in einem Zeitpunkte vorhandener Vorrath wirtschaftlicher Güter als realer Fonds für die Bedürfnisbefriedigung.——

Vermögen als Vermögensbesitz oder als geschichtlich-rechtlicher Begriff bezeichnet dagegen den im Besitz, bzw. Eigentum einer Person stehenden Vorrath wirtschaftlicher Güter (?): Jedes solches Vermögen ist Einzelvermögen, d. h. Vermögen einer (physischen) Person, weshalb es auch „personliches“ Vermögen genannt werden kann. Wagner, Grundlegung, II. K. 2. S. 309.——

此の如く區別をすかは事理の明晰を助へるに似つて實は然らず。予の服し難き所以なり。——

ラグナー特有の二元的説明に遂に勝りて財産の觀念を闡明するに與つて功あるは亦ハントマンが第一。——

Das Vermögen Jemandes ist der Inbegriff der Güter, über die Derselbe in seinem Interesse (nicht z. B. eines Mündels, oder „einer zu vertretenden Körperschaft“) verfügen kann, und zwar entweder thatsächlich oder rechtlich. Neumann, Wirtschaftl. Grundbegriffe. Schörsberg's Handbuch I. i. S. 171. u. Ders. Grundlagen S. 106 ff.——

「モノトナーは四へ」——

Vermögen, im ursprünglichen Wortsinne sowohl die Gesamtsumme dessen, was der Besitzer durch es vermag, als auch der Inbegriff dessen, durch welches der Inhaber etwas über Andere vermag, bezeichnet also eine wirtschaftliche Macht, beruhend auf dem Besitz von wirtschaftlichen Gütern, und auf der Kraft und rechtlichen Befugnis, diese Güter zu erzeugen, zu erhalten, zu vermehren und zu verwenden. In diesem Sinne suchte man Vermögen mit „Erwerbsmittel“ (Instruments) zu erklären, indem man darunter nicht nur Geräte und Maschinen, sondern alle Hilfsmittel verstand, welche die Erfüllung sittlicher vernünftiger Zwecke unterstützen. Mischler, Grundsätze § 97. S. 244.——

財産の觀念に二様あつて一は廣義を言ひ他は狹義を云ふ。廣義の財産は一定の時點に向つて言ひ狹い意味の財産の觀念は一定の時間に就て言ふ。廣い意味の財産の中には狹い意味で言ふ財産に入らない物も入つて居る。即ち一經濟時限内に消費せられて仕舞ふ財の蓄積も廣い意味から言へば財産の中に算入せられる。例へば經濟主體の變更(相続の場合の如き)には如此部分は財産中に算入するが財産に課税する場合の如

きは、如此財は財産中に計上しない、財産税は狭義の財産に向つて課税するのである。財産を區別して享樂財産と營利財産の二つにすることが出来る。享樂財産とは欲望を充すに直ちに消費せられないで長時期其用に供せらるゝもの、並に欲望充足の爲めに直ちに消費しなければならぬが、今直ちに消費せず將來の欲望充足の爲めに當て、あるか、又或は他の直接に欲望を充足すべき物を得るが爲に蓄積せられたる財を指して言ふ。營利財産は又生産財産とも云ふ(56)。即ち之を用ゐて更に新しい他の財を作り出すか、又は之を使つてより、餘計の貨幣を得て來るか、兎も角進んで更に他の經濟行爲の用に供せられる財又は價格の總量を指して言ふ。生産財産又は營利財産を稱して資本と言ふのである。營利財産又は資本は更に進んで他の新しい經濟行爲に充用するに依つて収益を生ずる此の収益は自足經濟の時代にあつては直ちに其經濟主體の收入となり其所得の一部を形成する。然るに今日の營利主義の經濟組織にて云ふ資本の賃子は資本を所有するといふ事實から出て來るもので、今日の經濟組織に取つては其所有財産の使用權を他人に委ぬる報酬として入り來るものを言ふ。茲に注意すべきは所有を以て經濟

行爲に非らずと考ふ可からざることは是れである。所有其自身が一の經濟行爲であり經濟上の活動たること勞働と同様たることは後編に之れを詳述するに譲つて茲には所有資本を他人に貸付けて之れに對して賃子を收めることは完全な意味に於て一の經濟行爲であることを注意して置く(57)。

(56) 此二者決して同一ならず、而も今日の經濟生活にあつては兩者は全然合致するものなり、生産財産と營利財産とを區別する學者少なきは即ち之れが爲めなり、然れども之れ事實の明晰を尙ぶものゝ執らざる所なり、ワグナーの如きすら尙、

Das Vermögen in den beiden Bedeutungen des vorigen Abschnitts (rein-oekonomisch,—geschichtlich-rechtlich) zerfällt nach seinem Zwecke und der mit ihm wirklich erfolgenden Verwendung in zwei Bestandtheile: in *Gebrauchs-* od. *Genussvermögen* und in *Produktivvermögen* oder *Kapital*. Wagner, Grundlegung I, S. 313.—

と云ふに總をす、此れ從來の學者の所論と多々軒輊する處なき見解なり、
Whatever things are destined for this use — destined to supply productive labour with these various prerequisites — are Capital.

Gannan Edition P. 261.

So bleibt denn von allen zahlreichen Deutungen des Capitalbegriffs eine einzige auf dem Kampfplatze übrig, von der wir sagen können, sie habe die Probe völlig bestanden. Es ist diejenige, die unter Capital versteht einen Inbegriff von Producten, die nicht zum unmittelbaren Genussgebrauche, sondern zu Erwerbszwecken zu dienen bestimmt sind. Böhm-Bawerk, Capital und Capitalzins, Bd. II. Positive Theorie des Capitales. 1902 S. 63.

Capital überhaupt nennen wir einen Inbegriff von Producten, die als Mittel des Gütererwerbes dienen. Social-(Productiv) capital nennen wir einen Inbegriff von Producten, die als Mittel *socialwirtschaftlichen* Gütererwerbes dienen; oder, da *socialwirtschaftlicher* Gütererwerb nicht anders als durch Production statthndet, einen Inbegriff von Producten, die zu fernerer Production zu dienen bestimmt sind; oder endlich, kurz gesagt, einen *Inbegriff von Zwischenproducten*.— Als synonyme Bezeichnung für den weiteren der beiden Begriffe kann auch-sehr passen—der Name „Erwerbscapital“ oder—weniger passend, aber desto sprachüblicher—der Name „Privatcapital“ angewendet werden; das Socialcapital dagegen kann man auch gut und bündig „Productivcapital“

nennen. Böhm-Bawerk, a. a. O. S. 38-39. (3. A. S. 54-55)

(57) 全業の基礎を以て資本と見做すは誤りなり——

Rights are in their very nature impalpable and invisible. They are not material things, but relations between many material things and the human mind and will. The right of exclusive use over land is a thing invisible and immaterial—as all other rights are. And yet although it is, and has been since the world began, the basis of all agricultural industry, it is a basis impalpable and invisible, whereas the material implements and tools whose work depend upon it are all visible and palpable enough. The land itself, the ploughs and harrows, the horses and the cattle, the flocks and herds, the human labourers, all of whom and all of which would never be where we see them without the invisible rights on which they depend—all these catch our eye, and may very easily engross our attention. The whole of these, in their due place and order are instruments of production; and if we are induced to forget any of those other elements which are equally essential instruments, merely because they are out of sight, then our deception may be complete, and fallacies which become glaring when memory and attention are awakened, may find in our half-vacant minds

an easy and even a cordial reception. Duke of Argyll, op. cit. p. 296. —

猶後巻を待て詳述すべし。

所得は大別して二にす。第一種は契約關係により反對給付して入り來るもの(契約所得) 之れを小別して二にす。第一は自分の所有財産の使用を他人に委ねたる報酬として入り來るもの、(財産所得) 即ち所有資本の賃子である。此所有資本の賃子は又更に小別して、動産に對するを利子と言ひ、不動産に對するを地代と言ふ。其第二は自分の勞働力の使用を他人に委ぬるに對して報酬として得るもの(勞働所得又は勤勞所得) 之れを賃銀勞銀又は勞賃等と云ふ(56)。

(56) 是れ又全然漸見解に出るものにして、從來の抽象的意義を全然脱却して實際生活に最も近づきたる具象的の意義を發揮するに勉めたるものなり、此點に關しては最も多く學者の異論を豫期する處にして、向後力を盡くして之れが論究に従事するを要する處なり、而して本文に述ぶる處の根本思想は、既に巴にアマダム・ミスに胚胎するものなり、即ち

Whoever derives his revenue from a fund which is his own, must draw it either from his labour,

from his stock, or from his land. The revenue derived from labour is called wages. That derived from stock, by the person who manages or employs it, (企業心理論第三九頁を見よ) is called profit. That derived from it by the person who does not employ it himself, but lends it to another, is called the interest or the use of money. A Smith, op. cit. Bk. I. chap. VI. p. 70. Cannan Ed. P. 54.

所得の第二種は以上二種の人々との間に貨幣の値に見積らるべき給付、反對給付に本づく各種の契約を締結し、資本の使用勞働の使用を買入れ、之れを自己の計算に危険に結合し、并に自己所有の財産の充用によりて、其充用した財産以上に貨幣の値に見積らるべき財の増殖を來し、其内から契約に基づく各般の支拂をなして残る所の所得である、(殘高所得) 之を企業利得又は單に利潤と言ふ。

茲に所得に大に類似し普通之れと混同せられて居るものがある、其れは傳來的又は第二次所得之れである。これは純然たる所得とは根本的性質を異にして居る。前に言つた通り所得は凡て有償的に且經濟行爲の成果として入つて來るものを言ふのである。然るに傳來的又は第二次所得は、無償的に、經濟行爲の成果として、なく這入て來るもの

例へば父兄より送られる學資の如き之れである。これは普通の言ひ慣はして所得として居るが其實純然たる意味に於ける所得ではない、假りに言ひ慣はして従つて爾かく言ふのである(59)。

(59) 是れハイン備を作る處なり 国家wirtschaftliche Untersuchungen. S. 593-4. Ursprüngliches u. abgeleitetes Einkommen.)——

Unsere Entwicklung kennt kein anderes abgeleitetes Einkommen als das ohne Gegengabe von Andern empfangene. Solches findet sich aber nur bei Armen oder durch das Wohlwollen Anderer Versorgten und bei denen, die Andern zu Abgaben beliebiger Art zwingen, ohne ihnen volle Erstattung des Wertes zu leisten, z. B. wenn eine Regierung Staatsdiener besoldet, die nutzlose oder gar schädliche Dienste leisten..... Beschränkt man dagegen die Productivität der Arbeiter auf das Hervorbringen oder Gewinnen von wirklichen materiellen Gütern, so ist man gezwungen, alles Einkommen, das sich sein Erwerber nicht durch eigene Production schafft, sondern auf dem Wege des Verkehrs erwirbt, als abgeleitetes Einkommen anzusehen.——

參 Handwörterbuch d. Staatsw. Bd. III. S. 353. を參照せよ。

Ursprüngl. Einkommen jenes welches der Empfänger durch Teilnahme an der Produktion verdient hat, abgeleitetes jenes, welches er ohne eine solche Teilnahme bezieht.

序に注意して置かねばならぬことは、國家其他公共團體の歳入中公經濟的歳入と稱する租税并に手数料は、決して純然たる意味に於ける收入でないこと之れである。元來公經濟的と云ふ名稱を此種のものに附するは拙劣な言表はし方である(60)。が此事は茲に省くとして、兎も角財政大權によつて國家が無償的に國民經濟内の各經濟主體の所得の一部を強制的に徴收するのは、茲に言ふ收入でなく、從て所得を形成するものでないことは明白にして置かねばならぬ。

(60) 是れ主としてツケナリを誤解するより出づ、但し氏も全く其責を免るゝ能はず公經濟的と云ふときは公私の差あるのみにて、純然たる經濟的収入の如く見ゆべし、之れ戒めざる可からず、租税・手数料を國家が徴收するは、經濟上の收入を得ると事體全然異ればなり、租税とは國家が人民に與ふる利益に對する報酬なりとの舊説の影響は尙此に餘波を止むるなり、是れ予の之れが排撃に勉むる所以なり、シエモラーも亦明晰なる説明の下に公私の經濟を論じ、Grundriss S. 318. 中、並に本文註(64)を見る可し。

同一種類の所得を得て居る經濟行爲者の全體を經濟階級と言ふ。經濟階級内の各箇の關係竝に一經濟階級と他の經濟階級との間の相互の關係を近來の言葉で社會的と言ふ。此意味に用ゆる社會的なる言葉は、廣い意味の社會的といふ言葉と混同してはならぬ。廣い意味で社會的といふのは、廣く社會に關する事といふ意味に用ゐるが近來の狭い意味で言ふ社會的といふのは、經濟階級間のみの關係に關する形容詞であつて殊に賃銀てふ所得を得て居る勞働者といふ經濟階級と、企業利得なる所得を得て居る企業者階級との間に於ける關係を稱して社會的關係と言ひ、此間に生ずる色々の問題を稱して社會問題と言ひ、此の如き經濟階級の區別を廢して仕舞ふことを目的として居る主義を稱して社會主義と名けるのである(61)。

(61) ヲグナー自ら此點を明瞭たらしむるに勉む Wagner, Finanzwissenschaft 3. A. 1883. Bd. I. S. 474. ff. —

Staatwirtschaftliche Einnahmen oder Aufgaben (譯、適當の語なり) auch (im weitesten Wortsinn) Abgaben oder Steuern genannt, sind diejenigen, welche irgendeine, d. h. nach der Art ihres Eingangs

und nach der Höhe ihres Betrags, Kraft der Finanzhoheit als Mittel zur Ausführung der Staatszwecke zuungunsten von anderen Einzelschaften.

然るに何を苦しんで國學經濟的収入なる誤解を惹起し易き名稱をワグナーは用ふるや、解し難きことなり。

本文述ぶる所は、元より唯其一面を論ずるに過ぎず、此れを以て完全なる定義と見るの不可なるは言を俟たず、後卷の論述を待つて後之れを知るべきなり。

經濟階級は昔の門閥的の等族と混同してはならぬ。等族とは所得又は職業の種類を同うするに云ふ様な經濟上の動機から結合せられるもので無く、生活程度の状態が同一であり、文化の度が同じであり、風俗習慣が等しいといふやうな事が、數世數代の間傳説し習慣に依つて保たれて居る社會上の團結を稱して言ふので、今日の經濟階級とは大に異なるものである。

第二章 集觀の概念

人類が經濟行爲をなし經濟を營むは、決して單獨に孤立してするもので無い。他の經濟行爲者又は經濟主體と同一の社會にあつて、各其大きな社會的團體の一員として働くものである。即ち各經濟主體經濟行爲者は家族民族國民等の一員として營むものであつて、經濟單位は幾人かの人間から成立して居るものである。昔の經濟生活に在つては、經濟單位の包含して居る人数は非常に多數であつた。今日でも家族と經濟單位とは殆ど合致して居る。經濟を營み並に此經濟の爲に經濟行爲をするは、決して自分一人の爲にすることに無く全體の爲にすることである。殊に今日の經濟組織に在つては、一の經濟が要する財は前に述べた通り、之を自ら生産するは極めて小部分に限られて居つて、大部分は他の經濟主體又は經濟行爲者から交換又は賣買と云ふ間接的方法に依つて得

て來なければならぬものである。即ち何れの意味から言つても、相依り相須つて一つの社會的關係の中にあつて、初めて經濟並に經濟行爲が成立し得るものである。此の如く相依り相須つて經濟を營み經濟行爲をなして居る人々の全體は、即ち前に述べた經濟組織であつて、其經濟組織を組立つるものは經濟單位である。

經濟單位は今日は夫婦並に其子女等から成立つ家族、即ち所謂小家族又は特殊的家族と同じであるが、昔に在つてはさうでは無く、所謂大家族が經濟單位であつた。大家族とは單に夫婦並に其子孫ばかりで無く、子孫の配偶兄弟姉妹并に其配偶等三四代に涉る人間を包含して居る家屬共産體である。我邦の大寶令に戸といふのは之れである。今日所謂一門一族又は廣い意味で家と云ふは、此大家族の佛を存して居るものと見て、差支ない(62)。此家族の上に氏族がある。氏族とは同一の祖先を有し又有すに信ずるに依つて、骨肉の情を互に分つ人類の一團體を言ふ。其包含する人数は非常に多數である。是等の氏族が澤山結合して一つの種族を形成し、幾多の種族集つて民族を成立す。同一種族に屬するといふことは、家族並に氏族に屬すること、異つて必ずしも、血族關係又は共同

の祖先を有するここから來るので無く、共同の土地に住ひ同一の言語を用ひ同一の權力に服従する點からの團體を言ふのである。即ち種族とは文化的地域的の一の團集であつて、政治的團體の抑々根本は此處にある。而して民族とは種族の大きくなつたもの以外ならない。

(63) 大日本古文書卷の一(東京帝國大學明治卅四年出版自初頁至三二六頁)に掲げたる大寶二年

御野國味峰間郡春部里、本笠郡栗栖太里、肩縣郡肩々里、各牟郡中里、山方郡三井田里、加毛郡甲布里、郡里末詳、筑前國島郡川邊里、豊前國上三毛郡塔里、同加目久也里、仲津郡丁里、豊後國等の戸籍、

養老五年

下總國葛飾郡、大島郡、倉麻郡、意布郷、針托郡、少幡郷、陸奥國、常陸國、讚岐國、因幡國、國郡未詳等の戸籍

を見るに、多きは戸口九十を出づるあり(上政戸國造大進戸口九十六四二頁) 其他二三十を數ふるもの比々皆然り、以て徵す可き也、猶史學雜誌十三編一號一號乃至三號掲載松本愛

重氏大日本古文書の研究(三十五年一月至三月)を併せ見る可し——近來理學士澤田

吾一氏此問題を研究して、甚だ有益なる業績を發表せり、大正十三年度史學雜誌を見よ——

經濟單位としての戸並に就ては拙著 *Gesellschaftliche u. wirtschaftliche Entwicklung in Japan* SS. 9-29, SS. 64-75, 並に SS. 61-174(日本經濟史論第一五頁及第一〇六頁) 參照、猶内外論叢二の一號經濟單位の發展に關する舊說と新說(經濟學研究に收む)に引用せる諸書をも併せ見る可し、一書にして能く要領を得んと欲するものは Lavelleye, *De la propriété etc.* の一編を勸む、——本書には英譯あり、獨譯あり、後者はプエヒアー教授自ら之を翻譯し且幾多の増補を施せるが故に或點に於ては原著に勝るの價值あり、題して *Das Urigentum* とす、1879年 *Leipzig* に於て出版せらる、蓋しラヴェンエヒアー二氏共に未だ經濟單位なる文字を使用せずと雖も、此くの如き新思想を初めて學界に寄與したる最も貴重の大著述にして、苟くも經濟學に志すものは、必ず日常坐右を離す可からざるものなり、獨り悲む可きは此好著の我邦學者間に洽く知られざる之なり、予が嘗て先生等の影響を受け最近研究の結果を參酌して之を我邦の經濟史に就て立論したるものは、凡ての經濟學的研究の根柢となる可きは此に存すと確信すればなり、——

猶 Schmolter, *Grundriss* S. 272-274 及び プンペマン 先生論文集第二卷を見る可し。

Die geordnete *Hauswirtschaft* (經濟單位) の家 (家) の義に解す (H. J.) der patriarchalischen Familie wird in dieser Weise für mehrere Tausend Jahre, für die Epoche der älteren asiatischen und griechisch römischen Kultur bis über das Ende des Mittelalters hinaus, sie ist noch für viele Völker und sociale Klassen bis zur Gegenwart das einzige oder das wichtigste gesellschaftliche Organ, um die Menschen fortzupflanzen, zu erziehen und um sie mit wirtschaftlichen Gütern zu versorgen; es war das erste, das dem Individuum als solchem *planvoll und im ganzen die wirtschaftliche Fürsorge abnahm*, um sie einer fest organisierten Gruppe von Individuen zu übergeben; es war das Organ, welches die Menschen eine geordnete *Hauswirtschaft* (經濟單位) を führen, einen erheblichen Herden- und Landbesitz, sowie Vermögen überhaupt zu verwahren, zu erhalten, zu mehren gelehrt hat, welches die wichtigsten wirtschaftlichen Gewohnheiten der Kulturvölker bis zum Siege der neueren Konkurrenzwirtschaft erzeugte. S. 243-4 11-12. Taus. S. 247.

第三卷に同じ家族の經濟組織としての發展を詳論す (H. J.)

Wir verstehen unter einer „Wirtschaft“ einen kleineren oder grösseren Kreis zusammengehöriger Personen, welche durch irgend welche (?) psychische, sittlich und rechtliche Bande verbunden, mit

und teilweise auch für einander oder andere wirtschaften. Schmoller, a. a. O. S. 3. (11-2. Taus. S. 3) 經濟の定義としては曖昧之れに過ぎたるはなる可し「前掲註(41)並本文九五九頁に於ける予の定義と併せ考へて判断す可し」然れども相依り相須つ人衆の圓集たるを要するはシム氏の言の如し。

猶現今に於ても多数の人より成る經濟單位の存在するものゆからず Südslaven の Zadruga は其殊に著名なるものなり Bücher-Laveleye, Das Ureigentum SS. 371. ff. — M. Kovalevsky, De la famille et de la propriété, 1890. — Ufesenovitch, Die Hauscommunien der Südslaven, 1851. — Radulowitz, Die Hauscommunien der Südslaven, 1894 等を見らば可し。

猶我邦にも又た如此大家族の存することば下に掲げたる事例を以つて知るを得可し 東京人類學會雜誌第三卷第二十九號(明治二十一年七月)三〇五頁以下掲載藤森峯三氏「飛騨國の風俗其他」

飛騨國高山より東北の人ば男女共各裁著を着す、又高山以西は然らず、白川村と稱するは飛騨大野郡の西部にして加賀越前の諸嶽と境を爲し莊川の兩岸に沿ひて上は尾上より下は小白川迄(越中礪波郡西赤尾村と境を爲す)之を白川村と云ふ、又之を小分して二十三組となせり(古昔は現今の白川村を白川郷と稱し其二十三組を二十三村即ち一

組を一村と唱へり。此二十三組中洞・脇・平瀬・木谷・枚御母衣・福島の七組を中切と稱し、風俗習慣家屋構造等より生計の模様に至る迄總て同一なり。此地習慣の奇なるは、多人數合居なり別家を爲すを忌みたるを以て一家中壯年の男女幾人あるも、相續人の外嫁を娶り嫁を引受け正當の結婚をなすを許さず、他は皆私通するのみ併し人倫を亂す者は更に無しと、兄妹伯母舅通するの類、又私通して生まれたる子は、戸主の姉妹姪伯母等の生みたるを問はず、各々戸主の子として肩け出でしが、近時に至り私生兒としても、餘り私生兒の多きを以て、本年三月頃戸長役場に於て厚く説諭をなして以來、私生兒の肩けをなさず、實際止むを得ざる者は夫婦となし、若し其地に於て戸數増加の爲め生計むづかしきと認むる時は、他の地方へ移住すべしと懇に説諭致せしも、世襲の習俗なか／＼一洗すること難し、右中切中にて最も多人數の家族は木谷にて、與兵衛治小左衛門各三十名、長瀬にて大塚保太郎三十七名、山下助六三十名、御母衣にて遠山伊助三十五名、其他は二十五名より十名位迄なり、此の如く多人數の一家内なるも正當の夫婦は二三夫婦に過ぎず、これは當主の祖父母と父母と當主となり、他は伯父母姉妹姪舅又は叔父母等なり、此家族の増加する原因女子多ければ其多きだけ増加すべし、如何とすれば、他の二三男より私通なし其生子は必ず其家の子となすを以てなり、然れども其子成長して十七八歳となり、一人前の野仕事を

致すべき迄は其家の子となすも、戸主に於ては食物を與ふる迄にて其他は更に頓着せず、其子の衣類より履物に至る迄其生母の支辨となす、故に女子にて辨じ難きは其の私通者(即ち隣家の若者)より補助するなり。上長者の別なく彼我共に其名は呼び捨てなり、併し戸主を兄(アーサ)其の妻をオバーと云ふ、是は祖父母又は父母にても、戸主並に其妻をば右の如く唱へるなり、又他へ縁すきたる女をアネーと云ひ、女の子をメロ男の子を坊と云ふ、母の事をウマツマと云へり、併し他より私通者即ち小兒の父にても之を小兒よりは、やはり名は呼捨てなり、徐々と云ふ事をしづかに、御大切に或は氣をつけて入らせられと云ふ事をメメロツテ往カシヤイ、下されと云ふ事をタモレ、入来る事をゴザル等なり。此の地方は米作更に登らず故に稗をつくり以て之を常食となせり。然れども戸主一人は日々米飯を食せり、此習慣につき他と異なるは、當戸主或は老衰又は都合によりて相續者へ家政を譲れば其日より直に稗となり、其日迄稗飯を食せし相續人は忽ち米飯と化せり。此の地は農業を主とし又養蠶を盛んになし、一家内にて生繭百貫目位得ると云ふ、然れども之を糸に製せず生繭にて他賣するを例とす、漸く昨年頃より遠山伊助なる者機械を買入れ此地にて製糸を始めたり、又た農作は稗・大小豆・麥・麻・蕎麥・桑等なり、之を耕作するに別に畑とては少なきを以て、山の日向きよるじき地を燒き之れ開きて種を下すなり、此

地雪多き地なるを以つて春雪の中桑の根を鼠に害せらるゝ故非常に困難のよし、戸主は農事には更に關せず其の指揮者は別に一家内中に專任ありて、戸主は野に出でず家内にて家務を司るを以て其年の收入雜穀又は藪何程ありて幾何に賣れたるやを他の者に聞くも更に知らず、戸主より毎年家族へ夏衣と稱し麻にて織り之を紺に染めたるもの壹枚を仕着するを例とす、又女は之に紋を附けたるもあり、此外衣服各望に任せり、因て春は七日め夏は五日め毎に休日と稱して戸主の仕事なまさず、各自分の目的とする仕事をなし或は別に切畑を作り又は山に至り木實を拾ひ又獵を爲し、休日得るものを自己の所得となし之を以て我需要費に充つ、故に節儉にして能く勞働する者は衣服履物等烟草入の類にても一通りは所持するものあり、又之に反し或は休日の餘暇を働かず又は酒を呑む類なる輩は一家族中にては唯僅に戸主より仕着の儘なる者もあり、故に一家族中にては貧富を異にせり。

此他猶如此習俗の存する處他地方にも或は之れあらん、本書の讀者にして之を知る人あらば著者に教へて材料を供給するに吝なるならんを熟望す。(猶國民經濟講話第七十六頁以下に、其後子が實地視察したる處に關する記述あり)。

是等の各社會的團體は又それに應ずる持續的秩序組織たる經濟を持つ。大家族即ち

家屬共產體の經濟を名けて家屬經濟と言ふ。抑と經濟なる語は此處から起つて來たのであつて希臘語の *Εκονομία* の字は家族共產體の欲望充足に向つての一定の秩序組織を言つたのである。希臘の *Οικονομία* と言ふのは、今日の意味に於る家族や家でなく此の汎い意味に於ける家屬共產體殊に奴隸を包含して居る大家族の意味である。ノモスとは言ふ迄もなく秩序定規を云ふことである。羅馬の *ファミリア* を云ふのも亦此大家族の意味で殊に奴隸の總稱である。我邦上古の「部」を云ふのも同じである(63)。氏族の經濟は氏族經濟と言ひ種族の經濟は種族經濟と言ひ國民の經濟は國民經濟と言ふ。

(63) Nicht umsonst hat man daher die Entstehung der Hauswirtschaft als das Ende der Barbarie, als den Anfang der höheren Kultur bezeichnet; nicht umsonst benennen alle Kulturvölker noch heute alle Wirtschaft mit dem griechischen Worte „Haus“ *οικία* als *ökonomie*. Schmoller, *Gründriss*. S. 243. (11—12. Taus. S. 249)

Bücher, Entstehung der Volkswirtschaft. S. 116.

In der Zeit ausschliesslichen Herrschaft dieser patriarchalischen Familie besteht die Gesellschaft.

hat man gesagt, aus einem völkerrrechtlichen, Bunde von Familienhäuptern: alle ihnen untergeordneten Familienglieder haben nur durch sie Beziehungen zum Ganzen und zu den höheren socialen Organen; sie wirtschaften nicht für sich, sondern nur für die Familienväter. Schmoller, S. 244. (11-12. Taus. S. 249)

拙著 Gesellschaftl. u. wirtschaftl. Entwicklung in Japan. SS. 18-20. S. 22. S. 24-29. (日本經濟史論第四一頁)

栗田寛著氏族考上自三十一頁至三十七頁、自四十一頁至四十九頁、自七十九頁至八十二頁等參照す可し。

有賀長雄著帝國史略、同國法學上卷初頁至二七頁、法制論纂第四七頁、中古戶籍法自七三一至七五七頁、第四八頁、中古の民法大要自七五七頁至七七四頁、第二一、大賣令中私法の條項自三七三頁至三八八頁——

經濟の取る具體的形態は以上何れであつても、之を其性質から分つて次の三種類になる。第一は特殊經濟、第二は共同經濟、第三は綜合經濟である。

特殊經濟とは統一的に財の獲得と充用とを營む單一の經濟單位の謂で、今日の所謂家族經濟は一の特殊經濟である。故に此場合に於ては特殊經濟が即ち經濟單位であり、經濟單位は即ち特殊經濟である。綜合經濟とは、之に反して是等諸々の經濟單位、即ち特殊經濟の全體を包含する組織を指して言ふのである。綜合經濟といふ時には、具象的に一の實在の經濟の謂に非ず、抽象的の意味に於ける一つの心象に外ならないのである。

特殊經濟が各其欲望を充すには、其欲望は其經濟單位の經濟行爲に依つて充すことも出来るが、又其性質上到底特殊經濟のみの經濟行爲で以て充すことの出来ない欲望がある。或は經濟單位の經濟行爲に依つて充すことは出来ないが、共同的に他の經濟と共にするに依つて遙かに好く、遙かに容易に、遙かに便利に充すことを得る欲望がある。此くの如き欲望を稱して共同的欲望と言ふ。共同的欲望を充す爲には各種の經濟團體が出来て来る。之を團體經濟と言ふ。此如き團體經濟それ自身に又特有な欲望がある、之を名けて團體欲望と言ふ(64)。是等の共同的欲望並に團體的欲望を充足する爲に起り来る共同的組織を稱して共同經濟と名ける。例へば國家經濟、自治體經濟、組合經濟の如き是である、是等の共同經濟と特殊經濟との全體を總括する組織は即ち綜合經濟

2820°

(64) Das ursprüngliche Wirtschaftsleben ist auf Ernährung, Kleidung, Wohnung, Herrichtung gewöhnlicher Werkzeuge, einfache Dienstleistungen gerichtet; alles Derartige besorgt am einfachsten und billigsten das Individuum, die Familie, die Unternehmung, welche Produkte oder Dienste für andere auf dem Marke nach dem Princip von Leistung und Gegenleistung mit Gewinnabsicht verkauft. Wenn nun mit steigender Kultur und zunehmender Bildung grösserer, socialer Körper ein Theil der Befriedigung menschlicher Bedürfnisse auf die öffentlichen Haushalte und Anstalten, ein anderer aber nicht übergegangen ist, so muss die Ursache darin liegen, dass von den gesteigerten und differenzirten Bedürfnissen ein Theil, der ältere, einfachere, natürlichere, im ganzen doch besser durch die privatwirtschaftlichen (? einzel- oder sonderwirtschaftlichen), ein anderer, der spätere, höhere, komplizirtere, besser durch die öffentlichen (? gemeinwirtschaftlichen) Organe befriedigt wird. Schmoller, Grundriss S. 328. (11-12 Taus. S. 340)

以上は私經濟に代ふるに特殊經濟、公衆機關に代ふるに共同經濟的機關なる文字を以て「カ」字が本文に發せらる處と全然同一の意味を異なる言辭を以て説明するものなり。

經文註(9) 卷三〇 —

Es kann aber auch eine Lebensgemeinschaft unter Menschen bestehen, in welcher es nicht allein um das Wohlsin und die Lebenserleichterung der einzelnen Mitglieder sich handelt, sondern in welcher Bedürfnisse hervortreten, deren Subjekt nur Träger die Gesamtheit ist. Wie gesondert auch die Einzelnen bei der Güterverwendung für ihre Bedürfnisse einander entgegenstehen, so lebt doch in Allen die Sociabilität als ein Grundzug ihres Wesens. Es ist nicht blos eigenes Interesse, das sie zu besserer Befriedigung der Einzelbedürfnisse verbindet; sondern es ist das Bewusstsein oder doch das dunkle Gefühl der inneren Gleichartigkeit einer Gesellschaft, die sich in der Vereinigung einander fremdester Individuen durch Geburt erneuert. Wiewohl die menschliche Societät nur in ihren Gliedern lebt, so erscheint doch Jeder temporär als Träger ihres Gesamtlebens, der seine eigenen wesentlichen Lebensbedürfnisse und Aufgaben, ohen persönlichen Calcul, als gemeinsame Aufgaben des Geschlechts, des Volks, oder einer engeren Verbindung aufzufassen vermag. Bedürfnisse einer Mehrheit von Menschen, als eines Ganzen, deren Befriedigung lediglich der Gesamtheit ohne Bezeichnung einzelner Mitglieder der Verbindung und Antheils dargeboten wird.

heissen dann Gemeinbedürfnisse oder Collectivbedürfnisse.——

.....

Wir haben hier Collectivbedürfnisse blos formal aufgefasst, mit Rücksicht auf ihre Befriedigung durch gemeinsame Anstalten, die sich Mitgliedern einer Gemeinschaft überhaupt oder als solcher darbieten. Darunter können sich manche befinden, welche ihrem Wesen nach nur verbreitete oder auch allgemein Bedürfnisse von Individuen, nicht eigentliche Bedürfnisse der Gesamtheit sind. Hermann, S. 94-95.

是れが本文に共同的需求 (Gemeinbedürfniss) と稱するのことは、凡そ國民經濟論のCollectivbedürfniss といふ eigentl. Bedürfniss der Gesamtheit といふは、凡そ國民經濟論の Gemeinbedürfniss) といふことの略稱たるべきことなるに注意せしむべし。

Das wahre Collectivbedürfniss muss sich auf Zwecke der Gesamtheit als solcher beziehen und der Träger desselben eben die Gesamtheit sein Nur das Bedürfniss der Landesverteidigung und der Rechtspflege hat diese Eigenschaften
.....

Alle anderen öffentlichen (?) Bedürfnisse, wie sehr ihre Befriedigung auch zur Lösung der Gesamtaufgabe des Volkes mitwirkt, sind doch eigentlich mehr auf gemeinsame Einrichtungen und Anstalten gerichtet, welche wichtigen Aufgaben des Privatlebens ordnend, schützend, fördernd zur Seite stehen. Für Schutz und Sicherheit, für Salubrität, für Bildung, Religion, muss der Einzelne thätig sein, die Gesamtheit kann nur beihilflich mitwirken. Die Zusammenfassung der Theilhaber liegt hier blos in den Veranstaltungen zur Befriedigung, nicht im Wesen der Bedürfnisse selbst.

公共的需求とは極めて明晰を缺く用語なり然れども、この文章の就く所は一面甚だ奇麗に中り、マンナーの所謂 Gesetz der zunehmenden Staatsthätigkeit (I. S. 884) に對し或る共同的需求の真相を發掘せしむるの故なり。——S. 827-924 参照せよ。——

Schäffle, System 3. A. I. S. 102. 106.

F. Sax, Grundlegung § 29 ff. S. 179 ff.

G. Cohn, Zeitschrift f. ges. Staatsw. 1881 S. 468. ff.

マンナーは共同經濟の思想を發し、マンナーは、マンナーに對し、そのなりと、其の

a. a. O. S. 859. — トリスミアトニムは四へ

Hiernach müssen nun Wesen, die ohne einander nicht bestehen können, sich notwendig paarweise einander zugesellen, wie Männliches und Weibliches zum Zweck der Zeugung. Es geschieht dies nicht etwa aus freier Wahl, sondern nach dem anderen Geschöpfen und Gewächsen von Natur inhaftenden Triebe, ein ihnen gleiches Wesen zu hinterlassen. Sodann gesellt sich von Natur ebenso Herrschendes und Beherrschtes zu einander, zum Zweck der Erhaltung..... Aristoteles' Politik uebers. v. Stahl. B. I. K. I. § 4. S. 82. —

..... Denn wenn der einzelne in seiner Isolierung sich nicht selbst genügen kann, so wird das Gefühl über ihn kommen, dass er, wie die anderen Theile, zu einem Ganzen zu gehören habe. Wer aber nicht Glied eines Vereins sein kann, oder, sich selbst genügend dessen nicht bedarf, ist gar kein Element des Staates, also entweder ein Thier oder ein Gott. Von Natur nun lebt in allen der Trieb, in einen solchen Verein zu treten, demjenigen aber, der ihn zuerst gründete, verdanken wir die höchsten Güter. a. a. O. § 12 S. 86-7.

今日の共同經濟は、之を狭い意味に於ける團體經濟即ち共產制經濟を混同してはなら

ぬ。共產制經濟にあつては之に屬する各員の欲望は總て共同的に充足せられるので其以外に欲望を充足するこゝもなく又之れを充足する道が無いのである。であるから此の如き共產制經濟の中にあつては團體欲望があるばかりで個人的欲望充足を主眼とする完全なる特殊經濟と視すべきでない。嚴格な意味から云へば今日の家族經濟も夫婦并に其子女間には其欲望充足に關して嚴然たる區劃を立て難いから此種の共同經濟に屬すべきものであるが、普通之を共同經濟の中に入れてはならない。彼の昔の希臘のオイコス羅馬のファミリア日本の「部」等即ち家屬共產體の經濟并に氏族經濟等は此種類の狭い意味に於ける共同經濟又は共產制經濟である。

家族經濟は既に言つた如く一つの具象的經濟で狭い意味に於ける共同經濟、即ち共產制經濟と見るか又は特殊經濟と見るかの外はないものである。氏族經濟も亦さうである。之に反して種族經濟は何れの點から見ても決して特殊經濟ではない、共同經濟か又は綜合經濟である。國民經濟は之に反して種族經濟のやうに範圍が狭くないから狭い意味に於ける共產制經濟即ち共同經濟の形を取ることとは出来ない。今まで嘗つて此の

如き形を取つた例が無い。將來も亦取る見込は無い。但し社會主義の理想とする將來の國家經濟は此形を取るべきものである。然らざる場合に於ては國民經濟は何時でも一の綜合經濟たるに過ぎない。言葉を換へて言へば、國民經濟は具象的存在で無く抽象的の心象である(65)經濟單位でなく何時も經濟組織たるものである。

(65) Die Volkswirtschaft aber, ist, da in diesem Umfang keine *Gemeinwirtschaft* im engeren Sinn stattfindet oder je stattgefunden hat, immer nur Gesamtwirtschaft, also eine Abstraction. Fuchs, a. a. O. S. 19. 4. A. S. 18.

シモモラーは稍異なれる見解を執るものなり、曰く

Uns ist die Volkswirtschaft ein reales Ganzes, d. h. eine verbundene Gesamtheit, in welcher die Theile in lebendiger Wechselwirkung stehen und in welchem das Ganze als solches nachweisbare Wirkungen hat; eine Gesamtheit, welche trotz ewigen Wechsels in den Theilen, in ihrer Weesenheit, in ihren individuellen Grundzügen für Jahre und Jahrzehnte dieselbe bleibt, welche, soweit sie sich ändert, sich uns als ein sich entwickelnder Körper darstellt. Niemals werden tausende von Einzelwirtschaften, die verschiedenen Staaten angehören, als „eine Volkswirtschaft“ vorgestellt und

zusammengefasst. Grundriss, S. 5.

茲に「*reales Ganzes*」はシモモラー獨特の修辭的 Phrasenmacherie のみ氏の國民經濟の定義「*社*(66)を見よ」に徴するに氏は國民經濟を以て特殊經濟と同じき一の具象的經濟となさざるや明なり唯氏は極めて漠然たる *Socialer Körper* なる名辭を屢々濫用し「*ソグナリー*」の語句を漸り來つて此の如き經濟は即ち *reales Ganzes* なりと云ひて村落種族都市領域等の社會團體の經濟は擴張して茲に國民經濟となりたものとなれば均しく *reales Ganzes* なる全然同性質の經濟の唯其順應す可き社會團體の大小あるの差異あるのみと説くなり、氏の社會團體とは抑も何を標準とせるものなるや氏は之れを目して單位(有機的見解を取れば細胞)となすや、又は組織となすや、修辭的舞文弄筆に巧なる氏は遂に明晰なる斷案を下さずして曰り、知る可し氏の共同經濟と綜合經濟とを區別して明確なるものあらざるの理由茲に伏在することを明確に吟味せられざる *Phrase* 用法一定せざる語句を屢々慣用するの弊戒めずして可ならんや、殊に予は事理の明晰を尙ぶ可きことを熟知するに及ばざる青年學者が、シモモラーを卒讀して一知半解の説明をなすものあらんことを最も恐れ且シモ氏の爲めに深く憂へざるを得ざるなり、――

シモ氏は猶曰く、――

Es (Volkswirtschaft) handelt sich um eine *Gesamterscheinung*, die auf der menschlichen wirtschaftlichen Thätigkeit beruht und die zugleich von den *menschlichen Gemeinschaften* ihren *Stemple* (31) empfängt. S. I.

これを字を本文に就く所に強くと強くと其互の可からず氏の用語の動搖轉換し難や
其互の可からず氏の用語の動搖轉換し難や其互の可からず氏の用語の動搖轉換し難や
20 —

アハナーの強固な組織を以て管理の明瞭なるものなり——曰へ

Ein einheitlicher Wille fehlt bei der Volkswirtschaft, wenigstens wenn dieselbe in ihrer bisherigen, sogut wie ausnahmslosen geschichtlichen Erscheinung betrachtet wird, im Gegensatz zu gewissen socialistisch-communistischen Ideen von einer „Zukunfts-Volkswirtschaft“ mit einheitlich geregelter „socialistischer“ Production, und Vertheilungsweise. Die Volkswirtschaft in ihrer geschichtlich überkommenen und thatächlich bestehenden Form entbehrt überall eines leitenden Wirtschaftssubjects an ihrer Spitze. Sie ist der als *abgeschlossenes Ganzes* (32) 4 5 6 7 8 9 10 11 12 reales なる 形容詞を附して折角の各句を Paralytiren して 13 14 15 gedachte Inbegriff der unter

einander durch Arbeitsgliederung verknüpfen und nach Maassgabe einer bestimmten wirtschaftlichen Rechtsordnung (Privat- und Verwaltungsrechtsordnung) verkehrenden *selbständigen* (氏譯 民間の團體 なる 形容詞 2 3 4 5 6 7 8 9) Einzelwirtschaften in einem zum Staat (auch Bundesstaat) organisirten oder durch staatliche Wirtschaftsmaassregeln zu einem Wirtschaftsgebiete („Zollverein“) verbundenen Volke: ein *organisches Ineinander*, nicht ein *mechanisches Nebeneinander* von Einzelwirtschaften. Grundlegung, S. 353.

特殊測定的の煩雜なる用語法は服し難しと雖も(是れ 2 氏が終生頭等し難や Kinder-
schube なる可し) 末尾の一句結び得る要領を得たり。——
アハナー 曰へ

So aufgefasst beruht die Volkswirtschaft zunächst allerdings nur auf einer *Abstraction*, aber nicht mehr und nicht weniger als „das Volk“ auf einer solchen beruht. Sie ist daher auch trotz ihrer Subjectlosigkeit, wodurch sie sich von der Einzelwirtschaft unterscheidet, ebenso gut wie das Volk ein *reales* Ganzes, welches sich in entscheidenden Punkten als ein Organismus darstellt, dessen nicht bloss Theile, sondern Glieder die Einzelwirtschaften, und zwar *eingeschlossen* der vom Staate

repräsentiren Gemeinwirtschaft, sind. Denn wie s'fiker dargelegt werden wird ist der Staat selbst auch als eine Wirtschaft aufzufassen. Eine Seite dieser Wirtschaft ist wieder die Finanzwirtschaft

マンチーの法に言ふ如く、雖然、organische Auffassung der Volkswirtschaft を取らざるは、それを呼ぶべ realen Ganzes となす亦妨げず、然らざれば之を幾層かのマンチーの自家撞着に陥るの嫌ある亦不得已處なり、——

Organische Auffassung 即ち國民經濟有機體説は其反體なる atomistische Auffassung 國民經濟原子説と共に予の取らざる所なり、其理由は後編更らに詳説せざる所あり、——
マンチーはリンドマンの攻撃に答へ曰く、——

Lindmann hat Recht darin, dass die Volkswirtschaft nicht im Sinne der „Einzelwirtschaft“ eine „Wirtschaft“ sei, weil sie subjectlos ist. Sein Bestreben, den Begriff „Volkswirtschaft“ und „Volkswirtschaftslehre“ als unlogisch zu erweisen und nur eine „Staatswirtschaft“ (und Lehren davon, nebst Gewerkslehren) anzuerkennen, ist aber nur die Folge seiner unhaltbaren Prämissen von den „freien Individuen in der Urneberschaft,“ die die Production bedingt. Auch als Staatswirtschaft hat die Volkswirtschaft kein leitendes Subject im Sinne der Einzelwirtschaft an der Spitze a. a. O. S. 354.

是れ予の取る所の見解に全然合する穩健の答辯なり、——

蓋し Volkswirtschaft と稱するに到れるは、第二編に説明するが如く、獨逸にありては歴史的理由あるものにして、ロマンニーは之れを説明して次の如く曰く、——

Bei den staatskräftigen Franzosen und Engländern économie politique, political economy: in Deutschland, wo sich bisher Volk und Staat viel weniger deckten, lieber Volkswirtschaft oder Nationalökonomie. Uebrigens hat gerade Hufeland, durch welchen der Ausdruck Volkswirtschaft zuerst üblich geworden (N. Grundlegung I, 14), an die Eigentümlichkeit erinnert, "dass man bei der Wirtschaft an einen leidenden Hauptwirth denkt und dass ein solcher eben nach den richtigsten Ansichten bei der Volkswirtschaft fehlt," Grundrager, § 12. Anm. 3. S. 33.

されば是れが真相を得んとするは、又歴史的に研究したるの後ならざる可からず、是れ予が第二編に經濟組織の發展を説て終に國民經濟の成立に及ぶ所以なり、——而して國民經濟を綜合經濟となりと説くは最も此間の消息を傳へるに便にして、リンドマン以下諸氏の誤解は之れによりて一掃するを得可しと信す、——

猶ロマンニーの説く所はシキモラーの論ずる所に似て亦同じからざるものあり、——
曰く、

Obgleich die höhere Volkswirtschaftslehre ihren Gegenstand fast immer als eine Gesamthätigkeit des Volkes aufgefasst hat, so halten doch neuerdings Viele die *Volkswirtschaft* für kein *reales Ganzes* sondern für eine *blosse Abstraction*. Dies thun namentlich viele unbedingte Freihandels theoretiker, zum Theil aus Widerwillen gegen politische Bevormundung der Einzelwirtschaften. Sodann aber auch Philosophen, die selbst den Begriff Volk als einen bloss nominalen ansehen. Es wird aber zweierlei erfordert, um eine Zusammenfassung von Theilen zu einem realen Ganzen zu machen: die Theile müssen unter einander in Wechselwirkung stehen, und das Ganze muss als solches nachweisbare Wirkung haben. (Drobisch). In diesem Sinne ist das Volk unstreitig eine Realität, nicht bloss die Individuen, welche dasselbe ausmachen. Weiter sagt man mit Recht, jede Wirtschaft setzt einen Willen voraus. (Planmässige Thätigkeit u.) Einen solchen Willen schreibt man dem Einzelnen zu, auch juristischen Personen, dem State, nicht aber dem Volke im Ganzen. Allein der Wille braucht nicht immer ein vollständig bewusster zu sein, wie schon die geistig minder begabten und weniger gebildeten Hauswirthe zeigen. Das Planmässige der Volkswirtschaft äussert sich am deutlichsten in den ökonomischen Gesetzen und Staatsanstalten. a. a. O. S. 52.

又ハ Hauswirtschaft, Corporations=oder Associationswirtschaft, Communalwirtschaft, Staats= Volkswirtschaft を以て皆共同經濟に屬す可きものとす (§ 31) 是れ氏の所説甚だ明瞭を缺く所なり。

以上言ふ所を要言すれば國民經濟とは一國民の各種經濟行爲の全體茲に各般の共同經濟并に特殊經濟の總括的組織である。全國民の欲望を充足する目的の爲めに存在する諸々の機關制度設備經過等の全體を包含する總稱である。其依つて立つ根本的要件は交換と分業の二つであつて、各特殊經濟並に共同經濟は此交換並に分業の二つに依つて結び附けられて一の抽象的綜合經濟たる國民經濟の組織を形成して居る。而して此の綜合經濟を形成するには、其の前提として共同的國民的基礎を持つことが必要である。其共同的基礎は、言語宗教風俗習慣法律等多數あるが、其中最肝要なのは政治上の統一即ち國家といふ共同の基礎是れである。従つて國民經濟と言ふ時には政治上一國家の下に統一された經濟單位並に經濟行爲者の全體を指して言ふので、經濟行爲中、技術の部分に屬するか又は個人的現象たるものは之を別にして、其然らざるもので分業と交換とを

基礎として活動して居る各經濟單位間、即ち各特殊并に共同經濟間の相互關係各個人の經濟上に於ける行動を悉く包含する。故に國民經濟と云ふは、一國民中の一切の特殊并に共同經濟換言すれば國民經濟の全體に關する社會的秩序と組織である(66)。されば國民經濟は分業と交換が一般に擴まつて國民的の制度となり政治上全く統一した國民全體を通じて行はれるやうにならなければ成立するもので無い。其れは數千年の歴史的發展の結果であつて其史的發展の順序として先づ近世國家の生れることが必要である。故に實際に於て國民經濟は近世國家の生れる時を同うして出て來たのである。其以前に溯れば國民經濟といふ現象は決して存しない。古往今來國民の數は非常に多いけれども、此意味に於ける國民經濟を完成するに至つた國民は其數決して多くないのである。交換分業の發達の遅い所、交換分業に依つて結付けられない處に於ては特殊經濟は完全に發展することが出来ない。特殊經濟の圓滿の進歩を得るは國民經濟あつて初めて見ることが出来るのである。即ち國民經濟は、今日までの各種の經濟組織の内で最進歩したものであり又最高の階段である。世界中に此階段まで達した民族は擧げて數ふ

るに足る程しかない。彼の正統學派が、此意味の國民經濟を何れの時何れの處にも存するものとして立論するのは大なる誤謬である(67)。

(66) シュモラーは粗同一の見解を執ると雖も、其國民經濟の定義は單洋頗る捕捉し難きの處あり、即ち曰ふ——

Wo grössere sociale Körper sich bilden mit einer Reihe von Städten und Landschaften, wo mit zunehmendem Tausch- und Geldverkehr von der Familienwirtschaft sich besondere Unternehmungen, d. h. lokal und organisatorisch für sich bestehende Wirtschaften mit dem ausschliesslichen Zwecke des Handels und der Güterproduktion lossen. der Markverkehr und der Handel immer mehr alle Einzelwirtschaften beeinflussen und abhängig von sich machen, wo zugleich die Staatsgewalt durch Münzwesen und Strassenbau, durch Agrar und Gewerbe-gesetze, durch Verkehrs- und Handelspolitik, durch ein Geldsteuersystem und die Heeresverfassung alle Wirtschaften der Familien, Gemeinden und Korporationen von sich abhängig macht, da entsteht mit dem modernen Staatswesen das, was wir heute die Volkswirtschaft nennen. Grundriss. S. 4.

ロマンナー曰く

Durch den Gemeinsinn wird dann auch der ewige, Alles zerstörende Krieg, welches der gewissenlose Eigennutz zwischen den Einzelwirtschaften hervorrufen würde, zu einem löblichen, wohlgegliederten Organismus veröhmt. a. a. O. S. 31.

字句の上より嚴密に之れを觀察すれば、ロ氏は此一句に於て明かに有機體説を取るものなり、而して氏は此有機體説を終始一貫把持するものにあらず、是れ氏がシエモラーと共有する通想にして、修辭にのみ苦心するの結果、自らは少しも企圖せざる自家撞着をなすに至るなり、――

蓋し諸氏は國民經濟が特殊經濟を單純に合計したる器械的の觀念にあらざるを明かにせんと欲するの極、或は reales Ganzes と云ひ或は Organismus と云ふが如き了解に便なる文字を用ゐたるなる可し、諸氏の構思一番綜合經濟并に社會的秩序組織の思想を得るに及ばずして曰みたるは、實に惜みても猶餘ある所なり、――

ワグナーは其經濟原論の第二編第五卷第一章に於て、第一編に下したる國民經濟の定義「*誰(65)を見よ*」を追補して曰へ、

Aber so wenig als das „Volk“ ist auch die Volkswirtschaft ein reines Naturgebilde, sondern sie ist zugleich, wiederum ebenso wie jedes staatlich organisierte, durch seine Lebensgeschichte erst

entwickelte, zur Cultur nicht ohne Weiteres im Laufe der Zeit „von selbst gekommene,“ sondern absichtlich dazu erzeugte Volk,――ein Gebilde bewusster menschlicher That, ein Kunstproduct. Menschliche, auf ein bestimmtes Ziel gerichtete, planvoll durchgeführte Willensacte geben der Volkswirtschaft ihre bestimmt gewollte Gestalt, eine künstliche Organisation. S. 770-1.

而して國民經濟の人為的組織なることを知るには、コルンマア其他の執りたるメルカンチスム・ミムタムを見るに若くはなごと云へり、――蓋し有力なるメルカンチスム・ミムタムは國民經濟の發生に bewusste, planvoll durchgeführte Willensacte を與ふるに必要にして、其發生は悉く此の意思の力に藉るにあらざるとするも、其發達其教育には必ずなかる可からざるものなるを以ても知るを得可しと論ぜり、是れ予の贊同するに躊躇せざる處なり、然れども、之れを以て國民經濟は又之れを大局より見て遂に歴史的産物なるを忘るゝ可からざるなり、――ワグナーの茲に論じたる處のみに就ては、氏の見解の全般を窺ひ知る能はずと雖も、要するに氏も又同説なる可きを信ず、蓋し氏が Organismus と前に云へるは、其 natürliche Seite を主として云へるものにして、das Wesen der Volkswirtschaft, ein aus Naturtrieben (之れを自然的發展と解すれば尙可ならん) hervorgehendes Naturgebilde を示すものとして、ナグム・ミムタム以下の學者の此の自然的見解を執り、年々其 natürlicher Orga-

nismus なることを論じ、個々の職業々々 aus dem organischen Naturgebilde ein blosses äusserlich mechanisches Nebeneinander von Einzelhaushalten なるを論じたるのみなるを非難せるは最も奇矯に中れる所論なり、之れに反して人為の組織なることを今第二編に於て特に明示するは、*das Moment*, welches in dieses Naturgebilde mit bewusster menschlicher Absicht planvoll hinein getragen worden ist; *das Moment selbst organisirender menschlicher Thätigkeit*, durch welches die Volkswirtschaft aus einem Naturproducte des blossen menschlichen Trieblebens ein menschliches, vernunftgemässes Kunstproduct wird を説く可なり、*これを説く所以となすもの亦可なり、唯氏が如此重要な Moment を第二編 770 頁以下に至り初めて明瞭ならしむるに過ぎずして、永き間讀者をして氏の真意のある所を誤解するに一任するは予の取らざる所なり。*——而して此兩者を綜合して社會的秩序なり組織なり綜合經濟なりと説くに及ばざるに至れば氏は從來の學者と多く分る所なし、是れ氏が一語兩義の使ひ分けを爲すの不得止に到りし所以、遂に惜む可きなり。——

(67) Die ältere, „abstracte,“ „unhistorische“ Nationalökonomie hat jene Momente (entwicklungsgeschichtliche) theils gar nicht, theils nicht genügend gewürdigt oder, wo sie darauf einging, hat sie sich die geschichtliche Entwicklung zu einfach construiert, namentlich Arbeitstheilung;

Verkehr, Tausch sich zu einfach mechanisch nach den Anschauungen des modernen ökonomischen Individualismus aus dem Wirken des Selbstinteresses entwickeln lassen, ohne die Factoren zu erforschen, welche das Wirken dieses Motivs und Arbeitstheilung, Verkehr und Tausch selbst wieder beeinflusst haben. Hier liegen die auch methodologisch bedeutsamen Verdienste der „historischen Richtung“ insbesondere der Arbeiten Roscher's, Lamprecht's, v. Innau-Sternegg's, Bücher's u. namentlich G. Schmoller's u. A. m., wie andererseits aber auch von Rodbertus, Marx, Wagner, Grundlegung S. 360.

歴史派の攻撃に力を餘さざるラケナーの此言は最も公平を得たりと云ふ可し、唯何故に氏は Rodbertus をあげて *List* を加へざりしや、氏亦好む所に偏するか、非歟。

國民經濟は各國民の社會的生活の根本條件の一つたるに過ぎない。其外に尙國民の生存に必要なものは澤山ある。例へば家族社會宗教風俗習慣法律政治學問美術技藝教育等皆然り。國民經濟もまた是等と同じな地位を持つて居るものである。乍併或意味に於ては、國民經濟は是等色々な社會的現象の中で最重要なものとしてあると言つて差支ない。蓋し國民經濟は總ての人文文化の根柢であつて又其不可缺少要件である。國

民經濟の發展の度合は其國民の全體としての發展を支配するもので、人文進歩の度も亦之に支配せられて居るのである。但し其意味は、マルクスの物質的史觀論(68)と同一ではない。唯だ物質的文化の一定の最少量は個人に取つても、國民全體に取つても、心靈上道徳上、總ての向上的發展の必然的前提條件であることは、古往今來の歴史に徴して決して疑を挟む餘地なき現成の事實であること云ふ意味である。又物質的文化の上進は、よし道徳上の上進を持來さなくとも、少くも精神上の進歩を促す最も強い動力である(69)。之を世界の歴史に徴すれば、經濟上の進歩發達と一般の文化の進歩發達の關係は、第一、富の存在は一國文化の存在の必要條件であつて、殊に文明國なるものゝ存在に必要缺く可からざる條件である。第二、一國の經濟上の勢力の消長は、又同時に其國の政治上の勢力の消長を支配する。第三、富の一國各階級間に於ける分布の度は、其國に於ける文化及政治上の權力の所在を支配する而して、又同時に其國の國際的勢力の消長に影響する。第四、一國の經濟上の組織は、又其國の政治上の實際の權力の分配從て政治上の憲法に頗る重大なる關係を有して居る。以上四大項に歸するのである(70)。

(68) 物質的史觀論はカール・マルクスの根本學說にして、凡ての社會組織は生産及び之れに次では生産品の交換に依てのみ定めらるゝものにして、古往今來歴史に顯はれたる各種の社會形態は、要するに其富の分配並に之れに伴ふ社會階級の分布の上に於て全然何を如何にして生産すべきか、其生産せられたるものは如何に交換せらるゝかの問題によりてのみ支配せられたるものなりとなすにあり、語を換へて云へば、凡ての社會組織の變遷發展は全然生活上の問題、即ち經濟上の原因よりして來るものとなすなり。

物質的史觀論を批評したるものに、近來一好著述あり、米國コロムビア大學教授 Seligmann 著はす所 *Economic Interpretation of history* (1902 出版) と題するもの是れ也 (此書河上博士に「新史觀」と題する邦譯本あり)。蓋しセリグマンは幾多の二次的經濟學者に當める米國にありては、頭腦明晰構思亦深遠、嶄然一頭地を抜くの見解を持つるものなり、方今社會問題を論じ社會主義を口にするもの、先づ此種の嚴格なる學術的著述を精讀したるの後にあらざれば、斷じて口を開くの權なきものとす。

猶マルクスの物質的史觀論に關しては、後卷論述する所ある可く、又予に別に腹稿ありて、單行本として世に問ふ所あらんを期す。

マルクスに關する著述は、汗牛充棟も當ならず到底茲に列掲するを得ず、其物質的史觀

論を論評せらるゝの内に就て一般學者の推奨し而して必ず一讀を要するものは——
 Stammler, Wirtschaft und Recht. 1896. なり——之れに次ぐは Staudinger, Ethik und Politik.
 1899.——Barth, Philosophie der Geschichte als Sociologie. 1897.——Struve, Marxistische Theorie der
 sozialen Entwicklung. Braun's Archiv, Bd. 14. 1899.——Wolmann, Der historische Materialismus.
 1900.——Ludwig Stein, Die soziale Frage im Licht der Philosophie, 1897. 著す。——

猶 Stammler 氏別に Handwörterbuch der Statswissenschaften. 2. A. V. Bd. S. 425-737 に簡單
 に物質的史觀論の説明と批評とを試みたり、汎く諸書に渉るの違なきものは就て其大要
 を知るを得可し——但し Stammler の見解は予の悉くは首肯し難き處にして、氏の社會現
 象に法則を全然否認し、只管に Teleologie (目的による人爲行動) のみの見地よりして凡
 ての經濟現象を律せんとするが如きは予の極力排撃するを辭せざる所なり——前掲註
 (99) 並に獨立評論第八、九號續掲拙稿及内外論叢第二卷續掲經濟單位發展論第二編參照。
 猶 Roscher I. S. 56. 以下に Pöhlmann の筆に成る Der ökonomische Materialismus の一章あ
 り亦一讀を値す。——

(99) 之れ獨り Zufunktionalökonomien のみの主張する處にもらず公平なる見地に立つ
 凡ての道徳論者論理學者の又必ず説く所なり、其の一例として近來我邦に稱揚せらるゝ

Paulsen の言なちびん——曰く、

Durch die Gütersammlung, die die ursprüngliche Form des Eigentums ausmacht, befreit sich
 der Mensch aus der Knechtschaft, womit die Lebensbeteiligung des Tieres dem Augenblicksbedürf-
 niss unterworfen ist; und diese Freiheit ist wieder die Bedingung alles eigentlichen menschlichen
 Lebens: ohne sie wäre zusammenhängende Zweckthätigkeit, wäre geistiges, geistiges, geistiges Leben un-
 möglich. Hierdurch wird, was beim Tier Naturprozess bleibt, in die Sphäre des Sittlichen erhoben.
 Ethik mit einem Umriss der Staats- und Gesellschaftslehre 5. A. 1900 I. Bd. S. 52.

ハッセルセンが其倫理學に説く經濟論は極めて淺薄の説明に止り、予輩の經濟倫理論、
 稱するものに到らざる違きものありと雖も、茲に論ずる處は氏が特長の穩健公平の論斷
 と云ふ可し——

人は貴きも賤きも衣食なくては一日もおられぬ者なり、禮義は人の守るべき道なれど
 も、飢寒身に遇れば禮義をも忘るゝは人の常なり、管仲が言に倉廩實而知禮義、衣食足而知榮
 辱といへるは、人の禮義を知るは衣食に不足なく飢寒の患なき上のことと云ふ義なり。
 富國強兵は弱者の術と云ふは後の世の腐儒の妄説なり、堯舜より以來孔子の教に至る

まで聖人の天下を治むる道富國強兵にあらざるはなし富國強兵と云ふ内に富國は又強兵の本なり、——太宰純經濟錄第五卷食貨經濟雜誌社出版本一四四頁至一四六頁、猶 Wenckstern は此食貨篇を獨逸語に反譯して Staats- und Wirtschaftslehre Dazai Shundai's と題し Schmoller's Jahrbuch 1900 年度に掲げたり。

(70) 拙著勞働經濟論第一編第一節を参照す可し。

國民經濟の最終の歸趣はそれ自身に存せず、一個人一時代と其人々其時々の人類最終の目的に關する觀念、人生の最終の理想、即ち時代々々の世界觀竝に人生觀の異なるに隨つて又異なるを免かれない。何れの世、何れの國に取つても、人類の世界觀、人生觀が純然形而下のみに限られることは、縦し之ありとするも、それは一時の現象に過ぎない長い時、涉つて未だ嘗て之あるを見ない。茲に於てか國民經濟政策の最高の職分は、人類に經濟上の必然的基礎を與えて依つて以てそれより以上の人間最高の理想に向つて進行することを得せしむるにある。即ち國民經濟に屬する各員悉くに物質的文化の最低限、所謂生活の最少限を得せしめることは是である。然らざれば、人類大多數の心靈上、道德上の發

展は逆も望むことは出來ない。人類社會の見地よりすれば、是はそれ自身目的で無く、一手段たるに過ぎないのである(71)。

(71) 經濟上に於ける目的と手段に關する議論は、歴史派と正統學派と社會主義論者と各別るゝ所にして、最も潛心留意を要す可き問題なり、唯惜む從來の學者に此問題を系統的に詳論したるものなきことを、近來我邦に於て偶然的事情よりして倫理の範圍に於て、此問題に關する幾多の論争を見たるは、學問進歩の爲め甚だ喜ぶ可きことなり、——豈むらくは經濟學の範圍に於ても同様の問題の起るありて、學者の腦漿を絞るに到らしめんことを。

猶予は別に經濟上に於る目的と手段に關して、本書第四編經濟倫理論に於て稍詳細の論述を試みんと欲す、——今は假りに獨立評論に掲載せる「社會問題としての飢饉」(經濟學研究八四六頁以下) 並に國家學會雜誌續掲稿「トマス・ダキノの經濟學說」(經濟學研究五七一頁以下) 第四節以下を讀み置かんことを讀者に望むに止む。

乍併此最高の人生觀世界觀から見て手段たる國民經濟は、其自身の立場から見れば、目的である。そこで國民經濟の最高の職分に續いて國民經濟それ自身の職分がある。言

業を換へて言へば、人類最高の目的に關して其時代々々其一般の精神を衝突しない限に於ては當さに務むべき務めざる可らざる國民經濟の職分がある、それが即ち形而下の文化の向上的發展即ち總ての人類の欲望を經濟上の財に依つて出來得る丈け十分に充たし、管に現在の欲望の充足を得せしむるのみならず、兼て新らしい、より高い欲望を分量並に性質の上に於て益々増進發揮せしむると是である。欲望は常に益々増進して已む所を知らないものである、此欲望に出來る丈け充足する道を與えることが國民經濟それ自らの職分である。併ながら出來得る丈けに既に言ふが如く、各員の總ての欲望を悉く充つことは國民經濟の期するところで無い、何故なれば國民經濟の欲望充足は決して無限なるを得べきものでない。其國民の持つて居る一定の領土並に其領土から既に生じ又今生じ將來生ずべき財の量に依つて制限されて居る。故に國民經濟政策の職分としては、先づ第一に與えられたる土地から出來る丈け多量の財を生産すると、第二は斯く生産せられた財を各員間に分配するに當つて成るべく出來る丈け充分に各員の欲望を充つといふことである。然るに欲望の主體たる人間の數は多々益々増加して行つて止るとを知

らないものである。是に於てか國民經濟政策の第三の職分としては其一定の土地に住んで居る多々益々増殖して行く人間の欲望を充つに方り、欲望は管に分量上のみならず實質上も亦増進して行くのであるから、限られたる土地を以て限りなき欲望を充つ爲には、一方に於ては其財の獲得並に充用に方つて最少の勞費を以て最大の結果を得るこいふ合理的方法（所謂經濟の本則）を成るべく完全に行はしめるを肝要とする。人口増殖し其欲望上進すればする程、此本則は益々行はれなければならない⁽⁷²⁾。他方に於ては此く獲得し此く充用する人其者が財を獲得する根本たる生産力を増加するを要する。即ち國民經濟の職分は欲望充足の爲に財を分配するに當つて、決して各人に均一にすることは不可能である。經濟行爲に従事する人の生産力を増加するに足るべき様に財を分配することが必要である。即ち先づ經濟行爲に従事して居る者並に其家族には少くも充分に欲望を充足せしむる丈けの財を供給することを以て第一の急務とする。蓋し此くするにあらざれば、人間の生産力を増す道は無い、人間の生産力が増さなければ限られたる土地から多々益々増加する欲望を充すべき財を得ること出來ないからである⁽⁷³⁾。

故に最少の勞費を以て最大の結果を得るを務むるに當つても、亦此職分を衝突しない限に於てせなければならぬ。彼經濟上の利己主義を稱する各人個々勝手に經濟の本則に従つて活動することは到底許されない。一國民經濟全體として最少の勞費を以て最大の結果を得るてふ經濟本則を守るとを努めなければならぬのであるから、之を各個人から言へば時として經濟の本則に全然反對する様な行動に出でなければならぬことも亦あり得る。總ての人の總ての欲望を充すことは到底不可能である。經濟上に於ては各個人の利害は悉く調和するものではない(74)。又各特殊經濟の利害を國民經濟の利害とは必ずしも何時でも合致することは云へない。各特殊經濟が最少の勞費最大の結果なる經濟本則を無限に遵奉する以上は利害の一致は到底望まれないのである。各特殊經濟の立場から見れば、制限節制は必ず辭す可からざるのである。此は決して獨り道徳上の考から來るので無い、國民經濟の見地に立てば必ず此くせなければならぬのである(75)。

(72) 經濟の本則は絕對常住に行はるゝものに非ずして人口の増殖欲望の増進に伴つて益々其行はる可き範圍を擴張するものなるを明瞭にせるは歴史派諸氏の説す可から

ざる功績にして殊にブレンタノ先生の研究は最緊要なるものなり——Lujo Brentano, Die klassische Nationalökonomie, Wiener Antrittsrede, 1888, Gesammelte Aufsätze Bd. I, 1923, SS. 1—33.

(73) 是れ元と Malthus の人口論によりて經濟學者の注意するに到れる問題にして近時新マレス主義と唱ふるもの亦此問題の解決に腐心するものあらざるはなし然れども之れを以て生産力の増進、從て經濟單位の縮小的の發展と關連せしめて論じたるものに至ては未だ多く之を見ず、是アダム・スミスが Parsimony, not industry, the cause of increase of wealth (Wealth of Nations, Routledge Ed. p. 259, et infra, Cannan edition p. 319) と云くを議論に深く感觸するの致す所にあらずらんや——猶第二卷人口の章に至り詳述す可し。

(74) 經濟上凡ての利害の悉く一致するものなるを主張せるは佛國の經濟學者 Bastiat たり其著を Les Harmonies économiques と稱し 1850 第一卷を公けし猶續卷を公刊する筈なりしも Bastiat の死後其遺稿を尋ねて僅かに數章を得たるに過ぎず此書によりてバ氏の名聲赫著するに到りしと雖も實は其創思に出づるにあらずして多くは米國の學者 Carey の著 Principles of political economy (1837 年第一卷出版) に主唱せる處を祖述せるに過ぎず而もバ氏の巧盡なる之れを以て全然自己の創思に出るとなし以て保護主義並に社會主義の議論を打破すと呼號す於て Carey は 1851 年一月發行の Journal des Economistes

に一番を寄せてバスターアの劉勃を責めしが、當時バ氏は既に垂死の境にありて極めて簡単にして不得要領なる答辯を病床より同雜誌同月分に寄せたるに過ぎざりき。Careyは再び1851年五月分同誌に之れを辯駁せしがバスターアは既に幽明其界を異にし之れに答ふる能はず、永く劉勃の嫌疑を晴らすに及びざるなり、——

蓋しバ氏は1846年に出版せる社會主義論者 Proudhon の Systeme des contradictions économiques に反對して Harmonies を主張したるなり、——プルードンは經濟學者の所説の悉く自家撞着し、殊に其價值論に至ては理義の上より見て支離滅裂なるを證明し、之れに基く現經濟社會辯護論の全然根據なきものなることを盛んに唱道し、佛國の人心爲めに少からず動搖せり、——之れ經濟學者を以て任ずるものゝ看過し難き所にして、バスターアは自ら好んで其代表者となり正統派の爲めに多大の氣憤を吐きたるものなり、——

近來佛國經濟學者の巨擘 Leroy Beaulieu 佛國大學院に於て Proudhon の Contradictions économiques の論評を主題とせる講演を開く予も一九〇〇年より一九〇一年に涉りて其題に列ることを得たるが、ホ氏は元と正統派に屬する學者なれども其把持頗る公平亦當年のバスターアの如きものにあらず、先生は近く其講演を公刊するの機ある可しと傳ふ予輩の世上の學者と共に翹首して待つ所なり、——附記、此書既刊なり。

(75) ヲグナーは經濟生活を組織する原則 volkswirtschaftliche Organisationsprincipien に三條ありとす、即ち

(1) 私經濟又は個人的 privatwirtschaftlich oder individualistisch.

(2) 共同經濟的 Gemeinwirtschaftlich.

之れを小分して

a. 強制共同經濟的 Zwangsgemeinwirtschaftlich.

b. 共產・社會的 Communistisch-socialistisch.

(3) 慈善的又は寄附經濟的 Caritativ.

之れに activ 即ち與ふるものと passiv 即ち受るものとの別あり、

是れなり、——而して從來の經濟學が唯其第一の原則のみの行はるゝとなすの誤りなることを極論せり、——予は氏の共同經濟の説明には滿腹の同情を寄するに躊躇せずと雖も Caritatives Princip を特に列掲するの段は斷じて取らざる處なり、——國民經濟に行はるゝ主義獨り私經濟的原則のみならざるは最近の學者の説く所にして、ヲグナー獨り然るにあらずと雖も、兎も角三種の異なる原則あることを系統的に詳論したるは學界の氏に負ふ所少なからざる所なり、——然れども是れも亦ヲグナーの創見に出づるにあらず

Schäffle 氏其の著 Gesellschaftliches System der menschlichen Wirtschaft z. A. S. 62-64.
S. 331. ff. 3. All. 20. 24. 83. 89. 103. 等に於て之を論述し

(1) Speculative (kapitalistische, privatwirtschaftliche) Organisation.

(2) Oeffentliche Organisation.

(3) Wirtschaftliche Organisation der freien Hingebung oder des Widmungwesens.

の三に分けて詳論せり。

猶マクナリーの所論に對して最も有力なる批評を加へたるは E. Sax, Grundlegung der theoretiſchen Staatswirtschaft SS. 172. 179. 183. なる猶 Gross 氏其 Wirtschaftformen und Wirtschaftsprincipien 1888 並に „Gemeinwirtschaft“ im Handwörterbuch der Staatswissenschaften に於て能くマクナリーの弱點を示めし、代ふるに自己の所説を以てせり。——其思想の透徹せる論斷の創案に當める到底マクナリーの遙かに及ばざる處とす。——猶關係書目にあじたる Cohn の論文を参照するを要す、其他に至りては第五卷に於て予が所説を詳述するを待て。

此く國民經濟存在の理由は、人生最高の目的たる向上的發展を遂ぐる一の前提條件たると共に、各特殊經濟其自身の生存に必要不欠可からである(76)。然るに各特殊經濟が無制限に其經濟上の利益を伸張する時は全體たる國民經濟は存立することが出来なくな

る。即ち國民經濟上から言へば經濟の本則の個人的活動を妨げなければならぬのみならず、特殊經濟の見地から見ても、國民經濟の發展は亦各特殊經濟發展の根本條件であるから、此れに對して制限を加ふるは其最終の利益に合致する所以なるのである。

(76) 國民經濟存在の重要な理由として、それが特殊經濟の發展に缺くべからざるものを明確に論斷したるものは甚だ稀なり、——是れ予が經濟單位と經濟組織の相關的發展に關する確信より出づる論斷なり、——猶後卷の詳述を期す。

以上を要言すれば國民經濟は各經濟單位を包含する全體として其存立に必要な缺く可からざる組織で、其政策の第一の職分は人間たるに足る生活を營むべき基礎を各人に與ふるに、並に經濟行爲に従事する者の生産力を益々増進せしめて行くことである。而して此の如き經濟組織の依つて立つ所以の土地は制限せられて容易に増加すること出来ぬものである。反對に此土地に住ふ人間の數は常に増加して行くのみならず、其人間を驅て經濟上の活動を爲さしむる欲望は數量并に實質上常に向上増進して行くものである。之を充すのが國民經濟政策其自身の第一の職分であつて、國民經濟存立の理由

は此職分を充たすに存するのである(77)。

(77) 國民經濟存在の理由は萬古不易東西一貫せるものにあらず、——本文言ふ所は今日の現状を總括して示したるに過ぎず、——向後の發展は果して此國民經濟の存在を必要とせざるに到ること過去に於て然りしが如くなるべきや否や將亦是れが發展の徑路は所謂世界經濟 Weltwirtschaft に集中し來る可きや否やは經濟學研究の最終問題にして予が本書の最終部即第五卷に於て國民經濟の發展と題して稍詳論を試みんと欲する所以なり、——本文に於て普通經濟學者の所爲に異を立て、言毫も世界經濟の定義に及ばざる所以は予に信する所ありてなり、——然れども第五卷に到達する前に屢々此語を襲用することあるべきが故に茲に其意義を説明し置くは一應の便宜ならん。

Roscher は世界經濟を説明して次の如く云く、

Zu einer Menschheits- oder Weltwirtschaft lassen sich bis jetzt nur bedeutende Vorbereitungen nachweisen. Man rückt ihr näher durch den immer kosmopolitischen Charakter der Wissenschaft, die wachsende internationale Arbeitsgliederung, die Verbesserung der Transportmittel, die zunehmende Auswanderung, die grössere Friedfertigkeit und Toleranz der Völker u. S. 32.

ロセナーの Impräcision は亦茲に實現はるべきなり。

シテロセナー曰く、

Sie (Volkswirtschaft) beruht ebenso auf der Verflechtung aller Einzelwirtschaften in einen unlöslichen Zusammenhang durch den freien Tausch- und Handelsverkehr, als auf den wachsenden einheitlichen Wirtschaftseinrichtungen von Gemeinde, Provinz und Staat. Der Begriff der Volkswirtschaft will eben das Ganze der nebeneinander und übereinander sich aufbauenden Wirtschaften eines Landes, eines Volkes, eines Staates umfassen.

Die Gesamtheit alles wirtschaftlichen Lebens der ganzen Erde stellen wir uns, nachdem wir diesen Begriff gebildet, als eine Summe geographisch nebeneinander stehender und historisch einander folgender Volkswirtschaften vor. Die Summe der heute einander berührenden, in gegenseitige Abhängigkeit von einander gekommenen Volkswirtschaften nennen wir die Weltwirtschaft. Grundriss, S. 4-5. (11-12. Taus. S. 4.)

是れを以つて見れば世界經濟は相互相依相須む處の國民經濟の合計を云ふとするなり。

ロセナーの定義も亦これに類似す、曰く、

Die Weltwirtschaft ist der Inbegriff der miteinander verkehrenden Einzelwirtschaften vieler, schliesslich aller Völker oder Volkswirtschaften der Erde. Innerhalb dieser gesamten Weltwirtschaft lassen sich in bestimmten Zeiten wieder *Volkswirtschaftsgruppen* unterscheiden, welche sich in einigen Beziehungen gegen einander ähnlich abscheiden wie die Volkswirtschaften. Sie werden mitunter ebenfalls „Weltwirtschaften“ genannt. S. 361.

即ち氏は東洋世界經濟と西洋世界經濟の二者は相對せず、*Volkswirtschaftsgruppen*なりと云ふ。

シムロー並にワグナーの此の定義は其經濟の定義と全然拮抗相容れざるものなり、氏は經濟を定義して「前掲註⁽⁶⁵⁾」*plano*ll nach dem ökonomischen Princip erfolgenden Arbeitstätigkeiten in einen *geschlossenen* oder als *geschlossen* gedachten menschlichen Bedürfnis- und Befriedigungskreis (S. 349) の總計を云ふと云ひ、シムローも *abgeschlossenes* 又は *reales Ganzes* なる文字を屢々用ひ「註⁽⁶²⁾」然るに世界經濟は誰が其 Plan を定むるや如何にして經濟の本則の遂行を企ふするや假りに一步を譲り國民經濟も亦此 Plan と其 Subject とに於て完からざるも猶經濟とするにあらずやとの反問を許容するとするも今日の實狀に於て獨逸聯邦、北米合衆國等を一の世界經濟と見れば兎も角（或人は此故に此等は國民經濟にあら

ず聯邦經濟と名く可きものなりと云ふ）廣き意味に於ける世界經濟は如何なる意味に於て *geschlossen* 又は als *geschlossen* gedacht なる可きや？ 人間以外の動植物界に對してか？ 地球以外に對してか？ 造物主に對してか？ 將亦有色人種に對して白色人種の全體を云ふか？（此考は必ずしも歐洲經濟學者の腦中に全く存在せずとは斷言し難し）或は又經濟生活以外の總體に對してか？ 其何れよりするもワグナーは單純なる經濟なる文字によりて解する處と複合名詞として用ゆるときは全然異なる意義を附するの非難を辭する能はざるなり、——經濟學の最根本概念に關して經濟學の泰斗が如此曖昧を許認する抑も何故ぞや。

此一見不可思議なる現象を解せんとするには經濟なる文字は漸次歴史的に其意義の上に於て擴張發展を遂げたる者なるを悟らば易々たるのみ、——初め希臘語の *οικονομία* スはワグナーの言ふが如き家事經濟の秩序のみを意味したり、然るに漸次其意味は擴張して此秩序を實行する爲めの組織も亦經濟と稱せらるるに至りて國民經濟なる用語は普及するに至れり、——然るに近時國際的交通の頻繁を加ふるや、其間の經濟的關係は單に偶發的間歇的のものにあらずして常住的秩序的のものとなり、其間に亦國民經濟の一層範圍の大なるが如き或る種の定規と組織をさへ現出するに至りて、經濟なる文字を又

之れに準用して世界經濟と呼び經濟の語は一層意味を擴めたり、——是れに最も類似する事例亦た法律生活にも存す、即ち元と法律なるものは血族種族等の如き小團體の共同生活の規則なりしもの、漸次に擴張して全國民に普き規則となり、國家の發生とともに最高の主權者の制裁の伴ふこと必要なる條件となりしかども、國際間の法律關係漸次頻繁を加ふるや、又此間に一定の規則らしきもの生じ、之れを國際法と名けたり、——法律なる語の意味は如此漸次擴張的發展を遂げ國際法なる用語に於て其用法は殊に廣汎なるものとなり、必ずしも一國家又は統治權なる要素なくんば法律にあらずとなすを要せざるに到ること、恰も必ずしも一定の Subject 并に經濟上の Plan 遂行を以て經濟なる觀念の不可欠要素とせざるに至れるが如し、——故に此の擴張的發展を悟るに及ばざるものは、今日未だ國際法は法律にあらずと主張するなり、如此論者より見れば、世界經濟は亦經濟にあらずと云はざる可からざるなり。——

予は世界經濟の觀念を本文に於て説明せざるは、即ち先づ國民經濟を最終最高の形態とする處まつを熟知したるの後、論世界經濟に及ぶを以て便と信ずればなり、——

Während die Verschmelzung von Nationen, Staaten, Kirchen einen langwährenden geistigen Prozess voraussetzt, greifen die verschiedenen Volkswirtschaften der Erde tatsächlich in einander über

und gestatten keine scharfe Abgrenzung. Man hat dieser Thatsache Rechnung getragen und den Zusammenhang der verschiedenen Volkswirtschaften unter einander als Weltwirtschaft bezeichnet. Die Einheit, welche durch die Weltwirtschaft repräsentirt ist, trägt noch ein etwas lockeres Gefüge, wird aber durch die Entwicklung der internationalen Verträge, eines internationalen Privatrechts und vor allem auch durch die allmähliche Ausbildung eines internationalen Gemeinbewusstseins in der letzten Zeit sehr gefördert. Philippovich, Grundriss, 4 A. 1901. S. 16.

予が自己の説明を與ふる途は假に此フキリッホツキッチの定義を玩味して満足し置くも亦妨げなし。

第二編 經濟組織の發展

第一編に於て今日の經濟組織たる國民經濟を形成する概念を説明したれば更に進んで抑も經濟生活の組織は如何なる種類があるかを是等各種の組織は如何なる史的發展を経て今日に至つたものであるかを知らなければならぬ。既に前編に於て今日の經濟上各般の現象は、一の國民經濟なる經濟組織内に活動する者であつて此國民經濟は數十年間の史的發展の結果であるを云ふことを言つた。されば今日國民經濟の真相を究めるには之れに到つた順序を知らなければならぬのである。

國民經濟とは何を謂ふかに關しては從來二個の全く相反對する學説がある。一は個人主義説であつて、一は社會主義説である。二説共に今日の經濟組織の成立並に其發展を説明するに足らず更に新たななる見解を執らざる可らざるに到つた科學的研究の發展